



東京シンポジウム
鞠智城
2015
成果報告書

「律令国家と
西の護り、鞠智城」

古代山城の中での
鞠智城の役割・機能を考えるとともに、
東北の古代城柵と比較する

KIKUCHIJO TOKYO SYMPOSIUM

鞠智城東京シンポジウム 二〇一五

律令国家と西の護り、鞠智城

〔古代山城の中での鞠智城の役割〕

機能を考えるとともに、東北の古代城柵と比較する

鞠智城東京シンポジウム

律令国家と西の護り、鞠智城

～古代山城の中の鞠智城の役割～

機能を考えるとともに、東北の古代城柵と比較する～

一、開催日時等

日時：平成二十七年九月六日（日） 一三時〇〇分～一七時四〇分

場所：明治大学アカデミーコモン・アカデミーホール

主催：熊本県・熊本県教育委員会・明治大学日本古代学研究所

後援：水城・大野城・基肄城一三五〇年事業実行委員会 明治大学博物館

明治大学社会連携機構 福岡県教育委員会 熊本県文化財保護協会

二、講演等プログラム

・報告 「鞠智城跡の調査成果概要と取組み」

西住 欣一郎（熊本県教育委員会）

・基調講演 「鞠智城と古代日本東西の城・柵」

岡田 茂弘（国立歴史民俗博物館名誉教授）

・講演一 「古代山城の建物―鞠智城と大野城・基肄城―」

赤司 善彦（福岡県教育庁総務部文化財保護課長）

・講演二 「平安期における鞠智城

―九世紀～一〇世紀の対外関係と「菊池城院」「菊池郡城院」―

加藤 友康（明治大学大学院文学研究科特任教授）

・パネルディスカッション

コーディネーター 佐藤 信（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

パネル一 岡田 茂弘（国立歴史民俗博物館名誉教授）

赤司 善彦（福岡県教育庁総務部文化財保護課長）

加藤 友康（明治大学大学院文学研究科特任教授）

西住 欣一郎（熊本県教育委員会）

目次

シンポジウム概要

主催者あいさつ 1

熊本県副知事

小野 泰輔 2

明治大学日本古代学研究所長

吉村 武彦 4

報告 「鞠智城跡の調査成果概要と取組み」

西住 欣一郎 7

一、鞠智城跡の位置と環境 8

二、文献に見る鞠智城跡 10

三、調査成果の概要 10

四、総合報告書を基にした研究の深化 13

五、調査成果を活かした取組み 13

一、はじめに

- (一) 鞠智城の調査整備と私 ―これが古代山城跡か?― 18
 (二) 史料に乏しいが存続期間が長い鞠智城跡 20

二、史料による古代の城・柵の変遷

- (一) 西南日本の山城 ―新羅に対する備え― 21
 (二) 東北日本の城柵 ―蝦夷(えみし)に対する備え― 22

三、東北日本の城柵跡

- (一) 仙台部山道跡(七世紀後半～八世紀初頭) 24
 (二) 多賀城跡・秋田城跡(八世紀中葉～一〇世紀) 28

- (三) 桃生城跡・伊治城跡(八世紀後半) 34

- (四) 胆沢城跡・志波城跡(九世紀初頭～) 36

四、発掘調査成果による鞠智城の変遷と西海道の画期

- (一) 鞠智城跡の遺構期と唐居敷・屋瓦・土器の制作時期 37

- (二) 鞠智城の創建 41

- (三) 藤原広嗣の反乱と乱鎮庄後の鞠智城 45

講演一 「古代山城の建物―鞠智城と大野城・基肄城―」

赤司善彦 47

はじめに 49

一、大野城・基肄城の建物の動向

- (一) 大野城の建物 54

- (二) 基肄城の建物 63

二、鞠智城の建物の動向 64

三、鞠智城の倉庫群の形成 70

四、倉庫形成の目的 71

講演二 「平安期における鞠智城

―九世紀～一〇世紀の対外関係と「菊池城院」「菊池郡城院」― 加藤友康 73

一、鞠智城発掘調査の到達点の確認 74

二、平安時代の史料からみた鞠智城

- (一) 四つの史料 76

- (二) 倉と庫 77

- (三) 「鳴動」記事の特質 82

三、平安期の対外意識と輿智城

(二) 対外意識の三つのレベル 83

① 大宰府・地方官司の意識 84

② 「任地」(現地の民衆)の意識 85

③ 中央政府の意識 86

(二) 中央政府の「危機」意識と対外政策

① 引き金となった事件 86

② 発生場所としての肥前・肥後 88

おわりに 89

パネルディスカッション 91

付録 参考資料 48

講演二 資料(加藤 友康) 31

講演一 資料(赤司 善彦) 21

基調講演 資料(岡田 茂弘) 11

報告 資料(西住 欣一郎) 1

シンポジウム次第

【資料編】

※今回の成果報告書を刊行するにあたって、当日使用した資料を「資料編」として巻末にまとめました。

主催者あいさつ

主催者あいさつ①

熊本県副知事 小野泰輔



只今ご紹介をいただきました熊本県副知事の小野と申します。本日は鞠智城シンポジウムに、二階席まで埋まるほどの多くの皆様にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。昨年也非常に多くの方々に足をお運びいただき、鞠智城の歴史的な価値というものが年々高まってきているのかなという思いがしています。本日は、先ほど司会の方からもお話がありましたように、鞠智城の古代山城としての価値にクローズアップする形で、先生方からいろいろお話いただき、議論いただくことにしています。国立歴史民俗博物館名誉教授の岡田茂弘先生をはじめ、講師の先生方におかれましては、お忙しいところに貴重なお時間をいただきましたことに深く感謝申し上げます。そして、明治大学の日本古代学研究所をはじめ、関係者の皆様には、この会場のご提供も含めまして、多大なるご尽力をいただいたことに深く感謝いたします。

さて、鞠智城は、多くの皆さまがご存じかと思いますが、今から一、三〇〇年余り前に、唐、新羅の侵攻に備えて、大和朝廷により築き上げられた古代山城です。平成一六年二月に国の史跡に指定を受けました。その重要性に鑑みて、本県では長期にわたり、保存と整備・活用に向けた取組みを進めています。

現在、鞠智城は年間一〇万人の方々を訪れる歴史公園として育っています。

一方、研究も着々と進んでおり、三〇〇年間も存在し、五期におよぶ改修、変容がなされていることが分かってきています。これは、他の古代山城には見られない特徴だと思っています。そしてこれまで数々の論文や調査研究の報告がなされており、本日も、そのようなものがさらに発展していくものと期待しています。

本日のシンポジウムにおいては、講師の先生方のご講演、ディスカッションを通じて、西日本の古代山城の中での鞠智城の意義、役割を考えるとともに、東北の古代城柵とも比較していただき、皆様のさらなる理解につなげていただければと思います。

今年、「百済の歴史地区」が韓国において世界文化遺産に登録されました。鞠智城においても百済との密接な関係が認められる、さまざまな遺構や、銅造の仏像なども発見されています。さらに鞠智城の構築についても、百済とのつながりが多く認められています。東アジアの中の鞠智城の存在意義という観点でも、いろいろな議論がなされるのではないかと思います。

最後にこのシンポジウムを通して、鞠智城の歴史的な意義がさらに明らかにになり、皆様のご理解が進むことを期待しています。本日は、最後まで楽しんでください。

主催者あいさつ②

明治大学日本古代学研究所長 吉村武彦

皆さん、ようこそ明治大学にいらつしやいました。心から歓迎します。只今ご紹介いただきました明治大学日本古代学研究所長の吉村と申します。実は明治大学では本日滋賀県の大津市で全国校友大会を開催しています。福宮賢二学長をはじめ、石川日出志文学部長兼文学部研究科長ら、大学の役職者はすべて滋賀県のほうに出張しています。そのため、明治大学を代表して私があいさつを申し上げます。



昨年「律令国家の確立と鞠智城」と題するシンポジウムが明治大学で開催されました。私も基調講演をしましたが、昨年引き続き今年度も明治大学で開催されますのは、明治大学の社会連携、地域連携の発展に
とって荣誉なことと考えています。明治大学は創立が一八一（明治一四）
年で、今年で一三四年が経ちました。三木武夫、村山富市という二人の総理
大臣が出ています。また、この数年間、受験生が一〇万人を超えています。
マグロ養殖で知られる近畿大学というものが、この二年間は一位を譲つ
ているのですが、関東では今年度も人気を保っています。実は私もこの一〇
年間の大学の変化に驚いている一人ではありますが、この背景には教育への
熱意だけではなく、研究に対する積極的チャレンジがあることは間違いない
と思います。

明治大学では、研究のレベルに合わせて三段階の研究所があります。一番上がインスティテュートですが、
その中の二番目が研究クラスターになっています。それに採択されて、テーマは「日本列島の文明化を究明
する日本古代学の国際的構築」というものを標榜しています。日本古代学研究所を立ち上げ、五年目を迎え
ました。この一〇年間にわたり、文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の資金援助を受けてい
ます。また昨年、二〇一四年度から二度目になりますが、「日本古代学研究の世界的拠点形成」に採択されて、
現在世界的拠点を目標として奮闘中です。文部科学省の支援を含めると、五年間で総額一億一三三七万円にな
るといふ、人文分野にとってはかなり大型の研究になっています。このように私たちは古代学研究の世界的
発信を目指しているわけですが、昨年私が韓国の高麗大学校で、「白村江の敗戦と鞠智城」というテーマで
講演をさせていただきました。鞠智城も、建設時のように国際化しつつあるし、明治大学も協力ができてい
るのではないかと思います。

しかし日本古代学研究所としては国際化にとどまらず、日本国内の地域連携も重視しています。昨年はこ
のシンポジウムに引き続き、鞠智城の温故創生館の方や装飾古墳館長をおよびして、熊本県の古代文化の紹
介に努めました。私は古代史が専門ですが、九州の有明海沿岸の古代史研究はまだ発信が強いとはいえない
と思います。来年度は大学の予算がつきまじしたら、私たちが熊本へ出かけて講演会を開くことを計画してい
ます。うまくいけば、皆さんと一緒にフィールドワークができればと思います。明治大学と熊本県の連携が
強化されることを祈念してあいさつに代えます。本日はよろしくお願ひします。

報告 鞠智城跡の調査成果概要と取組み

報告者紹介

西住 欣一郎（にしずみ きんいちろう）

熊本大学大学院文学研究科修士課程修了。熊本県文化課で埋蔵文化財担当、鞠智城跡調査主査、課長補佐を経て、現在、熊本県立装飾古墳館分館「歴史公園鞠智城・温故剱生館」館長。鞠智城の調査成果を活かした活用にとりして従事。

報告「鞠智城跡の調査成果概要と取組み」

歴史公園鞠智城・温故創生館長 西住欣一郎

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました鞠智城の西住といいます。本日はこのようにたくさんの方の中にご報告をすることによって緊張していますが、逆にやりがいを感じているところです。頑張ってきたと思いますのでよろしくお願ひします。

一、鞠智城跡の位置と環境

古代山城の分布をみますと、鞠智城は古代山城の中で一番南に位置しているわけです。九州の大宰府を護る大野城、基肄城、そのさらに南、一番南に位置しています（資料編48頁上図）。このお城が造られた経緯となるのが、六六三年、白村江（はくすきのえ、はくせんこう）の戦いに、日本は負けてしまっています。それとどうとう唐、新羅の連合軍が日本に攻めてくるのではないかとということで、防衛ラインを築いていくわけです。その防衛ラインは、まず九州では大宰府を護ろうと、最前線基地として対馬に金田城を造りました。それからこのような北部九州、瀬戸内、そして畿内へのルートを考えてと思うのですが、瀬戸内海沿いに古代の山城を築いていくという環境の中で、鞠智城が造られていることになりました。ここで注目したいのは、

一番南にお城があるということです。これが鞠智城のポイントではないかと思っています。

次に、山鹿市、菊池市にまたがって、鞠智城は造られているわけですが、有明海に流れ込む菊池川がありまして、この菊池川の河口から約二七キロの場所にあります。菊池川でいいますと、菊池川の中流域と比べていいのではないかと考えることができます。非常においしいお米が取れる流域です。菊池米というように、大阪の米相場を左右するくらい、いいお米が取れる、そのような生産基盤を持った場所に鞠智城は位置しています。

次に、鞠智城は、土塁は崖と合わせて約三、五キロの長さになります（資料編2頁第1図）。面積は約五五ヘクタール程です。もう一つの特徴になるとありますが、古代山城というわりには非常に低い場所に立地しています。標高が九〇メートルから一七一メートルで、山というよりも台地といったほうがいいのではないかと思ひます。平らな低い場所にお城があるというのが、一番目の特徴ではないかと思ひます。

そして長者原地区に様々な建物群がありまして、北に谷が入っています（資料編3頁写真1）。また南側の三方所に門が確認されています。北側の谷の部分には、後でご説明しようと思ひますが、古代山城では日本で初めて貯水池が確認されています。鞠智城はこのような構造をしています。



二、文献に見る鞠智城跡

鞠智城については、遺構だけではなく、歴史書の中に文字資料として残っています(資料編3頁資料1)。「続日本紀」「日本文徳天皇実録」等に鞠智城のことが出てきます。ここで注目しなければいけないのが「続日本紀」ですが、西暦六九八年に改築をしたとあります。できているものを一度修理したという記事が出てくるわけです。六九八年より以前に築造をされているということが記録から分かります。

三、調査成果の概要

熊本県教育委員会は昭和四二年に第一次調査を開始して、それから平成二二年度まで三二回に及ぶ調査をほぼ継続的に行ってきました。その成果をまとめた鞠智城の総合報告書(熊本県文化財調査報告第二七六集『鞠智城跡Ⅱ・鞠智城跡第八〇三二次調査報告・二〇二二』)を、文化庁のご指導を受けながら作りました。その中に書かれていることを今から概要としてお話します。

鞠智城は年代とともに大きく変化をしていきます。その変化の特徴を捉えていくと、最初の造られたところから五つに分けることができました(資料編6頁第3図)。その最初を1期と呼んでいます。1期で示したように、網掛けしている場所に建物が建っていたのではないかと考えているところです。1期です。出上しているいろいろな遺物などで、考古学のほうは年代を決めていくのですが、7世紀後半ぐらいにはあったのではないかということが分かるわけです。先ほどの「続日本紀」の記述とあまり矛盾しない

ような内容になっています。

その1期を創建期と呼んでいます。まず外郭線上に門を築き、土塁を築造しています。これがその中の一つの門の堀切門を発掘したときの状況(写真1)で、これは西側の土塁を半分に分けて、その断面を見ている写真(写真2)です。先ほど言いましたが、日本の古代山城では初めて発見された貯水池ですが、湧き水です。当時の生活の飲料水として使うこともできますが、もう一つの特徴として、建物を建築する木材を水漬けにして保管する貯木場(写真3)も見つかっています。この1期というのは、古代山城として必要最小限の機能を備えた段階ではないかと現在では考えています。

本日のお話のポイントになってくるとおもいますが、第2期というのが、先ほど言いました改築の記事、六九八年の時期と重なるわけです。ここで注目していただきたいのは、直角に交わってL字に似ている特徴



写真1 堀切門・門跡と道路跡



写真2 西側土塁線・土塁跡



写真3 貯水池跡・貯木場跡

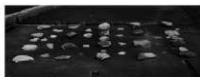


写真4 65号建物跡



写真5 20号建物跡



写真6 56号建物跡

的な建物群があるということ、建物群を囲むための溝が見つかっているということですが(資料編5頁第2図)。現在、鞠智城の中で建物群が七二棟見つかっています。その中で直角に、し字に配する建物群を取り囲むような構造をするのは、ここだけに見つかって

います。これは後ほど本日講演をされます先生方のお話に関連しますので、ここで誇張して報告したところでは、第Ⅱ期のもう一つの特徴ですが、出土する土器の量がこの時期は非常に多いということです。

次のⅢ期は転換期と呼んでいます。八世紀の第Ⅰ四半期の後半から第Ⅲ四半期にかけてです。ここで建物の構造で、地面にそのまま穴を掘って柱を建てる建物を掘立柱と呼びますが、これに対して、基礎となる石を地面に据えて、その礎石の上に柱を建てるという礎石の建物が出現します。それが第Ⅲ期になります。このように礎石が重複して建っていますが、最初の建物は比較的小さいものになります(写真4)。これがⅢ期の一つの特徴です。

Ⅳ期になりますと、先ほどの礎石の建物が今度は大きな石に変わっていきます(写真5)。先ほど言いました池やし字形に囲んでいる建物は中核的なものと考えていますが、そこがなくなり、倉庫が中心となるような機能に、ここで変化をするのではないかと、いうことで変革期と呼んでいます。Ⅴ期は最後になります。柱が建っていた場所に人が建ちますと、その大きさが大体わかるかと思いますが、非常に大きな礎石の建物になります(写真6)。最後の段階になっても建物を造り続けており、約三〇〇年間の最後の姿です。礎石建ちの建物を何と言ったらいいのでしょうか。ふつう建物といえは側柱だけです、床を支える総柱の建物になっていますので、食糧を貯える倉庫ではなかったかと考えているところですが。

四、総合報告書を基にした研究の深化

今までは発掘調査の成果の話をしてきたわけですが、私どもとしては、その成果を活かした様々な研究や活用を行っていくわけですが、今からそのようなことを若干ご紹介したいと思えます。

まず総合報告書が出たということで、研究する基礎的な事実がある程度まとまったので、「論考編」を刊行するなど、研究を進化させていくという活動も一部では行っています。また出土した土器や瓦の生産地を推定するための基礎的な研究書をまとめるということも行ってきました。

五、調査成果を活かした取組み

私どもとしては平成二二年度から、鞠智城の価値を皆さんに知っていただく目的で、ほぼ継続的に各地で

シンポジウムをやっています。それぞれ違うテーマで事実を迫ろうという試みをしてきており、本日ここでシンポジウムでも、古代山城の役割を古代城柵と比較するというところで、一つテーマを絞って考えてみようということを設定をしています。

また「特別研究」ということで若手研究者、四五歳以下の方に研究をさせていただいたための助成金を県のほうで準備しています。平成二七年度は増額になりました、一人五〇万円ほどの助成金を出して研究を進めているところです。熊本市のほうで、その結果の成果報告会ということを毎年やっていますが、非常に多くの方に来ていただき、盛況なうちに実施しているところです。その成果をまとめたものを「鞠智城と古代社会」という論文集を一号から三号までまとめることができています。

今までは研究者向けの話ですが、皆さんに古代の東アジアの中で非常に激動する時期のロマンを持っていただくといいことで、一般向けの紹介本も作っています。一号から六号まで、それぞれ特色ある内容で分かりやすい解説書になっています。さらに大人だけでなく子供にも分かってもらわなければ意味がないので、さらに言葉優しくして分かりやすい紹介本も作っています。また、もう少し歴史が分かる愛好家の方に知っていたらどうということ、『歴史読本』という雑誌がありますが、そこで、本日パネルディスカッションのコーディネーターをしていたく佐藤先生と浦島知事、五百旗頭先生の三人で開談が行われました。

平成二七年度もさまざまな取組みをしていますが、どちらかというと、教育の現場で、鞠智城をどのようにしていこうかということを考えてやっています。その一つが、鞠智城の北にある城北（しろきた）という

地元の小学校で鞠智城の講演会をしています。また、後ほどお話が出ますが、志波城という東北の古代城柵で、「しわまろくん」と「ころくん」のゆるキャラ同士の交流の中で触れ合いながら広めていこうということで、幼稚園の子供たちと非常に緩やかな、和やかな時間を過ごすことができました。

もう一つ、熊本県では、道徳教育が教科になる前の段階、平成二四年の段階に、「熊本の心」という郷土資料を使った副読本を作っていますが、小学校五・六年生の中に、鞠智城もテーマとして取り上げられています。これは健太くんという登場人物のおじさんが宝物にしている鞠智城のお米を通して、ふるさとを大切にしようとする心を育てる題材の教材になっています。非常に温かい気持ちや伝わってくる内容ですが、これを使いまして、地元山鹿市の六郷小学校の五年生の道徳の授業で、郷土の文化を大切にすること子供たちをたくさん育てたいという内容ですが、私もゲストティーチャーとして、鞠智城のことを、地元ですからきちんと守っていただくという想いを子供たちに伝えました。また、小学校の教育出版社の教科書にも鞠智城が出てきます。平成二七年度の社会科の中に出ますが、単元としては日本の歴史、大陸に学んだ国づくりということ、発展的な学習を行う中で、鞠智城というものが出てきているわけです。

最後になりますが、「ころくん」がイメージキャラクターとして頑張っていますので、鞠智城とともに「ころくん」も一緒に大きくなればというところで、最後に「ころくん」を登場させました。ありがとうございました。

基調講演

鞠智城と古代日本東西の城・柵

講演者紹介

園田 茂弘（おかた しげひろ）

千葉大学文学部地理学専攻卒業。同志社大学大学院文学研究科修士課程修了。奈良国立文化財研究所技官、宮城県多賀城研究所長、国立歴史民俗博物館教授・考古学部長、東北歴史博物館長を歴任。国立歴史民俗博物館名誉教授。

基調講演 「鞠智城と古代日本東西の城・柵」

国立歴史民俗博物館名誉教授 岡田茂弘

只今ご紹介いただきました岡田です。今回の明治大学でのシンポジウムは、西日本の古代山城の中では鞠智城の役割・機能を研究するとともに、西日本だけではなく、古代日本の西と東と全体の古代の城・柵の変遷、あるいは性格を通して、それを鞠智城と比較することがテーマだそうです。私は一九六九（昭和四四）年から、多賀城跡調査研究所という宮城県の教育委員会がつくりました施設で、多賀城跡の発掘調査を行っていました。それ以降、辞めてからも、東北各地の城柵の調査に関わってきました。その経験を通しながら鞠智城の性格などを考えていきたいと思います。

一、はじめに

(一) 鞠智城跡の調査整備と私 ーこれが古代山城跡か？

私は多賀城跡に赴任する一年前に鞠智城跡を見えています。当時は文化庁の記念物課に在職していましたが、縄文時代の代表的な貝塚を史跡に指定しようということをしていまして、熊本県内の貝塚の指定に関する現状調査に来ていました。調査をしていると、今ちょうど鞠智城跡の発掘調査をしているという話を伺い、ぜひ見たいということで、調査の終わった夜中に、鞠智城跡の調査団が泊まっている宿に泊めていただき、その次の日の午前中に鞠智城跡を拝見したわけです。

鞠智城は当然のことながら大野城や基肄城と同じような古代山城だと思っていました。現地に着いてみると「これが古代山城なのか」と愕然としました。というのは、あまりにも地形が違い過ぎるのです。それまでに久留米の高良山神籠石、あるいは女山神籠石を見ていましたが、それとはあまりにも違い過ぎるので、これが本当に古代山城なのかという疑問を持ったわけです。現地に行つてご案内をいただき、特に三島格先生には門の調査の状況をご説明いただきました。その際に、これは門礎、つまり門の礎石だということ説明がありましたが、実はこれは門の唐居敷、掘立柱を門に取り付けるように扉を固定するための一つだということ判かりました。大きな唐居敷があるということは城門があるのだろうと。城門があるとすれば、これは山城なのかなと自問自答しながら帰ってきた記憶があります。



その後熊本県に出張するたびに鞠智城跡の現地を拝見していました。宮野の大礎石群なども、発掘直後に見せていただいたことがあります。当時は細川知事の時代でしたが、鞠智城跡を県として大々的に発掘することが行われることになりました。その頃から、私は発掘ごとに呼ばれて遺構についての意見を言ううということをしていました。

平成二年に、埋蔵文化財調査研究会という、九州と関西地方の埋蔵文化財の担当者の研究会がありました。それが熊本で行われ、古代山城を検討しようということがテーマになりました。そのときに私も呼ばれて、東北から見た古代山城について話をしましたが、そのときには、鞠智城は古代山城ではないのではないかと、むしろ古代の城柵、あるいは古代の官衙の遺構ではないかということを示しました。将来調査が続けば、古代の政庁のような遺構群が出てくるだろうと予言をしました。そのときに他の皆さんは当然古代山城としての発表をしていますから、私だけが総スカンをくらったのです。その後県の調査が続いて、古代の政庁らしい遺構が発見され、先ほど西住さんからご報告がありましたとおりです。その後整備が行われるようになりましたから、私も委員の一人として呼ばれていました。保存整備検討委員会の委員としては今年の三月に辞めたのですが、最後の四年ほどは委員長を務めました。

(二) 史料に乏しいが存続期間長い鞠智城跡

鞠智城についての文献史料は、先ほど西住さんからご紹介がありましたので詳しいことは申しませんが、実は直接の史料についてはわずかしかなかったりしません。つまり七世紀の末に一回だけ出てきます。八世紀、つまり奈良時代には全く出てきません。また九世紀の後半になってあらためて出てきます。そのときには鞠智城の「鞠智」という文字が「菊池」に変わっているということが分かります。結局これだけの史料しかないとするれば、文献史料に基づいて鞠智城の歴史を研究するのは無理です。無理だとすると、考古学的な発掘調査のデータと、周辺のいろいろなところの古代の城、あるいは柵の変遷などの資料を比較しながら検討する必要がありますというのが、本日の私のお話のテーマです。要するに、鞠智城発掘調査の成果と、古代日本の城柵の変遷から考えるというのが私のテーマです。

二、史料による古代の城・柵の変遷

古代日本の城・柵というと、いろいろな史料に出てきます(資料編12頁第1表)。「日本書紀」などでは、朝鮮半島での山城の史料も見えてきます。そういうものは外して、国内における恒久的な城については、西側は近畿地方から九州までの城と、新潟県を含めた東北地方の城に限られます。その中間には全く古代の城はないというように、両極端に分かれています(資料編13頁第1図)。

(一) 西南日本の山城・新羅に対する備え

西日本については、昨年も明治大学でシンポジウムがありましたし、今回もこの後赤司さんのほうからお話がありますので、詳しいことを申し上げる必要はないと思います。要するに白村江の戦いに日本が敗戦してから後、唐と新羅が日本列島に攻めてくるのではないかとという恐怖心かられた大和政権が、西日本各地に山城を築いて防衛の体制を固めたわけです。その後唐・新羅が攻めてくる可能性は少ないということで、順次山城を廃止していきます。それでも新羅との緊張関係というのは続いています。九世紀に新羅が滅亡するまで続いているわけです。その段階で山城が造られ、生きていたわけですから、西日本の山城というのは対新羅の防衛のための拠点であると、一言で言ってしまうえばそういう性格を持っています。

(二) 東北日本の城柵・蝦夷(えみし)に対する備え

次に、東日本については、西日本の城よりも文献的には早く出てきます。大化の改新の直後に、今の新潟県、越前に淳足柵・磐舟柵というものが造られ、それは蝦夷に備えて、さらに柵戸といわれる、周辺に強制移住させた人民を配置して、その地域を開発するという記事があります。淳足磐舟柵はそれから出羽柵に移り、さらに七三七(天平五)年に現在の秋田市内に移って秋田城に変わるわけです。新潟県から転々と北へ北へと城を建設しながら、その周辺には柵戸という強制移民を配置して開発していくという姿が見えます。それに対して陸奥のほう、太平洋岸のほうではこれほど典型的には出てこないのです。一番早くは七世紀後半に、現在の仙台市内に郡山遺跡が建設され、それが多賀城に移り、多賀城はそのまま固定しますが、一方では北へ北へと、桃生城、そして伊治城、さらに北上川中流域の胆沢城。先ほどのアトラクションでぬいぐるみの「しまわろくん」が出てきました、志波城まで陸奥国域が広がっていきましました。それはいずれも蝦夷に対する対応でした。新羅に対する備えの西に対して、蝦夷に対する備えの東というように性格を区切ることができまます。

その分布をみていきますと、遺跡は分かりませんが、現在の新潟市の周辺に淳足柵があったらうと推定されています。それから新潟県の北上市の周辺に磐舟柵があったらうと。この地域は磐舟郡ですから、そう考えられます。現在の山形県の庄内平野の辺りが出羽郡ですから、この辺に出羽柵があったと。出羽柵が秋田に移転して秋田城になったという、転々と飛び石のように北へ北へと出羽国が広がっていく状況が見えます。

それに対して太平洋岸のほうは、ここまでの状態は分からないのですが、七世紀の中葉、後半といったほうが正確ですが、仙台市の郡山遺跡が造られ、八世紀の初頭に多賀城に移転します。さらに七四九(天平二二)年に、今の宮城県の北部で砂金が発見されると、律令政府は桃生城を造り、伊治城を造り、さらに覚繁城(所在不明)を造っている最中に、蝦夷との衝突が起り、全面戦争が勃発します。その結果、北上

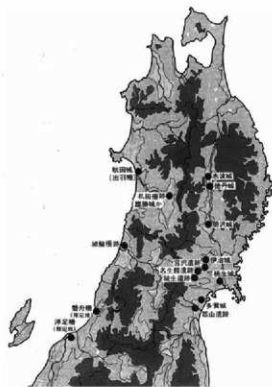


図1 東北日本の城柵跡分布図

川中流域を支配した律令国家は胆沢城を造り、さらに志波城を造りましたが、城を造るのは志波城の線で止まります。北緯四〇度線より少し南で城を造るのが終わります(図1)。それより北に日本の国が広がるのは一二世紀です。九世紀の初めには盛岡市までいっているの

ですが、それから青森市までいくのにはあと三〇〇年かかります。一二世紀というのは平泉の藤原氏が奥羽を支配した時代です。それまで東北地域北半の地域は、交通・交易はあるけれども、日本の領土ではなかった時代があります。

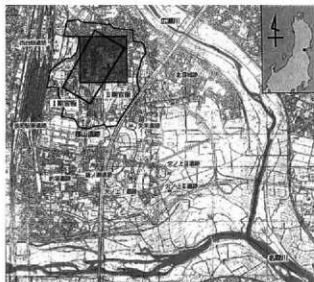


図2 郡山遺跡の位置

三、東北日本の城柵跡

(一) 仙台郡山遺跡（七世紀後半～八世紀初頭）

まず最初に仙台郡山遺跡ですが、名取川と北上する広瀬川、「広瀬川旅情」の歌などがある仙台の中を流れている川ですが、その二つの川に挟まれた地域が郡山遺跡です（図2）。真四角な四二メートル四方のⅡ期官衙と、その下に埋まっているⅠ期官衙、南北が約六〇メートル、東西が約三〇〇メートルの長方形の城柵が埋まっています。

このⅡ期官衙の南門の遺構ですが、この門は両側に控柱があつて八脚門であることが分かっています。

ます（写真7）。その棟通りにクリの丸太材を立て並べた柵が接続しています。

Ⅱ期官衙の中央部分に写真ではごく一部しか写っていませんが、左のほうへ広がる四面廂の掘立柱の政庁正殿跡が発見されています（写真8）。正殿の周辺には玉石敷のベイブメントが敷かれていたことが分かかります。ベイブメントがあつたところは、最初の発掘のときに遺構と気付かず外してしまい、後で拡張してみたら実は遺構だったということが分かったのです。そのような政庁があつたことが分かります。ただしきちんとした典型的な政庁の形をしていません。正殿はあるし、脇殿らしきものもあるのですが、典型的な形にまだなっていないということが判かります。時期は七世紀末か、八世紀初頭ということが判かっています。その北東のほうに、このような方形の石組の池が発見されました（写真9）。五メートル四方ぐらいの楕



写真7 郡山遺跡Ⅱ期官衙・外郭南門跡と丸太材堀跡



写真8 郡山遺跡Ⅱ期官衙・政庁正殿跡と石敷



写真9 郡山遺跡Ⅱ期官衙・石組池跡

めて小さいのですが、これより大きいものが奈良県の飛鳥地方で発見されています。飛鳥地方ではこうい
う方形の池は異民族の服属の儀礼のために使われたのだといわれています。それが正しいとすれば、蝦夷が
服属してきたときに、この池で水浴びをさせて、服属を認めさせることに使われたのではないかというこ
とが推定されています。実は郡山遺跡のⅡ期官衙だけで、それ以降の官衙にはまったく見つかありません。こ
の辺のところは極めて飛鳥的な色彩がまだ残っていることが判かると思っています。

Ⅱ期官衙には瓦葺の建物はないのですが、その南側に付属するように寺院の跡が発見されています。この
寺院は住宅街にあつて完全な発掘はできないのですが、推定されますのは、太宰府の観世音寺のように塔
と金堂とが左右対称に向かい合



写真10 郡山麻寺を原型とする
軒丸瓦の変遷



写真11 郡山遺跡Ⅰ期官衙・
掘立柱倉庫跡

と金堂とが左右対称に向かい合
つている姿で、次の多賀城廢寺
でも同じ配置ですが、それらし
いということが判かります。そ
れからこの瓦が郡山麻寺の瓦で
す。単弁八葉の蓮華文瓦が多賀
城Ⅰ期の瓦の祖形になります。
さらに陸奥国分寺の瓦は多賀
城Ⅱ期の瓦と同じものになりま

す。九世紀になりますと、蝦夷
との戦争の結果にできた胆沢城
の瓦に転化してきます。こうい
う変遷をたどっていきます(写
真10)。陸奥国の国府系の瓦で
すが、こういうものの祖形が郡
山麻寺で出てきます。

Ⅰ期官衙では、いずれも掘立
柱の建物で瓦は全く使われてい
ません。これは掘立柱の倉庫跡
です(写真11)。一見すると根
石があるようにみえますが、実

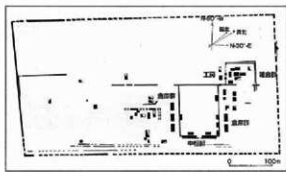
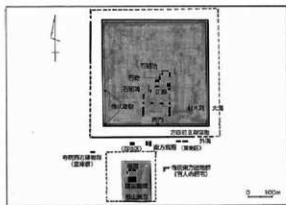


図3 郡山遺跡・Ⅰ・Ⅱ期官衙全体図

は掘立柱六の中に石を詰めて根固めをしている状態です。

郡山遺跡のⅡ期官衙を見ますと、四二八メートル四方で材木堀に囲われ、さらに外側には大きな溝が回っ
ています(写真3上)。その南側に寺院跡があり、その寺院との間には細長い建物、あるいは官衙のような建
物が発見されています。その下のⅠ期官衙のほうでは、中央部の南に一見国府政庁のような建物群があり、

こういう建物を中心として倉庫群があります(図3下)。北のほうには鍛冶工場の堅穴などが発見されています。全体としては六〇〇メートル×三〇〇メートルぐらいいを、もともとこれも材木場で囲われたようですが、二期官衙を造る際に材木は徹底的に抜き取られていいます。発掘をすると、堀が回っているように見えるのですが実は材木場です。このような材木場をもって、文献上の柵といったのかどうかは分かりません。柵というもののイメージは、こういうものでも出てくるということがいえます。

(二) 多賀城跡・秋田城跡(八世紀中葉～一〇世紀)

これは七二〇(養老四)年以降、神亀元年までの間に造られたと考えられる多賀城の航空写真です(写真12)。松島丘陵の一番西の外れにあり、南辺に一直線をした多賀城の外郭線で、中央に政庁があります。一番高いところで標高五〇メートル、中心部分でいたい標高三〇メートル、一番低いところは標高五メートルです。この前の東北大震災の際には、砂押川まで津波が上がりました。ただし堤防がありますので、こちらの水田のほうには被害がなかったのですが、川を



写真12 多賀城跡全景(1970年 南上空から)

伝って逆流して津波がここまで上がってきました。

これは多賀城の政庁の南方にある「多賀城碑」の覆屋です(写真13)。この覆屋自体は、松尾芭蕉が「奥の細道」行脚で多賀城碑を訪ねてきたときに、「壺の碑」と書かれて、露出した苔むした中にあつたということが書かれています。その後、元禄年間にこの覆屋が造られたという伝承があります。現在のものは明治九年に、明治天皇の東北巡幸を前提として、大久保利通が内務省に建設をさせた覆屋です。その後何度も改修されています。この中に多賀城碑があり、それには神亀元年に大野東人が造つたものだとあり、七六二(天平宝字六)年に恵美朝獨が修造したということが書かれています。

これは政庁正殿跡の発掘状況です(写真14)。礎石がきれいに並んでいる状態が見えていると思います。



写真13 多賀城碑覆屋



写真14 多賀城跡・政庁正殿跡

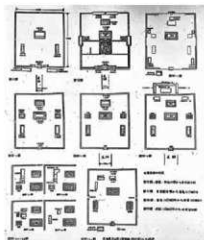


図4 多賀城跡・政庁第I～IV期変遷図

この礎石については南北朝時代の後醍醐天皇の後の義良親王の御座所だという伝承がありますが実際に南北朝には使われていません。この礎石は多賀城のⅡ期の七六二年以降のものだと判かります。その下に掘立柱穴がおのおの付いている状態が判かって、掘立柱の政庁正殿から礎石に変わり、この礎石が三回建て替えられたということが判かっています。合計四回の変遷があり、さらに細かいバリエーションがあります(図4)。これが掘立柱の位置、政庁正殿と両脇殿、門があり、門の外側に左右に建物があります。それが恵美朝駕の、天平宝字六年に礎石に変わると考えられています。真ん中にはベイフメントが造られて、南の門には翼廊が造られるという状態になりました。ところが七八〇(宝龜一一)年に蝦夷の反乱により焼け落ちます。焼かれた後に造られたのがⅢ期です。Ⅲ期の最初には掘立柱の急造の建物、バラックが造られるのです。それが礎石に変わります。ところがこれは八六九(貞観一一)年の、当時の東北大震災によって崩壊し、



写真15 多賀城跡・外郭南門跡と築地跡



写真16 多賀城跡・外郭東辺南部の丸太材列

その後修理されたのが第Ⅳ期です。第Ⅳ期には政庁の北部が転々と建て替えられて行きますが、大きく分けると、Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期、Ⅳ期という大きな変遷のあることが判かります。

これは築地跡の跡です(写真15)。一番南側にあります。写真下方の玉石群は南の正面の門の、礎石はなくなっていますが根石です。それに取り付けるようにして築地塀が通ります。外郭線は基本的には築地塀によって囲われていますが、先ほど多賀城の航空写真でお見せしたように低いところもあります。低地では築地塀は築けないので、材木塀を、材木を立て並べたものによって閉塞している状態が判かります(写真16)。特にこれは八世紀末から九世紀初め以降、こういうものによって低地帯は閉ざされていたことが判かっています。

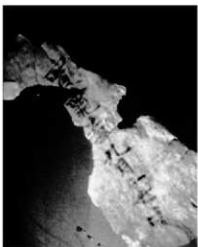


写真17 多賀城跡出土・第2号漆紙文書(宝龜11年9月17日)赤外線テレビ写真



写真18 多賀城跡出土・第22号漆紙文書(征東使)赤外線テレビ写真

多賀城跡からはいろいろな文字を書いた反故紙で、漆の加工に利用された、いわゆる漆紙文書（シキシモノ）がたくさん出てきます。これはその一つで、宝龜二年九月一七日、多賀城は蝦夷の反乱によって三月に焼けているので



写真19 秋田城跡全景（1977年 南東上空）

ですが、その年の九月の文書です（写真17）。このときには蝦夷に対する鎮圧軍が多賀城を拠点として、北上して戦っている状態の頃に、征東軍によって使われたものです。

これは征東使、東を征する使いと書かれた文書です（写真18）。「征東使」は延暦年間に使われた組織名称で、延暦三年に大伴家持が征東大使に任命されますが、それが最初です。延暦二年になると、征東使が征夷使になり、征夷大將軍という名前が出てきます。征夷大將軍になるのは征東使の後です。征夷大將軍には坂上田村麻呂がなり、鎌倉時代になると、武家の統領は征夷大將軍だということで、江戸時代までずっと名前が残ります。その元はこれです。

陸奥国の多賀城に対して、出羽国では先ほどの出羽

を移した秋田城の遺跡がここにありますが（写真19）。上方が秋田県を流れる雄物川の河口で、向こう側には西側にある男鹿半島が見えます。この真ん中は日本海ですが、右手にずっと入ってきますと、八郎潟があります。ちょうど八郎潟に面するような丘陵の上に秋田城が造られています。これも一番高いところは五〇メートルぐらいです。平均すると二〇〜三〇メートルぐらいの丘陵の上に建っています。後に鞠智城の航空写真と比べて見てほしいと思います。

秋田城の外郭線は築地塀です（写真20）。周りから瓦が出ましたので、瓦葺であったことが判かります。ただしこの下が白っぽいですが、実は砂丘の砂の上に造られています。まさに砂丘の楼閣で、地震があると崩れます。一度崩れて、また修理をしているのですが、また崩れます。二回崩壊すると、それから後はあき



写真20 秋田城跡・外郭西辺築地跡



写真21 秋田城跡・外郭東門復原



写真22 秋田城跡・政庁正殿跡中央部

らめてそこに溝を掘って、ここに材木を立て並べた塙に設計変更します。その状態が写っています。

崩壊する以前の当初の東門を復元したものです(写真21)。ご覧のように間口三間、奥行二間の八脚門です。これは瓦葺だったことが分かります。ただしこの門は軒瓦が使われていないので、軒先の部分は全部丸瓦と平瓦がボンと出てくる、全く軒瓦は使われていないという状態です。

これは政庁正殿跡の一部です(写真22)。ご覧のように政庁正殿跡ではたぐさんの柱穴が重なっている状態が見えると思います。全体で六回の建て替えがあることが確認されています。そのうちの四回目は確かこれだと思いますが、この段階で柱の痕跡の中に焼け土が入っていました。これは元慶年間に蝦夷の反乱によ



図5 桃生城跡全体図

つて秋田城が焼け落ちた段階の火災の痕跡だということが判かります。最後には礎石建の形式になったようで、ここに根石が残っています。

(三) 桃生城跡・伊治城跡(八世紀後半)

陸奥国で砂金が発見されてから後に造られた桃生城の平面図です(図5)。桃生城というのは天平宝字六年の正月に孝謙上皇が、これを造らせ、作戦を指揮した惠美朝獨に対して、「大河を越え、渡嶺を凌ぎ、桃生城を造つた」と言



写真23 桃生城跡・外郭土塁跡の断面



写真24 桃生城跡・政庁正殿跡

メートルぐらいの、それほど高くない丘陵の上で発見されました。これが政庁で、この北側の尾根線上に土塁が回っています。

これが土塁の断面です(写真23)。板築で築いた土塁ですが崩れてしまい、今残っているのは一メートルぐらいです。東西の幅が約八メートルです。実際には崩れていますが、少なくとも三メートルぐらいの高さがあったと思います。

桃生城の政庁の正殿跡の状況です(写真24)。大きい柱の跡と小さい柱の跡が二重になっていますが、最初に大きいほうが造られ、後にそれを改修して、柱と柱の間隔は同じですが、柱のほうをひとまわり小さく

したものに替わったことが判かります。二回目的ものについては、柱の痕跡のところに焼け土と木炭が大量に入っていました。これが焼け落ちたということが分かります。宝亀五(七七四)年に蝦夷の反乱によって、桃生城は攻撃されて焼けたとは書かれてないのですが、攻撃されて西の郭が破られたということが書かれています。多分そのときの反乱による火災だと思われます。

(四) 胆沢城跡・志波城跡(九世紀初頭)

その後蝦夷と律令国家との全面戦争が行われるわけです。写真25の右端が北上川ですが、北上川の中流城を制圧したところに胆沢城が造られました(写真25)。これが胆沢城跡の外郭線です。国道4号線が真ん中を縦断しています。胆沢城の外郭線はやはり築地塙で、築地をまたぐようにして掘立柱のやぐらが取り付い

ている状態を示しています(写真26)。

最後に、岩手県盛岡市にある志波城跡です。志波城は方八丁、約九〇〇メートル四方で、その外側に堀が回っています(写真27)。入りますと、外郭の内側約一〇〇メートルの幅で竪穴建物跡がすらすと並んでいます。これは恐らく兵士の居住する住居だと考えられます。中央に



写真25 胆沢城跡空中写真
(1974年 真上から)



写真26 胆沢城跡・
外郭東辺築地跡と檜跡



写真27 志波城跡空中写真
(1974年 真上から)



写真28 志波城跡・外郭南門と
築地・檜 復原



写真29 志波城跡・外郭内出土
の竪穴建物跡

は一五〇メートル四方の政庁があります。

南辺の外郭線を復元した状況で、高い建物が南中央の門で、築地塙が回って、転々と檜が取り付いている状態が分かります(写真28)。七世紀の頃の東北の城柵から、最後の城柵までだいたい似たようなものだということが判かると思います。

これが兵士の居住区域と思われる竪穴建物跡群の一部です(写真29)。

四 発掘調査成果による鞠智城の変遷と西海道の画期

(一) 鞠智城跡の遺構期と唐居敷・屋瓦・土器の制作時期



写真30 鞠智城跡のある米原台地

鞠智城に話を進めて行きますが、これは鞠智城南から見た航空写真です（写真30）。先ほどの西住さんのご紹介にもありましたように、この範囲が鞠智城ですが、海拔標高一四五メートルぐらいます。周りの水田が約六五メートルから七〇メートルぐらいますから、比高になると一〇〇メートルぐらひの差があります。桃生城や多賀城、秋田城の遺跡に比べると高いのですが、航空写真で見ると、山城というには平坦な台地が真ん中に広がっていることが分かります。

鞠智城の変遷について、総合報告書で細かく分析されています。先ほど西住さんからご紹介がありましたように、I期、II期、III期、IV期、V期

というように分かれていることが知られています（資料編18頁第2表）。

2 図。細かく報告書を検討しますと、果たしてこの時期でいいのかという疑問がないわけではありません

が、細かいことは言わないことにします。I期には細長い建物、これは恐らく兵舎だと思われれます。小さな倉などが点在している状態が分かります。II期になると、先ほど西住さんからご紹介があった、政庁らしい、コの字型の配置を持ったものが存在します。建物の方向がだいたい南北方向に近くなりますが、その真南に二つの八角形、あるいは多角形の建物が建ちます。西のほうには倉庫群などが発見されました。これが六九八（文武天皇二年）の「繕い治む」という段階以降の造営であろうといわれています。それがIII期になりますと、政庁らしい建物と八角形の建物は残りますが、その他の掘立柱建物が礎石に替わることが知られています。その後、九世紀に入ってから、IV期の建物群、そしてV期の建物群がこういう形に変遷するといわれています。

城門については、門そのものの遺構が明確な状態で残っていないのです。そこから発見された唐居敷については知られています。唐居敷を小沢佳憲さんという方が西日本の古代山城の唐居敷と比較をして、変遷を検討しています（資料編19頁第3図）。唐居敷については掘立柱に取り付けるような唐居敷と、礎石を取り付けるような唐居敷と二種類ありますが、当然掘立柱のほうが古いわけです。一番古い相形は大野城の唐居敷です。掘立柱があり、掘立柱と扉の軸を受けるための円形の軸受け穴があります。その間に方立といつて、門の扉と柱との間を塞ぐような木材の差し込み穴があります。これが本来の唐居敷の姿です。それが基肆城の東北門の唐居敷では方立の穴が省略されています。鞠智城でも方立の穴が省略されていますので、その点で少し新しい形式ということが判かります。

大野城ではもう一つの類型として、軸受け穴が四角になります。四角の穴でどうやって扉を閉めるのかとなりますが、四角の穴の中に丸い金具を入れて回転するようにしてあるから、これでいいわけです。そのタイプのもは岡山県の鬼ノ城¹⁰でも出てきています。つまり大野城を通して鬼ノ城の唐居敷に移っていった状態が分かるわけです。そうしますと鞠智城の城門の唐居敷は大野城より少し新しいが、基肄城東北の門と同じくらいです。これが基肄城の最初とはいえませんが、基肄城の少し下がる段階で同じだということになると思います。

鞠智城から出た瓦は単弁八葉の蓮華文瓦です。これと類似する瓦は大野城跡の主城原で出土しています(資料編19頁第4図)。ご覧になるとかなりよく似ていることが判かると思います。これは大野城でも一番古いタイプです。鞠智城でも、この瓦に伴う、丸瓦、平瓦は一番古いタイプだということが判かっています。そうすると大野城のこの瓦と、鞠智城の瓦葺の建物とはほぼ同じくらいの時期に造られたということがいえます。この辺は文献に出てこない鞠智城が大野城とほぼ近いということがいえる証拠になります。

土器についても、鞠智城跡の調査をされた方々が、時代別に土器の出土数量を比較する表を作られています(資料編19頁第5図)。これは大変有効な表です。鞠智城内には六世紀代の古代集落があり、それに伴った土器もあります。ところが七世紀の第一四半期、第二四半期、第三四半期、第四四半期という形で、第三四半期から急激に量が増えてくるという状態が分かると思います。この第三四半期から第四四半期はまさに大野城や基肄城が造られた時期です。鞠智城もこの段階でできたというように、本日の皆さんの報告でも、レジュメの中でもそうなっています。この段階で大きく発展したのは確かです。

しかしその前に、こういう、より古い土器が出ています。土器が古いからといって、ただちにその段階まで時代をさかのぼるといふことにはやや問題があります。例えば壺や瓶のような貯蔵形態のものは日常食器とは違いますから、古い時代のものが長く使われていることはあり得るので、古い時代のものが出たからすぐにその時代だとは言いきることがあります。もう一つの特色は、八世紀の第二四半期から第三四半期について、全く土器が出ないという現象です。第四四半期になると土器が出るようになりますが、九世紀に入ると、全く土師器だけで須恵器が出てこないという、極端な状況が知られています。

(二) 鞠智城の創建

考えてみますと、古い土器が出てくることに注目しますと、鞠智城の台地の部分は実は改変されています。層位が攪乱されているから、きちんと分かる状態ではないのです。しかし貯水池の場合は低地です。出土層位が残っています。特に貯木場の周辺では、瓦の出る、つまり大野城の創建期と同じ時期の瓦の出る包含層の下から、須恵器だけが出る包含層が知られています。これは鞠智城が大野城などよりも古くに造られた可能性を秘めているわけです。

もう一つの文献史料を見ますと、東日本の城柵は大化の改新の直後に、淳足柵・磐舟柵という柵が現在の新潟県地域に造られて、それが北へ北へ広がっていき、最終的には、七七三(天平五)年に秋田城まで移ってきます。ところが西日本を見ますと、その段階では、南九州に対する政策というのが「日本書記」

には全く書かれていません。その段階で熊襲や単人が既に内国化していれば対策は要らないということになります。

実は南九州に対する対応というのは、文武天皇二年の鞠智城が出てくる、まさにその年に、薩南諸島、種子島や屋久島あるいはトカラ島などに対して、大和政権は武器を持った使節を派遣します。ちょうど幕末にペリーが軍艦を派遣した砲艦外交のようなことをやりました。朝貢して服属の儀礼に來いということ言うわけです。その結果、翌年には薩南諸島の人たちは大和にやってきました。当時の藤原京へ来て、服属の儀礼をするわけです。役目を果たした外交使節が帰ってきて、実はその途中で単人や熊人といっている熊襲、あるいは大隅の人たちに武器を持って脅されたという報告がありました。それに対して、七〇〇年に書かれていますから大元元年の前年ですが、そのときに筑紫の総領に、処罰させたという記事があります。つまりその段階では七世紀の末まで、熊襲、単人は決して服属をしていなかったということを示しています。

そうすると、明らかにこれはおかしいのではないかと思います。大化の改新の直後に、南九州に対する施策があったにもかかわらず、それは『日本書紀』には書かれていません。なぜか消えてしまったということを示しています。鞠智城はその段階で、まさに南に対する前線本拠地として造られたのだと私は考えています。ところが造った後で、白村江の戦いがありました。国土防衛戦の城が必要になります。鞠智城は西向き

の城としての中に組み込まれていったということが考えられるわけです。

単にそれだけのことではなくて、実は鞠智城というのは古代山城の中では異端児なのです。何が異端児かという点、明らかにこれはおかしいのではないかと思います。大化の改新の直後に、南九州に対する施策があったにもかかわらず、それは『日本書紀』には書かれていません。なぜか消えてしまったということを示しています。鞠智城はその段階で、まさに南に対する前線本拠地として造られたのだと私は考えています。ところが造った後で、白村江の戦いがありました。国土防衛戦の城が必要になります。鞠智城は西向きの城としての中に組み込まれていったということが考えられるわけです。

同時に鞠智城については、いつ造られたか、築城についての記載がありません。なぜないのかというと、一番合理的な解釈は、大野城や基肆城より前に造られていたからです。南に対する防衛の拠点として、前に造られていたから、既にある城として大野城や基肆城とともに整備はされたが、既にあるから、新たに山城を造ったとは書かれていないと解釈すれば合理的です。結局、鞠智城は大野城や基肆城よりも、一段階古く造られたのです。しかし完全な機能を果たす前に、新羅に対する防衛の中に組み込まれてしまったのです。それが再び生きてくるのが、六九八年です。

文武天皇二年に鞠智城を繕い治めたとありますが、実はこの年に『続日本紀』によりますと、南方の、薩南諸島に対する、武器を持った使節が派遣されています。その直後に大宰府をして、三野城、稲積城の二つを「修さす」とあります。今まではこれを大部分の人は修理と考えて、北九州にこういう柵が造られて、それがこのときに修理されたというように理解する人が圧倒的に多いのです。実はこの「修」の字は「つくる」という意味があるのです。修理・修繕だけではないのです。自らつくるという意味で考えてみますと、この

ときにこの二つの城が造られたという記事です。しかし大野城・基肆城・金田城等と異なり、築城とは書いてないですから、古代山城ではないということを示しています。

そう思って読みますと、日向国の国府の所在郡、児湯郡ですが、児湯郡には三納郷があります。それから大隅の国の国府所在郡は後の桑原郡ですが、桑原郡に稲積郷があります。これは実はそれを示しているのではないのか。つまり後の国府の前身としての城柵がこのときに造られたということの意味しているのではないかと考えています。鞠智城を修理して、その翌年には日向と、後の大隅地域に城柵を造り、さらにこの段階で唱史国、後の薩摩国に柵を立てて成を置いた。これは薩摩国の国府の前身としての城柵をこのとき造ったと考えられます。つまりこれも南へ南へと政治拠点を広げていったのです。東北地方の状況を南に置き換えた状態で展開していったということを示したのではないかと私は説めるわけです。その拠点として鞠智城があったということになります。

この段階での最後、七二〇(養老四)年に大隅国守が殺害されて、そのときに大伴旅人が征軍人大将軍として任命されて西海道に赴任します。赴任して数カ月で、都で藤原不比等が死にますから、大将軍は召還されます。しかし大伴旅人は召還されるまでは、大宰府にいたとは思いますが、大宰府より南側で作戦を指導していったとすると、これは全く文献にはありませんが、大伴旅人は実は鞠智城で作戦を指導したのではないかと考えられます。というのは、鞠智城に司令部を置くと、これは東のほうと西のほうと両方に分かれていっていることが分かってきます。その段階で大伴旅人がどのぐらいいたか分かりません

が、少なくとも鞠智城までは当然来ていたと考えられます。さらにその後、七二七(天和)年に大伴旅人は大宰の帥として、また西海道に赴任します。そして七三〇(天平二)年まで、大宰の帥としていっているわけです。その段階で大伴旅人は以前に征軍人大将軍として来ていますから、南九州についての施策についてはよく知っているはずですが、その段階が鞠智城の第三期に当たるのではないかと考えています。指導したかどうかは分かりませんが、大伴旅人の在任と密接に関係しているらしいということを上げたいと思います。

(三) 藤原広嗣の反乱と乱鎮庄後の鞠智城

その後、八世紀の第二四半期、第三四半期に土器がないという話についてです。七四〇(天平二)年に大宰の少将であった藤原広嗣が大宰府で反乱を起こします。それに対して大野東人、多賀城での鎮守府将軍が司令官として赴任して、広嗣の反乱を鎮圧するわけです。その段階で藤原広嗣は大隅・薩摩の単人軍を加えて、西海道の軍団兵を動員しています。単人が武装するために何を使ったかという、鞠智城に貯蔵してあった武器を使ったに違いないのです。それまでは武器はないのです。特に南九州に武器を置くと、単人に利用される可能性があるとして置いていませんから、単人が武装するためには鞠智城の武器を使わざるを得ないのです。あるいは鞠智城にあった食糧を使わざるを得なかったはずですが、しかしあつという間に鎮圧されましたから、単人に渡した武器や食糧は鎮庄軍の戦利品として没収されたに違いないのです。つまり天平一二年の広嗣の乱が終わった段階では、鞠智城の倉はかなりがらんどろになってきていると考えざるを得ないわけです。負けたわけですから、物が返ってくるはずがありません。没収すればみんな部へもって行って

しまいます。持って行かないとしても、その後大宰府は廃止になります。七四五(天平一七)年まで廃止になつていくわけです。廃止された後、そのときに物が残っているとすれば、ごくわずかなものです。同時にほとんど管理をする人間はいません。それが八世紀の第2四半期、第3四半期に土器の出ない理由です。広嗣の乱が土器の出ない理由を示していると考えられるわけです。

本日お話ししたことは、鞠智城というのは七世紀の中葉に、東北の越国に造られた城柵に対応するように、南九州の熊襲・卑人に対する根拠地として建設された西日本の最初の城柵です。七世紀の後半に、新羅に対する対応のために組み込まれるが、新羅の対応が一段落すると、再び南九州の経営のための根拠地として整備されました。それが文武天皇二年です。その後大伴旅人がいたかどうか分かりませんが、大宰の帥だったころに、南に対する拠点としての機能を果たしました。しかし七四〇年の藤原広嗣の乱によって、広嗣が逆に卑人を武装するために鞠智城の武器や食糧を使用しました。その後がらんどうになった鞠智城は、それまでの南に対する拠点としての性格を失ってしまいました。八世紀の後半になると、鞠智城は肥後の国司の所管になり、同時に文字も「菊池城」に変わり、兵庫や不動倉などの設置場所として使われたのだらうと思われ

ます。

八世紀後半以降の鞠智城については、後ほど加藤さんのほうから詳しく話があると思いますので、こちらに譲りたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

講演① 古代山城の建物 鞠智城と大野城・基肆城

講演者紹介

赤司 善彦 (あかし よしひこ)

明治大学文学部卒業、福岡県教育委員会、九州歴史資料館、九州国立博物館を経て、現在、福岡県教育庁総務部文化財保護課課長。大宰府政庁跡の発掘調査に長年携わる。専門は日本考古学。

講演① 「古代山城の建物・鞠智城と大野城・基肄城」

福岡県教育庁総務部文化財保護課長 赤司善彦

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました福岡県教育庁文化財保護課の赤司と申します。よろしくお願います。

この写真は、鞠智城の公園の風景です(写真31)。鞠智城の中からは七〇棟ほどの建物が見つかっています。



七〇棟の建物というのは大変多いわけです。そのうちの幾つかがこのように現地で復元をされています。古代の山城は砦ですから、当然にして武器を貯えるところ、あるいは兵舎があったり、兵糧を納めたところなど、そういう倉があることは当然なのですが、それにしても建物の数が多すぎます。このことは鞠智城だけではなくて、大野城、基肄城という、同じ古代山城にも見られる現象です。どうしてこれほど建物が多いのか、このなぞを解くことが、古代山城の役割、あるいは本日のテーマである律令国家、大げさではあります、国家の成り立ちというものを考えるヒントになるのではないかと考えています。

はじめに

これは古代山城の分布図です(図6)。ご存じのように朝鮮半島、九州の北部、さらには瀬戸内、最も東の高安城という、奈良と大阪の境のところの山が今想定をされていますが、そういうところには分布していません。九州の北部では大宰府を拠点にかたまっています。それから瀬戸内沿い、そして最後に都のそばというように分布しているのがお分かりになるとと思います。黒い四角が朝鮮式山城といわれている、要するに文献史料に名前が出てくるお城です。金田城、大野城、基肄城、鞠智城、尾嶋城、高安城です。23・27は、名前



写真31 鞠智城跡風景

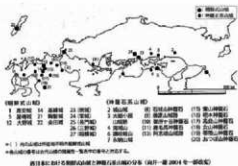


図6 古代山城分布図

は出てきますがどこなのかよく分からないものです。黒丸は神籠石と呼んでいますが、文献には名前が出てこないというものです。われわれ古代山城の研究をしている人間にとっては、あまり名称は構わずに同じように研究はするわけですが、便宜上、朝鮮式山城、神籠石というように分けて考えます。

山城名	期			
	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀
大野城	■	■	■	■
基肆城	■	■	■	■
金田城	■	■	■	■
屋嶋城	■	■	■	■
鞠智城	■	■	■	■
高安城	■	■	■	■

663年 白村江の戦い
 668年 任那・百濟を滅ぼす
 669年 大野城、基肆城築城
 687年 高安城、屋嶋城、金田城築城

711年 高安城が完了
 712年 高安城宮城の修築

868年 大野・基肆・鞠智の三城、高安城を修築
 899年 高安城宮城の修築完了

図7 出土土器と建物からみた朝鮮式山城の存続時期

この図はこれまでの調査の成果で、出土土器から見た朝鮮式山城が、どの程度存続をしていたのかを図に表したものです(図7)。下に年表のおおよそのできことを書いています。最初に城を築くということが出てくるのは六六三年の白村江の敗戦後です。友好国の百済を救うために自国の軍隊を出すと、どこかで聞いたような、まさに集团的自衛権が初めて行使されたわけです。負けた後の六六四年に、防人・烽火の通信の制度を整え、筑紫、今の大宰府の辺りに水城を築き、そして大野城、基肆城をさらに築きます。六六七年には、高安城、屋嶋城、金田城を築きます。順番に築くわけで、この頃が築城時期です。その後七世紀の後半以降、末になると、六九八年に鞠智城の名前が出て出てきます。大野城、基肆城、鞠智城を修理、繕治する

という、この頃が修理をするような、あるいは造り替えるような、プランを一度変更するような時期が七世紀の末ごろの話です。

ところが大玉律令が制定された後、ただちに高安城はやめるといい、茨城・常城もやめるといいうように、

八世紀になると、やめてしまうというものが出てきます。ところが高安城もそうなのですが、実際に発掘調査をすると、高安城などは七二〇年代から七四〇年代の平城京で出土する土器と同じものが出てきますので、だいたいの時期が押さえられているわけです。そうすると記録上は廃絶に向かっているはずですが、なぜか一番上の大野城、基肆城も今のところ土器と瓦から見ると、八世紀の終わりまで、大野城は九世紀の後半まで続きます。先ほどご紹介がありましたように、鞠智城も八世紀の中頃から後半にかけて土器の上で空白期があるのですが、その後も続いています。これはあくまでも土器がなくなっているだけで、遺跡・遺構そのもの、土地利用がないかどうかというのはよく分かりませんが、少し空白期があるのは間違いないと

せぬ。

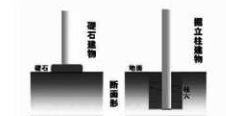


図8 掘立柱建物と礎石建物

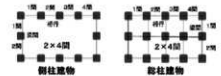


図9 側柱建物と総柱建物

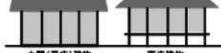


図9 側柱建物と総柱建物

さて、まずは、掘立柱と礎石建物がどういふものかという、皆さんにおさらいのようなことを話します(図8)。右側が掘立柱の建物です。これは地面に直接穴を掘って、そこに柱を建てて、周りを突き固めて、上で屋根を支えるようになるわけです。これを掘立柱の建物といふます。

左側は礎石建物、石を置いて、これを礎石としてその上に柱を建てます。そのときは下に地業という、地面のほうも硬くたきしめたりするわけです。要は重量物が載ることによって、掘立柱では沈んでしまいうので、重量に耐えられるように礎石を置くということです。もちろん見ても全然違いますので、どちらかという建物も豪華になります。瓦があり、朱塗り、連子は緑色という、今でいう神社の建物を想像していただくと思います。そのような建物で瓦葺になるというのが、一般的にいわれているものです。これを上面から見ると、発掘調査をしたときには、こういう柱の穴を掘りましたので、周りに四角い穴があるわけですが、その真ん中に柱の痕跡が出てくるということです。礎石の場合はそのまま残っているわけです。柱の痕跡はありません。日本の建物は紙と木でできていますので、上屋はほとんどなく、このような土台しか残っていないわけです。

これも分かっていたらなければ、本日の私の話はまったく分からなくなってしまうので、よく聞いてください。建物には、今言いました柱の跡、礎石でも掘立の場合でも構わないのですが、建物にはこのように、床の周りに柱を立てる側柱（側柱）の建物というものと、床のところに柱があるものがあり、これを総柱の建物といいます。側柱と総柱の二種類です。これがどう違うかといいますと、簡単に図にしたものがこれです（図9）。側柱の床は上間あるいは平床の建物です。一方、総柱という、床にも柱があるもの、床束（床束）といいますが、床束が周りの柱と同じ規模の場合には、床を支える柱と考えられます。これは高床の建物で、床が地面から上がっているのです。これは一般的には、倉庫に使われていました。湿気抜き、あるいは動物な

どが近寄ってこないようにということで、床を地面より高く上げる建物で高床建物といえます。ということを入れていただきたいのです。

次に建物の規模を数えるときに、われわれは柱と柱の間を一間（一間）といっています。通常一八〇センチのことを一間といいます。古代の場合、考古学では、一間、二間、三間、四間というのは、柱と柱の間の数のことです。梁（梁）と桁（桁）とありますが、梁も一間、二間です。この建物の場合に数えると、二間×四間の建物になります。ですから、五間×一〇間となると、間が五つですから、柱の穴が六つあることになります。ということは、もっと規模の大きな建物になるものであるということを入れておいてください。



写真32 東大寺正倉院

本日は倉庫の話です。これは東大寺の正倉院です（写真32上）。これは今勉強していただきましたので、建物の規模でいくと何間でしょうか。数えてみると、一間、二間、三間、四間、五間、六間、七間、八間、九間、ですから三間×九間の建物ということになるわけです。これも頭に入れておいてください。こういう立派な建物です。この写真は、二年前に

用事があって正倉院事務所を訪ねたときに、ちょうど修理をされていまして拝見したときのものです(写真32下)。そのときに驚いたことは、正倉院が建つたのは奈良時代で、それから一〇〇〇年以上保っています。先ほどの写真を見ても、とても規模が大きく神々しいばかりです。倉というものは単なる建物ではないのです。ある意味を持つような象徴的な建物であるということを実感しました。私が一番言いたいことは、建物は長くもつと、いうことです。考古学ではこういう建物、これは礎石ですが、掘立柱の建物は二五年で終わるといいますが、そのようなことはありません。メンテナンسسさえすれば長くもちます。ただしいろいろな条件で、例えば台風や火災があったりすると建て替えられます。あるいは何か違う意図といいますが、大きな変更が加えられるときには、当然建て替えはあると思いますが、それ以外は、建物はだいたいこのように残るものだと思います。

一 大野城・基肆城の建物の動向

(一) 大野城の建物

これから実際に大野城の状況を見ていきたいと思います。大野城は太宰府市あるいは大野城市、宇美町という二つの市と一つの町に接しています。これは空から見た大野城です(写真33)。白い線は土塁が走っているところです。空から見たら、全て木におおわれています。実際の地形を見ますと、図10のようになっていきます。これは何かというと、大野城は二本の谷筋があり、真ん中に平原のような台地がありますが、よく



写真33 大野城跡空中写真

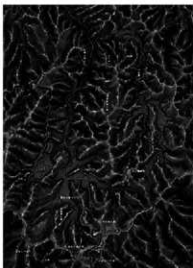


図10 大野城跡レーザー計測図

見ると尾根がやせているのです。平坦面がないのです。お城というと、中は平坦だろうと思われがちですが、そうではなくて古代山城の多くはこのように周囲が急峻な地形というか、変化に富んだ地形のところに築かれているのが一つの特徴です。

次は、レーザー計測を処理したのですが、傾斜があるところは少し黒くなっています。標高が高いところには白色の色を付けています(図11)。これで見ると分かるように、大きな城内、周囲が六キロ以上あり、歩くだけで半日以上かかりますが、その中に分散的に建物群が配置されているというのが大野城のあり方です。

これを実際に、幾つかの地点を見ますと、先ほど皆さんには学んでいただきましたのでお分かりになった

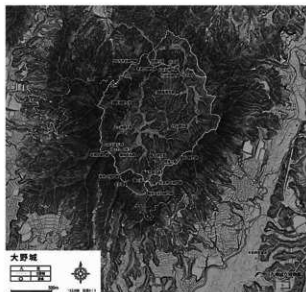


図11 大野城跡レーザー計測図（色替え）

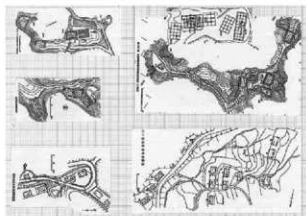


図12 大野城跡・倉庫群配置図

と思いますが、これが倉庫群の分布を示した図面です（図12）。全てが総柱であることが分かると思います。これは尾花というところですが、非常に整然と配置をされています（図12左下）。

これは、主城原というところで、この場所は大変重要だったようです。建て直すときに違うところで建てるのではなく、同じ場所に何度も建てています（図12右上・資料編22頁図2）。この場所が大野城における建



写真34 大野城跡・増長天地区



写真35 大野城跡・尾花地区



写真36 大野城跡・八ツ波地区

物の変遷を知る手がかりになっている場所です。何回も建て直していますので、古い建物から新しい建物までが、数回建て直されていますから、それによって建物の構造がどう変化していくかということがこの場所で見られるわけです。

この写真は、増長天という地区です（写真34）。尾根の頂部にまっすぐ倉が並んでいる様子が見えます。すぐ隣の尾花という地区ですが、これも見てください。こんなやせ尾根のところにとにかく、こういう場所に倉を造営しているということです（写真35）。これは八ツ波という地区ですが、尾根の上だけではなく、丘陵の緩斜面があれば一番いい場所なのですが、そこを階段状に造成をして、そこにきちんと整然と並べることが分かっています（写真36）。

竪立柱建物	
側柱建物（圓・側）	1×1(1)・3×7(2)……………主城原地区
側柱建物（圓・倉）	3×3(1)・3×8(1)………主城原地区・猿坂地区
礎石建物	
礎柱建物	
基礎付（礎・倉・基）	3×5(1)・3×4(1)・3×8以上(1)………主城原地区
竪立柱建物（礎・倉・側）	3×5(7)……………増長天・ハツ波・村上地区
廬（礎・倉）	3×5(14)・3×4(10) 主城原・ハツ波・村上・猿坂地区
不明（礎石の礎部のみ）	3×5(10)……………尾花地区

合計 3×5 32棟(全て同一規格)

3×4 11棟(全て同一規格)

図13 大野城の建物

これらを少し分類してみますと、直接地面に柱を建てる掘立柱建物と、礎石の建物とに大きく分かれますが、さらには周りに柱だけがある側柱の建物、土間のような建物です。この側柱と礎柱建物があります。それから礎石は実は側柱の建物が一つもないのです（図13）。大野城の場合には、礎石建物はすべて倉庫です。このように数がだいたいわかっています。大変興味深いのが、三間×五間の礎石の建物が合計で三二棟あります。これの柱の寸法が全部一緒なのです。礎石の大きさもだいたい一緒です。ということは同規格の建物です。同規格の建物というのは、ただ設計が一緒ということではなくて、材料の調達から施工までがすべて一貫して同じようにやれるということです。ですから大変無駄を省いた工法です。プレハブとは少し違うかもしれませんが、規格化をすることで大量に造ることが可能だということです。

正倉院の先ほどの写真を見て想像していただきたいのですが、あれだけの建物の材料の調達、それを作るの努力というのは大変なものです。もちろん三二棟が一時期に建ったわけではないのですが、三×五間の



図14 3×5間柱柱高床構造

同規格が三二棟あって、三×五間は少し新しい時期になりますが、これは一棟ありまして、ほぼ規格はそろっています。同一規格ではありませんが、柱間の寸法、柱と柱の間隔の寸法が少しばらついています。微妙ですが少しです。これに対して三×五間は奈良時代の建物です。統制のとれた法令制そのものを体現しているように狂いがないのです。ところが九世紀になってくると、少し法令制も緩み始めてくるというのが、こういうところからもわかるわけです。

先ほどの図9をあえて出します。側柱と礎柱建物です。今話をした三×五間というのは礎柱です。礎柱の建物の中でも、よく見ていくと基壇という掘立柱と併用の建物もあるということです。同じ三×五間でもこのように少し様相が違うものがあるということです。三×五間で一番多いものがこのイメージ図です（図14）。高床になっており、そこに階段を付けて稲などを倉に納めるというものであると思います。

先ほど幾つか地区があると言いましたが、それぞれの地区ごとに様子を見ていきますと、例えば主城原地区は図の一番上ですが、左の一番古い時期からずっと九世紀まで連続と続いて、長期間にわたる土地の利用がなされているわけです（図15）。ところがハツ波と増長天は奈良時代の途中から始まるのですが、九世紀

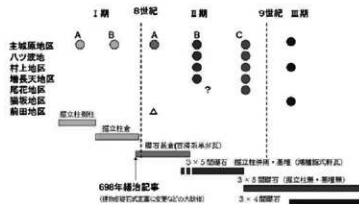


図15 大野城の建物変遷（時期はあくまでも目安）

には利用されていないのです。あるいは奈良時代の終わりから始まるものと、九世紀になって初めて始まるものがあります。地区によって土地の利用の仕方、始まり方、あるいは終わり方が違うということです。

それはどういうことか見ていきます。図16は村上地区というところです。この空白地は小高い山がある部分です。ここでは、最初に狭い丘陵を平坦に造成して、三×五間の周りに掘立柱の柱が付くという特異な建物ですが、三×五間の倉がまずここに二棟建ち並びます。しかも南北棟であることが大変重要です。さて、九世紀になったときに、今度はどこかに建てようかということで、建て増しが計画されるのですが、大変条件の悪い丘陵の裏側に建てられます。

ていることが分かります。どういふことかというわけで、唯一探っているのではなくて、多分この倉はそのまま建てていて、どこかに建てるとうかがないので、唯一探

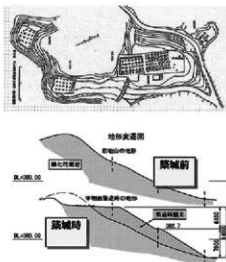


図16 大野城跡・村上地区

せたのがこの辺りだったのです。平坦ではなく、あまり条件がよくないところなのですが、そこに建てるしかなかつたのでしょう。このときには、方位はこちらが北ですから、東西に長い建物です。東西に長いということは正面が南を向いているということです。古いものはすべて正面が東を向いています。これは奈良の正倉院も一緒です。古いものは必ず南北棟ということに気がきました。ということで編年を試みてみたところ、どこで、ここでは平坦面が取れないので

段造成をしてから、埋め立てをして平坦地を確保して倉を建てています（図16下）。そこまでして山の上に倉を建てているということが分かりました。

私が考えている倉の変遷です（資料編23頁図3）。I期、II期、III期と記していますが、一番古いものが掘立柱の側柱の建物です。平床の土間構造の建物です。この段階では倉は造営されていません。次の段階で初めて、掘立柱の総柱、要するに高床の掘立柱式の倉が造営されはじめます。七世紀の終わりごろです。そして「I期C」としていますが、初めて礎石式の総柱の建物、三×八間以上、おそらく三×九間、正倉院と同じ規模だと思いますが、そのような倉が突如としてここに建つわけです。重複関係から、これが礎石の中

では一番古いということが分かっています。

ところがこれはそれほど長くはないのですが、その後、礎石式の総柱の倉、三×五間の基壇や掘立柱併用という、先ほど図面で見ましたが、礎石の周りに掘立柱が回っている建物ですが、高品質化というか、普通の倉よりも少し優位性のあるような倉が最初にできてきます。その後に、同じ三×五間で基壇もないのですが、南北棟という、なぜ南北棟かというと、これには意味があります。日照時間など条件がいいのは南北棟なのです。南に扉があると、扉は非常に弱く、風の影響も受けやすから、なるべく風の影響を受けない、あるいは日光の影響を受けないのは東側に扉があるものだろうと思っているわけです。そういう南北棟のものが建ちます。ところが地形の制約から南北棟が建てられなくなると、しよがないので東西等が建てられます。このときには基壇もありませんし何もありません。九世紀になって、三×四間という規模を縮小したものが建ち始めると覚えておいてください。三×五間が奈良時代になって、九世紀になって三×四間になります。これが大野城の姿です。

この時期区分の私の根拠は、一つは大野城の築城の六六五年であるということです。それから本日本話があると思いますが、鞠智城と同じ修理、繕治をするということがわざわざ記録されていることは大変なことだと認識されていたからだと思います。この時が礎石の大きな建物が造営された時期だろうと考えています。礎石の建物には瓦屋根が一般的ですので、岡田先生の七世紀のお話の中に出てきた単弁の瓦は、多分この礎石建物の葺かれていたのではないかと思います。そして、鴻臚館式の瓦は大宰府政庁と同じような時期ですので、七二〇年ごろに三×五間が建てられた時の瓦であろうということです。このようにして幾つかの年代的な根拠を基にすると、このような建物変遷になるといいうことです。

(二) 基肆城の建物

これは基肆城です(写真37)。基肆城にも同じように倉庫があります。これまで発掘調査がされていないので、掘立柱は検出かどうか分からないのですが、礎石は山中にたくさんあるわけです。それを数えていきますと、一三棟が三×五間の建物、調査されていないので分からないのですが、総数を見ますと三五棟ぐら

いになるといいうことです(図17)。

この三五棟は実は大野城と同じ数です。大野城にも三×五間の倉が三五棟、基肆城にも三五棟ということが想定されます。おそらく大宰府によるマスタープランの中で大野城と基肆城という、大宰府のそばにある山城に倉が配置されていたといいうことです。そういうことが分かります。



写真37 基肆城跡



図17 基肆城跡

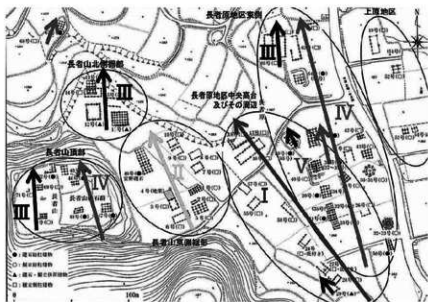


図18 鞠智城跡・建物の主軸方向 (矢印は主軸線)

が鞠智城にまずは出現します。これはご紹介にありましたが、L字型などの配置を見ると、官衙つまり役所的な配置が見取れるわけです。これが初めて鞠智城ができたときの姿ではないかと思えます。

Ⅱ期になりますと、Ⅰ期の西側のエリアにいろいろなものが建ち始める時期です。このときにⅠ期はまだ存続していると思います。Ⅱ期の段階で拡張されて、このエリアが開発をされるわけです。このときに側柱の建物もありますが、白丸が掘立柱ですが、掘立柱の高床の倉と合わせて、正倉院や大宰府、基肄城と同じような礎石の三×九間の長倉が南北棟で出るといったことの意義は何だろうかと思っていますが、同じような傾向があります。

Ⅲ期というのは奈良時代の前半になるわけです。このときに初めて、ほぼ真北方向、北極星の



写真38 鞠智城跡・長倉原地区

二、鞠智城の建物の動向

本日の主題である鞠智城です。鞠智城についても、大野城の変遷と合致するのだろうかということを考えてみたいと思います。これは鞠智城の礎石建物がたくさん出ている風景です(写真38)。私がこれを分類した根拠というのは、発掘調査報告書でⅤ期の区分が既に示されているところですが、報告書というのは、古代史ということ、原典となる文字史料ですから、あとは解釈をどうするかということを考えなければいけないわけです。基本的な流れは報告書で示されているのと変わらないのですが、もう少し単純化してみました(資料編25頁図4)。

まず奈良の正倉院に見られるように、建物は簡単に廃絶しないという事です。次に、建物配置の計画があるとすれば、そこには必ず基準となる主軸線があるはずなんです。その主軸線に合わせて、建物は建てられていくのです。これは日本全国の官衙の調査でいたいと同じような様相が分かっています。そういうことで一応方位、北に対してどのぐらいの角度をもっているかということで見直していきますと、最初に出てくるⅠ期はこの辺り、ちょうどため池から上がったところの一番平坦な、台地の中央に建て始めるということなんです(図18)。これは兵舎という解釈もありますが、東西棟ですから、正面は南です。かなり質の高い何らかの意味のある中心的な建物だろうと思っています。そういうもの

方向を向くということです。つまり測量をきちんとするということです。北極星のほうを向いた建物がⅢ期でいろいろなところにあります。つまりⅢ期の建物が分散して出てきます。つまりⅠ期の建物とⅡ期の建物のさらに外側にⅢ期が造られるというように考えます。奈良時代の初めに、ここにありますが、礎石の建物の周りに掘立の柱が回るとい、大野城にもありました同じようなものが同じ時期に出てくるのではないかと思います。ここにも一つ、二九号、一一号と二二号という建物が同じ時期に出てくると考えています。

Ⅳ期とⅤ期になると少し増えるのですが、八世紀の末ころから九世紀にかけて、同じ方向の建物で、あとは少し建て替えが行われたのがⅤ期ではないかと考えています。このとき一番特徴的なのは、東側に拡張されて、このときにⅠ期の建物がどうだったかということとは分らないですが、こちら側に倉のようなものが並び建っているということです。私の考えでは、Ⅰ期のときの中心的な建物は東西棟ですから正面が南で、南向きの立派な建物は、この後もここに建て替えられていますので、ここは非常に重要な場所だという認識を当時の人も持っており、大事にされていたのではないかと思います。東側に拡張されます。このときに倉がずつと並ぶという、先ほどもお話がありました。並ぶ建物が出てきます。これはまさしく地方の郡のお役所に付属する正倉院、正倉という税の稲を収納するあり方と似ています。このようなエリアがⅣ期になるわけです。もつと東側のほうに延びていくと、方二町ぐらいの範囲で考えられるのではないかと気がしています。

年代	行方	大野城建物群		鞠智城建物群		施設名
		1期	2期	1期	2期	
7C	上層-1号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-2号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-3号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-4号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-5号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-6号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-7号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-8号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-9号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-10号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-11号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-12号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-13号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-14号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-15号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-16号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-17号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-18号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-19号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-20号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-21号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-22号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-23号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-24号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-25号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-26号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-27号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-28号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-29号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-30号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-31号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-32号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-33号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-34号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-35号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-36号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-37号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-38号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-39号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-40号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-41号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-42号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-43号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-44号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-45号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-46号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-47号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-48号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-49号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-50号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-51号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-52号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-53号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-54号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-55号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-56号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-57号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-58号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-59号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-60号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-61号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-62号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-63号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-64号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-65号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-66号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-67号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-68号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-69号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-70号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-71号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-72号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-73号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-74号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-75号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-76号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-77号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-78号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-79号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-80号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-81号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-82号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-83号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-84号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-85号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-86号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-87号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-88号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-89号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-90号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-91号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-92号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-93号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-94号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-95号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-96号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-97号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-98号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-99号	1期	1期	1期	1期	大野城
7C	上層-100号	1期	1期	1期	1期	大野城

図19 大野城・鞠智城建物群対照表

そうなりますと、八角形の建物はどうなるのかということですが、ここは倉庫群というエリアの中にありますので倉の可能性があり。ただし高床の倉かどうか解りません。高床の倉は切妻の倉ではありませんので、もちろん八角形の倉ですから、よく文献に出てくる八面の校倉のような、何か非常に特殊なものを納めた倉がここにあったと考えるのが一番分かりやすいというのが私の結論です。

これを大野城と比較してみると、大野城は大宰府、水城、大宰府口城門というものと時期の変遷がたい似たような推移をしています(図19)。これに合わせて大野城の編成も考えているわけですが、それと同じように鞠智城も、最初に掘立柱の側柱が出てきます。これは一緒です。七世紀の終わりに単弁の瓦が葺かれたものは、礎石の大型の倉庫、長倉だろうと考えています。これがまさしく「統治」とい、六九八年に相当する

のではないかと思います。その後違うのは、大野城、基肄城では三×五間ですが、鞠智城では三×四間です。礎石の周囲に掘立柱をめぐらせた、礎石・掘立柱併用の建物、これは後で紹介しますが、こうした特殊な



写真41 高安城跡・高床倉庫の礎石

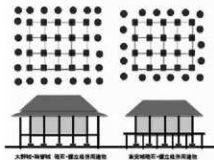


図21 掘立柱併用礎石建物



写真40 大野城跡・増長地区
掘立柱併用礎石建物

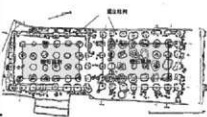


図20 大野城跡・村上地区礎石群

ところが穴があり、これが掘立柱です。これはどういう構造なのか。私はかつて論文で、これは塀であると考えました。封をするために塀をしたのだと考えています。倉は米を入れて満倉になると封をするわけですから、あとは建て増していくしかないわけです。不動倉、動かさないうということをと不動といいます。これが大野城でできた掘立柱列が周りがある面です(図20)。同じ規模で柱筋をそろえてきれいに並んでいます。これは高安城の倉ですが、ここにも実は、周りに掘立の柱が建っているものがあるということです(写真41)。

どういふことになるかというと、これは想像図です(図21)。大野城、鞠智城



写真39 鞠智城跡・八角形建物

ものが大野城と鞠智城、高安城にもあります。金田城は分かりづらひですがあります。

その後三×四間が少し間をおいて多分続いていくと思うのですが、土器の空白期もありますので、ここはないかもしれません。そのままの可能性がありますが、九世紀になって三×四間が出てきます。この柱の寸法が、大野城の三×四間の柱の寸法とぴったり一緒です。要するに八世紀の終わりから九世紀ころに、一つここに画期があつて、三×四間を再度建て直すという時期があります。

この八角形の建物は何か分かりません(写真39)。武器を入れたかもしれないですが、こういうものがこの時期に、掘立の八角形が出てくるということですが、その後に建て替えの礎石の総柱が出てくるといふことです。基本的な流れは大野城とほぼ同じような動きをしているのではないかと見ているわけです。細かく違うところを探せばたくさんあるわけです。とにかく鞠智城の場合は、建物の規模、構造がかなりバラエティーに富んでいます。大野城ほどちらかいというあまり面白くないです。教科書にびたつと沿うような建物ばかりですが、少しバラエティーもあるということです。

これは掘立柱併用建物といっているものです(写真40)。三×五間の礎石の周りに柱筋をそろえるような

の場合には、屋根からさらにもう一つの屋根が出るような、こういう構造が一つ考えられます。ところが高安城の場合は少し違います。柱の位置が一つずつずれていきます。真ん中に掘立柱がきています。ということ、これはもしかすると縁側のようなものが臨時的にあつたのかもしれないがよく分かりません。もう一つの案として、大屋根がこれにもう一つあつたのではないかとこの案もあるようです。いずれにしてもこのような礎石の周りに掘立柱があるというのは、今のところ古代山城だけです。平城京にもいろいろな掘立柱併用の建物がありますが、身倉に掘立柱を用いるので性格が異なります。

三、鞠智城の倉庫群の形成

このような倉というものが、古代山城の中にたくさん建てられているということです。鞠智城の場合に「菊池城院」、後で出てきますが「院」ということから、当然部衛の正倉のように「院」を構成していたことは間違いないと思います。これは九世紀ですから、そうなりますと、私が言ったⅣ期からⅤ期のところでは方二町のようなものが想定されますので、そういう「院」があつたのではないかと考えています。

倉のあり方というのが、部衛正倉の場合には整然と並びます。この近くでは御殿前遺跡というものが、東京大学の先の北区の飛鳥山の手前に、かつての大蔵省の造幣局がありました。そこに部衛、部の役所の倉が建ち並んでいました。その倉の様子は北区の飛鳥山博物館の中に原寸大の模型がありますので、ぜひ見てください。これは参考になります。倉にどのようにして稲穀を運び入れるかという模型が展示してあります。

そういう部の役所に貯め込まれた非常用の米の倉庫のあり方と非常によく似ているということがいえるのではないかと思います。特に大きく長い倉、長倉と呼ばれているものが一つ象徴的にあるということも、部衛の正倉と大変よく似ています。そういう点では何ら変わりはないといつてもいいのではないかと思うわけです。

四、倉庫形成の目的

目的は何のためかということですが、よく分かりませんが、もちろん山の中に貯蔵するわけですから、単に非常用のためであれば平地でいいのです。山の中に貯め込む、しかも古代山城の中に置くということは対外的なことがあるのは当然ですが、部衛正倉のあり方に似ているという点では、もう少し地域支配という観点も重要だと思います。私はこういう倉庫は奈良の大仏ではないかと思つています。みんなを助けてくれる、そういう精神的な支えにかわるもののような気もするのです。そういうものが九州のいろいろなところ、特に古代山城の中にも置かれていたという点では、対外的なものもありますが、内政的な比重というものが強かつたのではないかというのが私の結論です。

時間も来ましたのでこれで終わります。ありがとうございました。

講演②

平安期における鞠智城

— 九世紀から一〇世紀の対外関係と

『菊池城院』 『菊池郡城院』 —

講演者紹介

加藤 友康（かとうともやす）

東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学府博士課程中退（修士課程修了）。東京大学史料編纂所にて『大日本史料』の編纂と正倉院文書の調査研究に従事。東京大学名誉教授。現在、明治大学大学院文学研究科特任教授。

講演② 平安期における鞠智城

「九世紀から一〇世紀の対外関係と『菊池城院』『菊池郡城院』」

明治大学大学院文学研究科特任教授 加藤友康

こんにちは。ただいまご紹介いただきました加藤と申します。私は文献の史料を中心に拱関時代のことを研究してきましたので、本日のような、奈良時代から九世紀ぐらいというのは範囲外なものです。昨年、先ほど所長の吉村先生からもお話がありました。律令国家の成立期の鞠智城に焦点を合わせた形でシンポジウムが行われました。その後、平安時代はどうなるのかということで、次回の報告でというお話をいただきました。先ほど皆さんからの報告にもありましたが、平安時代の史料というのは四つしかないのです。その四つをひねってどういう結論を出すかということです。考古学の場合は実際の発掘の倉庫の話などいろいろ分かるということがありますが、先ほどの岡田さんのご報告では、史料のない時代だから考古学でやるのだということです。私は史料しか扱えませんが、史料を見た段階で九世紀ぐらいにどういことがいえるのかということについてお話をしたいと思います。

一、鞠智城発掘調査の到達点の確認

発掘の到達点の確認ということです。昨年のシンポジウムで矢野さんに報告をいただきました。また、本日も皆さん方から繰り返し調査の成果についてお話をいただいたと思いますので、その点について少し簡単にお話をしたいと思います。一九六七年から始まって、二〇一〇年までの三二次の調査のまとめについてはレジュメのほうにも書いておきましたので後でご覧いただきたいと思います。

七世紀後半から一〇世紀中頃にかけて五期に区分するという点では意見が一致して、報告でそのように反映されていますが、特に平安期というと、Ⅳ期とⅤ期のところをどのように考えるかという問題があります。Ⅳ期が始まる前の段階ということで、報告でも繰り返し強調されていたと思うのですが、土器の空白期間ということに注目されていると思います。先ほどの報告の中でもいろいろな図表がありました。熊本県



教育委員会のパンフレットから取ってきました(資料編32頁図1)。八世紀第2、第3四半期のところで、出土の土器がほとんどなくなるということから、実はここで鞠智城の性格が変化しただけではないかということ、たゞいまの赤司さんいわれていると思います。その変化とはどういうことか、先ほどの赤司さんの報告にもありましたように、どちらかというと、それまでの古代山城としての性格が、倉庫群とか備蓄施設という傾向になっていくのではないかと、先ほどお話ししたいと思います。私は逆にそのことについて、文献のほうからそのようなことは分からないのではないかと、もう少し鞠智城を取り巻く環境の変化ということについて、文献の史料から分かることを少し見ていきたいと思います。

があります。鞠智城は肥後国のある特定の場所にあるという、日本の国内だけではなく、日本列島から朝鮮半島にかけての国際的な関係の中でもう一度考えてみようという趣旨でお話をしたいということです。

二 平安時代の史料からみた鞠智城

(一) 四つの史料

平安期の史料ということで繰り返しますが、実は四つの史料しかありません。私が専門にしている摂関時代のところには何かあるかということで調べたのですが全然ないのです。【史料四】(以下、資料編参照)の元慶三年の「肥後国菊池郡城院の兵庫の戸、自ら鳴る」という記事で文献史料上からは消えてしまっています。

【史料一】で「肥後国言す。菊池城院の兵庫の鼓、自ら鳴る」とあります。文武天皇の段階で鞠智城を統治するという、大野城などと並んで修理をするという以降、一六〇年ぶりに現れてくるのが【史料二】です。そこからわずか二〇年ぐらゐの間に、四つの史料が出て、それ以降はたつとなくなっています。この四つの史料について文献をやっている関係で、文字にこだわって少し見ておこうと思います。

それはどういふことかという点、【史料一】と【史料四】で出てくる史料は「兵庫」で、「倉庫」ではありません。文字上「倉庫」とは書いていないというのが一つです。もう一つは、【史料三】で大宰府が肥後国菊池城院の兵庫の鳴動を報告しているという点です。大宰府との関係です。しかもそれは肥後国の菊池城院です。【史料四】はどことが報告したか明確には残っていません。【又】という書き出しで始まるのですが「肥

後国菊池郡城院の兵庫の戸が鳴った」というようになっていきます。「郡の城院」という言い方になっています。この表記の仕方の違いということを少し考える必要があるのではないかと、文字にこだわってみたいと思います。

(二) 倉と庫

われわれは一般的に「倉庫」といいますが、【史料五】に掲げましたように、おおよそ「倉」というのは、高く乾いたところに置くというようになっています。池など周りを水で囲みなさいという規則があります。日本思想大系「律令」にあります「クラ」という字には幾つかの漢字が当たるということで補注に書かれています。令によれば「倉・蔵・庫」とあります。先ほどの話にもありましたが、都に運んでくる調庸物を入れる「クラ」は「蔵」という字を使います。お米を入れるのは「倉」あるいは「倉庫」というようになります。「兵庫」や書物を納めるのは「庫」というように使っています。これらを互いに混用することはないというように、関見さんが補注で触れています。先ほどの四つの史料は「兵庫」で「庫」ということなので、現在発掘の成果で七二棟出てきている、どの掘立なり礎石の建物に該当するか難しいと思いますが、少なくとも米を入れている米倉ではなくて、「兵庫」が動いたことを示しているということ、史料上そのよ

うな表記をしていることに注意しておく必要があると思います。発掘成果と倉庫群については、先ほど赤司さんから細かく有益な話をいただいたので驚いたのですが、非常に参考になりました。繰り返しにはなりますが、これはⅣ期の場合です。土器がなくなると、その後のとこ



IV期建物群



V期建物群

図22 鞠智城跡IV・V期建物群

原図は熊本県文化財整備報告第4集「鞠智城跡」2012

ります(図22上)。その後のV期になりますと、五六号の建物や、その他、四五〜四八号という建物があるということ(図22下)。

これらについてどのように評価をされるかということです。実は最初の西住さんのお話の中でもありましたが、現在の成果を若手の人に勉強していただくということで、熊本県ではいろいろ助成金を出しているということ、その報告書が毎年出ています。その中でも明治大学の五十嵐基善さんの非常に優れた論文「鞠智城と古代社会3」二〇一五、以下論文の刊行年のみを記す。出典は巻末の当日配布レジエメ集参照」が

あるのですが、そこでも「倉庫」に注目しています。しかしどちらかというと、武器の庫ということとらえることの消極性があるのではないかとということがあります。もちろん「兵庫」が鳴動しているということなので、城内に「兵庫」が置かれていたということは指摘されていますが、大量の武器が置かれていたということは考えにくいということから、どちらかというと消極的な評価となっています。ただし元慶の乱においては、不動倉から稲穀支給を実際に行っていますので、そういう点での注目ということで、戦争と倉庫の関係については積極的な指摘もなされています。ただしここで私が強調したいのは、「兵庫が鳴る」ということを「鳴動」といいますが、それと対外的な危機を喚起するという関係から、対外的な軍事的要素を取り除くことはできないのではないかということで、その視点から少しお話を進めていきたいと思えます。

稲穀の蓄積ということですが、それについては既に「史料六」の大宰府跡出土の木簡(写真42)に関して、本日のコーディネーターの佐藤信さんが以前の鞠智城シンポジウムで報告されています(二〇一四)。基

大宰府跡出土木簡(不丁官衛地区) (『木簡研究』九一・九八七年)

(『班給筑前筑後肥前等国遺書』鞠智城跡陸大監正六上田中朝文)



(26.4×3.4×6.011)

写真42 大宰府跡出土木簡(不丁官衛地区)

肆城からの稲を運ぶということが、それを大宰府の管轄下にあったものとして、西海道全体に関わる機能を果たして、米をそこに蓄えていた、それに関する木簡だろうということです。鞠智城そのものではないのですが、鞠智城でも同じよ

ろです。先ほどお話しになった大型礎石を伴う建物、それと同じ時期、少し北西のほうにある部分と南側にある建物、その他幾つか総柱の建物などがあり、五〇号建物があるままⅢ期から続いていくのではないかと指摘をされているものがあ

うな形で、倉庫群に蓄積された糧も使われることがあったのではないかとこの想定を、昨年度に出された刊行物の中でも指摘をされています。

その前提としては、坂上康俊さんの、大宰府を中心にして西海道を全体として閉じた空間として、そこで対外的に対処するという理解〔古代史の舞台西海道〕『列島の古代史1』二〇〇六〕があると思うのです。そのような形の閉じた領域として、西海道を全体として関わるものとしていいのかわかるかということについて見ておきたいと思います。糧を貯めるという備蓄機能を無視するものではありません。実際には【史料七】で引きましたように、肥後国で大雨が降って、そのときに六郡が漂没してしまったということで、その間、田園が数百里落ちて海のようになってしまうという記事があります。同じようなものとして、『史料八』に、肥後国で暴風雨があり、田園が全部そこで水没してしまうということで、その結果大宰府に命じて、遠年の糧穀四千斛というものをもって、それで勉めて存糧を加え、生業を失はしむることなからしめよということを支給をしたという記事が残っています。

暴風雨による肥後国の被害に対する、遠年の糧穀の支給ということですから、これは不動穀ということになります。不動穀四千斛でもって、それを賑恤したということになっています。当時の一斛というのは現在の〇、四倍ですから、一、六〇〇斛（石）ということですが。当時は一斛を白米にするのと五斗となり二分の一に換算します。一斛一五〇キロですから、すると白米二〇〇トンということになります。紙袋で大き目の三〇キロ詰の米袋がありますが、あれの四〇〇〇袋分に相当する食糧となる穀を倉から出して支給したと。

それぐらいの大量の備蓄があったことを示していると思います。ただ、これがどこにあったかということですが。実は肥後国の場合にもよく分からないところがありますが、少なくともどこかにあった不動倉から糧穀を出していたということ自体は否定することはできないと思います。それをただちに鞠智城の備蓄の機能に結び付けることができるかどうかということがあります。

鞠智城の場合に、倉庫群としてまとまりを持っていたという、今までの皆さんのお話があります。【史料九】で鞠智城そのものではないのですが、菊池郡の倉庫についての記事が『三代実録』に残されています。これでは大宰府からの報告として「群島が数百、菊池郡の倉舎を葺く草を噛み抜く」ということで、そのことが怪異だと報告されたのだと思います。ここで「倉舎を葺く草」となっていますから、恐らくは菊池郡の倉は茅葺屋根であつたはずで。

実際に他国の例を見ますと、下野国府の場合に、下野国府跡から出土した木簡の中に、一つ注目されるものがあります【史料一〇】。それは瓦を造る所、「造瓦倉所」という表記が見られ、瓦葺の倉を造るための組織があったことを示す木簡ですが、延暦一〇年ごろと推定される土坑から出てきたものです。『貞観交替式』という史料によれば、屋上にそれまでは火よけのために泥を塗っていたが、雨にあつた場合にはそれがはがれてしまうので、そこは板に泥を塗ってもいいのだが、そこを草で覆って風雨を防いできたけれども、延暦五年の段階でそれをやめて板葺にしなさいという太政官の命令が出ています。ただ、それは同じ史料に引いてある延暦九年の「新案」ではこれを撤回するとなっています。そうなると思えばどうするかという

ことで、瓦葺にすることが行われるということで、下野の場合は瓦を造る活動の中でこの木簡がつくられたのではないかと、かつて想定したことがあります。

【史料九】の菊池郡の場合、依然として草葺であったということですが、同じ時期の鞠智城の場合には大きく様相が異なっています。瓦葺ということになりますと、鞠智城の倉庫が備蓄としての機能を持つという意味での重要性は否定できないだろうと思います。

(三) 「鳴動」記事の特質

ただもう一つは、鳴ったのは「兵庫」ということなので、「鳴動」の記事ということを少し見ておきたいと思えます。清田美季さんが論文(二〇一五)に書いているのですが、「鳴動」の記事については慎重な評価をされています。どちらかということ否定的な評価がされています。ただこれには私は疑問が残ります。「鳴動」の記事ということで、レジュメにも引いておきましたが二八例ほど見えます(資料編36頁表1)。都の「鳴動」の記事もありますが、地方からの報告を受けて、中央の政府が対処した、※印を付けた一九二二、二六の事例について少し見ておきたいと思えます。

一九では「若狭国が言す」ということで、国の印と公文書を納めている「庫」と「兵庫」が鳴ったとあります【史料一一】。「国司に下知して曰く」ということで「彼の国に宣告して、兵戎を戒慎せしむ」、外敵が来る可能性があるから警戒せよということを言っておいたところ、また鳴ったので陰陽寮に占わせたら、遠国の人、遠方から人間がやって来る可能性があるという結果が出たので「兵乱と天行(はやり病)と災を成して相ひ仍る。宜しく益警衛し兼ねて災疫を防ぐべし」とされています。外敵なり外からの疫病の流入などに注意をせよということ占いの結果にもとづいて命令を下している記事です。

二二の場合にも、「大宰府が言す」ということで、大宰府からの報告で、肥前国杵嶋郡の兵庫が振動し鼓が鳴ったとあります【史料一二】。それに対して「善龜に決せしに」と、難しい字が書いてあるのですが「善龜」は龜の甲羅のことですから、龜の甲羅で占いをする龜卜をさせて、そのときに「隣兵を警むべし」ということで、隣国からの兵、具体的にいうと新羅ですが、それに警戒をせよと命じているということがあります。

二六でもそうですが、隠岐国が兵庫の鳴動を報告したところ、陰陽寮に占わせて、遠方の兵賊が北方から来るからということで、太政官が因幡以下の国に命令を下して警戒をさせるといふ記事です【史料一三】。このように「兵庫の鳴動」というのは、対外関係の危機意識というものと密接に関連しているということがあります。菊池城院の兵庫に現れた怪異というか、鳴ったということは、西海に出没する新羅の海賊との関係とか予兆として理解されたのではないかと、鳴ったということは、濱田耕策さんは、シンボジウムの一環としてなされた報告会で言われています(二〇一〇)。その点は注意をしておくべきだと思います。

三. 平安期の対外意識と鞠智城

(一) 対外意識の三つのレベル

平安時代、この時期の人たちが持っていた対外意識はどういうものだろうかということで、三つのレベル

で考える必要があります。政策を実行して何か事を起こすのは中央の政府ですから、そういう意味で一番トップにあるのは中央の政府です。現地で新羅なりと直接向かい合う、地方の役所という意味では大宰府ということになります。それともう一つは、現地の一般の人々ということで、三つのレベルに分けて考える必要があります。

①大宰府・地方官司の意識

最初に大宰府の認識ということですが、これは【史料一四】に引きましたが、新羅の海賊が博多に来て、豊前国の年貢を運んでいた船を襲ったという記事があります。これについて七月二日に、都から勅が出て「大宰府に謹貢して曰く」ということで、大宰府に対してしっかりせよということが言われています【史料一五】。実は五月二三日に事件が発生したわけですが、それから二三日間もかかって報告したということ、非常にゆっくりしているわけです。本来律令制の建前からいうと、国で何か問題があったときには、ただちに駈を発して、つまり駈馬を出して中央に報告することになっています【史料一六】。

実際に西海道の事例では、広嗣の乱のときには報告が都まで四日です。平安時代になるとそれがだんだん遅れてくる（資料編38頁表2）ということはありませんが、二三日もかかっているということ、非常にのんびりしているというか、逆にいうと、大宰府にとってみれば危機意識がないということです。これは第一報で大宰府から報告して、さらに朝廷でも一七日経ってから「大宰府、しっかりせよ」と謹貢をしているので、合わせて三九日か四〇日ぐらいで、事件発生から中央の結果が出るということ、そういう意

味では非常にゆっくりしている、危機意識というものが薄いということです。特に中央ではなくて地方の官司の場合にその傾向が顕著です。ただこれは中央にとってみれば、博多に近いところで襲われたわけですから、中央の政府はこの事件に非常に大きな衝撃を受けたということはあると思います。

②「在地」(現地の民衆)の意識

現地の人はどうかということで、実は【史料一七】は面白い史料です。対馬国の下県郡の人で、卜部乙屎麻呂という名前の人が、鶴嶋島と書いてありますが海鞘のことです。これを捕らえようとして新羅に渡って、彼自身が捕まり、のちに帰ってきて報告をしたという記事です。この中で、新羅で囚われの身になったという彼が、対馬の奪取計画を新羅でやっていることを目撃したことを報告したわけです。それに対して、因幡や伯耆という朝鮮半島側の日本海側の諸国に、守りを固めよという命令を出したという記事が【史料一七】です。実際に日常的には彼は向こうへ渡って、海鞘を取っていたということがあります。それは山内晋次さんが指摘をしています【1100頁】。

もう一つは、ここで目撃しただけではなくて、「乙屎麻呂、密かに防援の人に問う。答えて曰く、対馬伐ち取らんとあります。いろいろ準備をしているのは何だと聞いたわけです。囚人を監視している看守が、これから対馬を奪うために攻撃するのだ」ということを言ったということです。卜部乙屎麻呂と新羅の看守の間でコミュニケーションが成り立っているわけです。どのような言葉でしゃべったかは分かりませんが、少なくとも言っていることはお互いに理解しているということです。日常的には会話が成り立つぐらいの、一

一般の間ではそういうことがあるということに注意しておく必要があると思います。現実には島で襲われたという形の軋轢もありますが、【史料一八】や【史料一九】などはそれを示しています。そういう意味では交易なり、日常的な交流と、その逆の襲撃事件という二つのものが表裏一体で日常的に存在しているという面にも注意しておく必要があると思います。

③ 中央政府の意識

ただ中央政府のしてみれば、村井章介さんが「過敏な反応」という一言で評価されています（一九九五）。天長年間ぐらいから軍備の再編成を行っており、大宰府管内の兵士に關してさまざまな改編ということをやっています。時間の関係で一つ一つは説明できませんが、全体としては貞観年間ぐらいまでの間に鴻臚館を中心に、そこを守るような形で出てきています。そういう意味でいうと大宰府、さらに海に面している鴻臚館というところ、博多の港のすぐ近くがメインになっています。実は有明海側のことは中央の政府はあまり認識していないということがあるわけです。先ほど紹介した新羅の海賊の場合も、豊前国の船が襲われたのは博多の津のところで、中央政府の目はそちらのほうに向いているということがあります。

(二) 中央政府の「危機」意識と対外政策

① 引き金となった事件

日常的に一般の民衆のレベルでは、交流や連携など会話も成り立つとともに、時々は紛争が起こるということですが、中央政府からすると、全体として紛争を統制するということはある得ると思うのですが、その一方で恐れていたことは国家に対する反逆です。つまり日常的に国境を越えた人同士が結び付いて、中央政府に対して反逆を試みるという、そういうことについての中央政府の恐れが非常に大きいということがあります。そうした中央政府の危機意識の中で引き金になった三つ事件を紹介したいと思います。新羅人と地方の官人との間での、私的な交流に伴う反乱の要素ということについてです。

一つ目は【史料二〇】で、肥前国の基肄郡の川辺豊穂という人が、郡司である擬大領の山春永という人が新羅人とともに新羅に渡って、弩という兵器、大弓のことですが、弩を使う術を習って対馬を奪取しようとして計画しているということを告発しています。そのときの一味として、藤津郡領や高来郡擬大領という郡司層、また彼杵郡人という、共謀者の名前を挙げています。これを見ると分かるように、五島列島から有明海側をめぐるルート地域の人間が共謀しているということになっています。

【史料二一】の場合、隠岐国の浪人安曇福雄が、前守越智貞厚が新羅人とともに反逆を図っていると密告をしたという事件です。貞厚自身は遣唐使として唐に渡った経歴を持っています。その後は大宰府の大典という職についており、円珍が入唐するときに大宰府が発給した公驗という、唐に渡るとききの証明書に署名している人です。彼も大宰府の官人として新羅の交易に関与していたという可能性が強いわけです。安曇福雄という人と交易をめぐるトラブルがあったのではないかと、山崎雅稔さんは指摘しています。

〔1001〕。

三つ目は一番有名な事例です。筑前権史生という筑前国司が新羅国牒を証拠として進めて、大宰少弐とい

大宰府のナンバー2の地位にあった藤原元利万呂が、新羅国王と通謀していることを告発したということがあります。実はこの事件はその後、中央から推問密告使というものが派遣されたのですが、その後の処分については史料に見えないので詳細不明ですが、このような事件があります〔史料二二・三三〕。密告者も筑後国の官人ということです。

②発生場所としての肥前・肥後

これらのことを幾つか見ていくと、実は有明海のルートを利用して通行していた人同士のトラブルで利権争いの可能性もあります。国境を越えた反乱の芽として、中央政府は認識していたと思うのですが、新羅との内通事件で関係しているところは藤津郡、高来郡、彼杵郡です〔資料編42頁図3〕。これらの諸郡は、新羅から五島列島を介して有明海にいたるルートに面した郡であり、博多から新羅のルートではなくて、こちらを通るルートで問題が起こっています。石井正敏さんが既に指摘していることですが、貞観一五年に渤海国の遣唐使が漂着した事件では、天草郡に漂着しています。天草に漂着したということで、有明海を防衛拠点として、鞆智城の存在意義が改めて認識されるようになったのではないかと指摘もされています〔101頁〕。

五島列島については郡の新置の上申ということが、〔史料二四〕に見えます。肥前国松浦郡の庇羅・値嘉という二つの郷からなっていたものを、肥前国から分離して対馬と並ぶような一國あつかいとするよう行政区画を格上げしてほしいということが要望として出されています。理由として、大陸に近い島であるから唐人・新羅人がこの島を必ず経由しているとか、貞観一年の、先ほど申しました博多での事件などの新羅の船がここから出て行ったといわれているということがあげられています。大宰府としても五島列島における防衛体制を強化する必要性に迫られたという認識がその背景にあると思います。つまり緊張関係の発生場所が移動するということです。有明海のほうに重心が移動していることが、特に貞観年間から元慶年間にかけての九世紀末ぐらいのところで、事件の発生場所を押さえていくと、そのような傾向がうかがえるのではないかとすることがあります。

おわりに

九世紀の末にビークに達する中央政府が醸成していた危機意識ということについて、元寇に並ぶぐらいの、「寛平の外寇」というようにもいいますが、寛平年間、宇多天皇の時代ですが、その時に発生した新羅の海賊襲来事件という大きな事件に注目したいと思います。時間の関係で経過は省略します。中央政府は情報収集に素早く対応しており、先ほどの貞観一一年の海賊事件との対比では、危機意識の下、素早い対応が取れるということを示した事件でもあります。この寛平五年の事件の場合も、実は肥前と肥後が舞台になっているということで、有明海沿岸の郡が襲われているのです。

九世紀の末に對外的危機意識がビークに達した以降、東アジアをめぐる国際環境は一〇世紀以降どうなるかということが、実は一〇世紀の話をしようと思っていたのですが、時間がなくなりましたので結論だ

けにします。唐が減んで宋が建国され、朝鮮半島では新羅が減んで高麗が朝鮮半島を最終的に統一するとい
う中で、日本の国は、石上英一さんがこういう言葉を使って説明しています。「積極的孤立主義外交政策」
を取っていると(一九八二)。どういうことかいうと、観念的には中国と同等、朝鮮(高麗)よりは優位に
立つ、そういう建前を保ちながら、国と国との正式な外交関係を結ばないという外交方針である、一言で言
ってしまおうとそういうことです。そういう政策を取ることによって、防衛拠点という意味での鞠智城の役割
もだんだん減っていくことになります。鞠智城は一〇世紀には廃絶するとされていますが、その役割はだん
だん低下していくことになっていったのだと思います。

文献の史料から鞠智城そのものには迫れなかったのですが、周りの状況というか、その中でもう一度考え
直してみてもどうかという問題提起ですので、後でまた討論などのときにご意見をいただければと思います。
ありがとうございました。

パネルディスカッション

コーディネーター紹介

佐藤 信（さとう まこと）

東京大学文学部国史学科卒業、東京大学大学院人文科学研究所修士課程修了。奈良国立文化財研究所（平城宮跡発掘調査部）研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教、東京大学文学部助教を経て、現在、東京大学大学院人文社会系研究科教授。専門は日本古代史、文学博士。

パネラー

岡田 茂弘（国立歴史民俗博物館名誉教授）

赤司 善彦（福岡県教育庁総務部文化財保護課長）

加藤 友康（明治大学大学院文学研究科特任教授）

西住 欣一郎（歴史公園鞠智城・温故創生館長）



佐藤..

本日は一時から始まりまして、四名の講師の方の大変充実した内容の話まった講演を聞かれて、来場の方さんにおかれましては、頭がいっぱいになっておられると思います。鞠智城をテーマにして、まだまだくめども尽きない、いろいろなテーマが出てくるということで、私も大変興味深く拝聴していました。多岐にわたる内容について、これから約一時間、パネルディスカッションをして、さらに深めていきたいと思えます。どうぞよろしくお願ひします。

さて、全体的なパネルディスカッションの章立てとして、基調講演あるいは講演の三名の順番からいくと、岡田さん、赤司さん、加藤さんの講演の主なテーマに沿って、一つ目は岡田さんの講演にあ

りました内容を少し深めていきます。二つ目は赤司さんの建築から見た鞠智城という課題の中身をもう少し深め、三つ目は加藤さんの話にありました平安時代の鞠智城をどう評価するかということについて議論をしたいと思えます。それぞれの話の中で、西住さんにこれまでの調査成果との整合性について話をさせていただくことしたいと思います。

まず、一つ目の岡田さんの話は多岐にわたるもので、私も初めて伺った内容もあります。岡田さんは約五〇年前の鞠智城の最初の頃の調査からずっと関わって現場も見てきたということですので、鞠智城の調査・研究の長い歴史も感じるわけですが、それをだいたい頭の中に入れておられるということ



で、私は素晴らしいと思いました。本日のお話の中では、新しい見方、知見を幾つか提供していたいたように思います。その中で四つ程の新しいテーマとして、ここで特に他のメンバーの方のご意見も聞きたいと思ったことがあります。そこから始めたいと思います。

最初は、今日の基調講演の中で私も驚きましたことで、鞠智城の創建が大野城や基肄城よりも以前に、対単人の政策の中で造り始められて、それが後に白村江の敗戦を踏まえて、対外的防衛機能を持つようになったのではないかといいことを言われたと思います。その点について深めたいと思います。その場合、今までは大野城・基肄城と合わせて、『統日本紀』に初めて名前が載って六九八年に修理されたという記事がありました。恐らく大野城・基肄城と同じように鞠智城も白村江の敗戦の後の対外的防衛のために造り始められ、約三〇年たつて修理が必要になった三つの城が『統日本紀』に載ったのだらうと考えてきたわけです。それ以前の造営ということは意外な感じがしたのですが、岡田さん、その段階での単人との関係は、背景として何かお考えはありますか。

岡田

本日は考古学の話だから、文献史料がない時代について想像たくましく話そうということを感じて話しています。実は大野城、基肄城は出てくるのに、鞠智城の造営の時期がなぜ史料に出てこないのか。大野城、基肄城と並んで、文武天皇二年に出てきながら、創建については何も書いてありません。なぜ出てこないのだらうと、まずそれが一つの疑問でした。

それからもう一つは考古学の土器の編年の問題です。明らかに大野城、基肄城とともに造られたと考えられる六六五年前後よりも以前の土器が出てきています。これをどう考えるのかというのがもう一つの問題です。ただし先ほどお話ししたように、古い土器があるからといって、その時代に造られたとは断言できないのです。考古学の場合には、古い時代のもも後の時代まで使われることがありますから、それだけでは肯定できないのです。

鞠智城の貯水池の報告書の断面図を示せばよかったのですが、報告書を読んでいたことを前提にしますと、貯木場のところでは各時期のものが層位的に出てきていることが報告されています。

貯木場のところで、瓦の出る包含層より一層下に、須臾器しか出ない包含層があります。そこから出てくる須臾器は明らかに古いのです。ということは、瓦が使われる以前に鞠智城が既に造られていたということ層位的に証明しているのではないかと。考古学では、層位は型式に優先するという言葉があります。型式的に土器をどうだこうだというよりは、層位が実証できると。しかも貯水池の場合には層位がきちんと残っているわけだから、これは古く考えてもいいのではないかと。それを結び付けて、なぜ鞠智城が大野城や基肄城と一緒に出てこないのかというのは、実は既に造られていたからです。既にあった城だからこそ出てこないのです。要するに鞠智城が古いということ、実は語っていないのではないかと。

同時に築城とは言っていないのです。鞠智城については築城の記事はもちろんありません。最初に

出てくるのが「精い治む」です。築城と書いているものについては、西日本の古代山城だと理解しています。「城を治める」と書いた場合には、大部分の方が、明治時代から「修」と書いたら修繕、修理だというように読んでしまうのです。実は「修」の字については「つくる」という意味です。「つくる」は、新たにつくっても「つくる」なのです。修理だとは何も書いていません。それを修理ではなくて「つくる」と読んでいいのではないかと。

それについて付言しますと、高安城を築城した二年後には修理をしよう、修しようという言葉が出てきます。これを修理だと考えると、わずか二年で修理しなければいけないのかと。しかも天智天皇が高安城に上ったときに「修しよう」と言ったが、民の苦しみを思つて、そのときはやめた。その年の冬に修したと。つまりこれも「つくった」と読めば読めるわけです。それで何をしたかという、倉庫を造っています。倉庫を造ったということが書いてあります。それから二年後にも修して、つまり造つて、塩と米を入れる倉庫を造つたと書いてあります。いずれも高安城の中の倉庫群を造つた記事です。そう思えば、三野城、稲積城についても、「修」はそういう意味ではないかと思つたわけです。

鞠智城を造り始めて、その翌年には三野城、稲積城を造り、さらに二年後に、唱吏国つまり薩摩国に柵を立てて戌を置いた、兵隊を置いたという記事が出ています。これも関連して考えると、鞠智城の修理を、精い治めてから、その後日向国と、後の大隅国に対して城を造つて、さらに薩摩にも造つたというように読めるのです。そう読んでみますと、大隅も薩摩も日向も政庁、国府の発掘調査がろくにされていません。恐らく発掘をして、すぐ真下にあるかどうか知りませんが、その周辺で城柵的な施設が出てくる可能性があります。それが出てくれば、三野城であり稲積城だろうと考えます。全体の中で鞠智城の以前にそういうものがあり、それが南九州の統治のための前線本拠地が鞠智城だったという性格に結び付くのではないかと考えたわけです。

佐藤

鞠智城の創建については、白村江の敗戦直後の対外的な危機に対応するため、防衛のために造つたという機能と、もう一つは南九州の単人対策での機能ではないかという二つの機能が考えられるわけです。それに関するたいたい話は新説かなと思います。

西住さんは発掘調査をされた立場から、例えば鞠智城の創建直前のあり方、あるいは七世紀後葉ではなくて中葉にさかのぼって造り始めたのではという点について、ただし岡田さんも白村江の後は国防的な機能もあるのだとお認めだと思いますが、調査された立場からはいかがですか。

西住

私も調査をしているときから築城の記事がないということに非常に疑問を持っていたわけです。本日、岡田先生のお話をお聞きして、そういうことであればスムーズに理解ができるというように、個人的にはありがたい見解をいただいていると思います。調査を担当した者としては、鞠智城の価値

がさらにレベルアップされているということで、今後に期待を込めたような先生の講演を聞かせていただきます。

遺物の面から挙げますと、岡田先生のご指摘のように、七世紀後半よりも前の遺物は確かに存在します。古墳時代の集落に伴う遺物もありますが、七世紀の第一四半期、第二四半期の遺物は確かに存在しています。岡田先生の説を、自分もそうに考えたいと思う根拠に遺物の古さが一つあります。以前から言われていたのですが、鞠智城がある肥後国の国庁とか国府が、単人対策にも関連してくるだろうと思います。鞠智城ができたのは、熊本国府がはつきりいつからとは分からないのですが、通常一般的にいうと、早くても八世紀中ぐらい、後半ぐらいですので、それ以前の姿が鞠智城には国府に類する役目があるのではないかとこのことを日頃考えています。そういうことを考えると、岡田先生の単人対策、管理的な建物がある鞠智城Ⅱ期にできたものも非常に理解しやすいのではないかと、個人的にそのように思います。

佐藤… 肥後の国府は、変遷が考えられていますが、遺跡がみつまっているのは熊本市のＪＲ熊本駅の西側辺り二本木地区で、鞠智城からは少し離れていますが、そうした国府ができる以前の機能を想定できないかということ。私の知る範囲では、鞠智城を創建した時期の大きな集落が、鞠智城の南側の台（うてな）台地にあり、鞠智城を造るのに参加した地元の人たちの墓かもしれないという横

穴群が台地にあるということがあります。その時代の鞠智城のあった米原台地はどのようなものだったかという点はいかがですか。

西住… まさしく六世紀後半から七世紀前半にかけて、おっしゃられるとおり、凝灰岩に穴を掘って造るお墓が台（うてな）の近くにあり、県内で最大の数を誇っている瀬戸口横穴が鞠智城に近接したところにあります。それは鞠智城が造られる前の古墳時代の前半の段階で、追葬が八世紀まで入っているわけです。そうなってくると、鞠智城が造られた時代は重ならないかもしれませんが、追葬される、後からお墓にする時代は鞠智城と重なってしまいます。

佐藤… 本日の講演でも、赤司さんから、大野城と基肄城、そして鞠智城の築城が、同じ建築方式でセットで行われたのではないかというお話がありました。赤司さんから見ると、本日の岡田先生の創建のご意見はいかがですか。

赤司… 三つぐらいの問題があったと思います。一つは鞠智城の池の開削の問題です。確か二年前の鞠智城シンポジウムの折に、これは古くて、台地の開発と一緒に鞠智城の前身として、渡来系の人が行ったのではないかということ述べたことがあります。

大野城、基肄城と鞠智城が同時期かどうかということ、白村江以前にこれらは造ったと考えてもいいのだろうかということだと思います。大野城、基肄城、鞠智城の関係は、考古学的にどうかといわれると、倉庫建物の展開のしかたは一緒ですが、スタートラインが一緒かというのは分かりませんが、たゞし考古学的にいうと、土塁の構造は鞠智城も大野城も、お城の周りに城壁をめぐらせるわけですが、その九五パーセントは土塁、土を固めているわけです。その土の固め方や、下に石を置くなどの発想は一緒です。また限られた石積、城壁の石塁など石垣を造る技術などを見ても、それほど違わないという点では、ほぼ同じような技術と思想です。立地のあり方は、標高が全然違うわけですが、そういうところでは多分一緒です。門は型的には一時期新しいのですが、建て替えの可能性もありますので、それは何ともいえないのです。今後古いものが見つかれば変わるかもしれないということです。だいたい同じ時期で、数年違つかどうかはここではわかりません。

築城年代はいつなのかということが、古代史の人たちの解釈をそのまま受け入れられないのです。『日本書紀』には、六六五年に白村江で倭国が負けた、翌年に水城を築いた、次に大野城を築いた、これには百済の達卒憶礼福留が関わった。だから一連の流れとしては、白村江で負けたので造ったのだということをおっしゃいます。私の同僚の古代史の人に「そんなことはないだろう。そんな簡単なものではない」と言うこと必ず「そう書いてあるのですから、解釈はそれしかないでしょう。古代史はそうです」と言うのです。考古学は違います。現場に立つてみると、どうも違う風景が見えるという話をするのですがわかってもらえません。

その一環として、数年前に奈良の文化財研究所の方と共同研究をしました。大野城から、城門の石柱がそのまま出土しました。私は九州国立博物館にいましたので、その柱をCTスキャンにかけて、人間の中身を見るように輪切りにして、断層写真を撮って見て、年輪のあり方を調べてみました。年輪は毎年幅が違いますから、その変動を見ていくと少しずつ、詳細は省きますが、古いもの、出土したものの年輪を見ると、それがいつの時代かびつたり分かるような研究があります。それでやったときに、年輪の木柱はほとんど削られていない。その一番外側の年代が六四八年だったのです。白村江よりももっと前なのです。皮を何枚も剥いているので、六五〇年としていいのではないかとということで、これをどう考えようかと。これを古代史に聞きますと、多分水漬けにしていたのでしょうと。しかし木材は水漬けをしないということが分かったのです。

私自身は、考古学的には大野城も六五〇年に造り始められており、怡土城などは一三年かかっていますので、白村江で負けてすぐに造るなどということはないだろうと。そういう点では、白村江の前から既に造り始めていた。「築」と書いてあるだけですから、それは完成の年代であって、造り始めたのは、もっと前から準備をしていたと考えています。

に造り始めた。その背景は、朝鮮半島における国際的な危機感と想っているのでしょうか。岡田先生、何か発言を。

岡田… 赤司さんに伺いたいのですが、先ほどの講演でも出てきましたが、大野城の主城原の瓦は、文武天皇二年以降ですか。つまり鞠智城の二期以降の瓦だというお話があったので、そうだとすれば、私が言いました一期の前半と後半に分けて、一期の後半が大野城、基肆城とともに鞠智城が山城の一部として造られ始めた時期だというように想定したわけです。そのころに瓦があるだろうと考えたのですが、瓦はそこまで古くならないのですか。

赤司… 私は瓦を礎石の建物に載せたいということと、「繕治」の意味を考えると、機能が変わって、大きな倉を造るようになり始めたことを「繕治」と解釈をしています。ぎりぎり七世紀代の瓦ということで、大型の倉庫に益いてみたらどうだろうかと考えました。

岡田… 私の仮説のある部分では、その辺は非常に微妙なところなので、築城年代が下がるかもしれない。そうすると、六六五年前後に鞠智城が造られたという今までの定説のほうに傾いてしまう可能性がある。ただし土器が古いことは確かなので、古い土器が出ていることからいえば、それ以前に既に米原台地は使われていたということを示すわけです。

これは建物の配置の中ですが、一期の細長い側柱の建物、倉ではない掘立柱の建物が、二つ重なるように出ていますが、これは兵舎ではないかと思えます。事実鞠智城では兵舎として復元されています。この段階での似たような兵舎というのは、八世紀の初頭に東北にもあるのです。多賀城にもあります。それから考えると、一期の段階で兵舎風の細長い建物があるというのは非常に面白いので、つまりその段階に兵隊がいたということですね。

西住… 瓦の件でよろしいですか。瓦の件ですが、先ほど赤司さんとお話して、鞠智城から出土している軒丸瓦は非常に特徴的なつくり方をしています。通常の瓦は丸い瓦をはめ込んでつくる瓦当はめ込み式なのですが、ここで出土している軒丸瓦は既に半蔵した丸瓦を合わせて造っています。大野城からそれと同じものが出ています。それは七世紀の後半、古い段階に持つてきてあるということで、古くできると思えます。

佐藤… そうなると、私も古代史を学ぶ者は、白村江の敗戦という非常な国家的な危機の中でこれまで理解してきたのですが、水城にしても大野城、基肆城にしても、「日本書記」の記事から考えてきたのですが、それを考古学的な成果から幅を持って考えるべきかどうかということをも少し検討しなけ

ればいけないという気がしました。考古学の方は『日本書紀』の記事があるから六六五年とは考えないで、遺物から調査していただけたらいいと思います。

創建についての岡田さんの説は置きまして、もう一つ新しい見解を展開された中では、岡田さんの基調講演の中で、七二〇年に隼人が大隅国司を殺害したという事件で、大伴旅人が鞠智城へ来たのではないかというお話があったのですが、旅人は後に大宰の帥としてまた赴任してきます。そのときも関係したかもしれないというお話がありました。加藤さん、この点はいかがですか。なかなか証明することは難しいことですが。

加藤… そうですね。残された史料からは確かに証明することは難しいと思います。

佐藤…

私の記憶では、旅人は薩摩まで行っていませんでしょうか。行っているような気がしますが。ただし最終的な段階では、暑い中を苦勞して戦ったけれども、旅人が先に都に帰って、その下の副将軍的な人たちが、現地にもう少し残って最後まで制圧しなさいという記事が『続日本紀』にあったと思います。それもふくめて、『続日本紀』の記事を検討する必要があると思います。

それからあと一つ岡田さんのお話の中で気になったのは、大宰府の広嗣の乱の後、大宰府が解体させられるということが一時あったわけですが、それをⅢ期に土器がないことリンクして考えられた

のですが、その点については西住さん、いかがですか。

西住…

岡田先生が言われるように、遺物が非常に少なくなる時期です。前のⅡ期に比べて極端に少なくなるものから、そこでは活動をやっていないのではないかと思います。建物はあったとしても、人がそこにほとんどいないような状況が考えられると思います。

佐藤…

藤原広嗣というのは大宰の少弐でしたが、上官の帥も大弐（大弐）もいなかったもので、大宰府現地でのトップになったわけです。しかも藤原広嗣のお父さんの藤原宇合という人は、かつて大宰の帥でした。つまり以前の大宰府の長官だった人の嫡子が、しかも大宰府現地ではトップの役人としてやってきたというので、フリーハンドが効くようになり、九州の軍団兵士をすべて動員して、二万を超える軍勢で旗揚げをしたわけです。そのときに、岡田さんがおっしゃるように、鞠智城にストックされていた兵器や食糧も全部使ったかどうかは別にして、もしそういうことが行われたとしたら、大野城や基肆城にあった米や兵器も同じことになったはずだと思うので、それとリンクして考える必要があると思います。赤司さん、その点はどうですか。大野城、基肆城に、鞠智城のⅢ期のように土器がなくなっ

て活動をしていないという時期はあるのですか。

赤司.. 分かりませんというか、もともと非常に少ないです。私は今まで、城は守ってはいませんが常駐していません。何かするときの分の土器は出てくるので、そういう意味では大野城でも八世紀の後半や七世紀の末、幾つかの画期はあります。常駐しているということについては、本日は、なるほどそういう考えもあるのだなと思ったところで。

佐藤.. その点では、鞠智城が総合報告書の段階で、これまでに出土した瓦や土器をすべてチェックしていただき、それによって初めて古代山城の中で、人々が生活した営みの痕跡としての土器の量からこういうことがいえるようになってきたわけです。他の古代山城でも、こういうことが分かるという気がします。もともと赤司さんが言われるように、敵が攻めてきたときに緊急に逃げ込む城だということで、普段常駐していなければ土器は少ないということになります。

先を急ぎまして、次に赤司さんの講演のほうに移りたいと思います。赤司さんの講演の中では、大野城・基肄城における総柱の正倉の大規模な高床倉庫建物の規格性について、設計図が同じではないかという指摘で、鞠智城でもそれがいえるというお話だったと受け止めました。そのような点は、例えば他の山城、大野城・基肄城・鞠智城以外でもあるのですか。また、赤司さんは「長倉」といわれたのですが、一部では「法倉」という人もいます。そのような倉庫建物は関東地方にもあります。九州における正倉建物のような国家的な倉庫で、同じ設計図があるのであれば、それ以外の地でも使わないかということが気になるのですが、その点、赤司さん、いかがですか。

赤司.. 他ではありません。逆に言うと、大野城と基肄城と鞠智城は倉があるので、岡山大学の狩野久先生が言っていることですが、だからこそ「日本書記」に書かれたのだという、奈良時代以降も残されたということ。私はなるほどと合点がいつているところで。

佐藤.. それは昨年このシンポジウムでやったのですが、「纏治」の証拠ということでもあります。「纏日本紀」に「纏治」と書いてあるのは、統一性を持って大宰府が施工したのではないかということになります。そのことと併せて、中心的な建物として、方位が斜めの、現在ではこれを兵舎として復元してある建物のことについて赤司さんは、むしろ行政を行う中心的施設ではないかといわれたと思います。その点は西住さん、いかがですか。

西住.. 私も考えていなかったのですが、本日赤司さんの話を聞いて、確かに建物の配列を見ますと、直角方向に主軸がお互いになっていますので、今後そのような点も含めて検討しなければいけないという思いで聞いていたところです。可能性としてはないわけではないと思います。

佐藤… 報告書では、もつと東側の米原集落の近くの道路を挟んだ辺りで、もう少し東北のほうでL字型に行政建物群があるのではないかとという見解でした。それについて赤司さんは、平安時代に持つてこられたと思うのですが。

赤司… そうです。このブロックはおそらく奈良時代の終わりから平安時代であろうと思います。それで、溝がその近くをめぐっているという。これがセットであると、確かに中心的な建物という可能性はあるのですが、配置からするともう少しきちんとしておかなければいけないというのと、南側に倉の領域があるので、そここのところの取り付けがうまくいかないのではないかとということ。それから南北に長いものが並んだのか、建て替えられたのか、非常に密集してあるということからすると、並びからいうと屋（おく）構造の、土間構造の、常に物品を出し入れするような倉が建っていたエリアで考えたほうがいいのではないかと思います。

佐藤… L字型の管理棟的な建物群といわれるものの評価ですが、これまでこちらが管理棟的な性格だと考えていたのですが、本日赤司さんの講演を受けて、これまで兵舎として見てきた長大な側柱の建物、方位がやや斜めになる建物の評価をどう考えるかということとは、これからもう一度検討する必要があると思います。鞠智城内の管理棟的な建物にもいろいろなランクがあつて、二つぐらいあつてもいいのかもしれませんが。併存した場合があつてもいいのかもしれませんが。赤司さんが中心建物といわれた建物がどれくらい存続するか。掘立柱建物ということもリンクしてくると思います。

もう一つ、赤司さんは七世紀末に礎石式の大型の「長倉」という建物を持つてくるということで、これが今までの総合報告書とずれてきます。総合報告書よりも早めを持つてこられたと思います。この宮野礎石と呼ばれる四九号の総柱の長大な倉庫ですが、この評価について、赤司さんの新しいご意見、西住さん、いかがですか。

西住… 実は、ここの調査で出土した遺物の中に、古い遺物も出土しています。だからその可能性はあるわけですが、総合報告書をまとめる中でも議論をしたわけですね。礎石の建物の下にひよっとしたら、掘立が入っている可能性もあるという点で、礎石は同じ時期に持つていこうかということで、総合報告書の中ではしています。ただ遺物は古いものが出ています。先ほどの関連で、兵舎の横の東側の建物も、実は礎石の建物の下に掘立の建物があることが分かっているのですが、プランが分からない状況で保存をしています。そういうことがありますので、可能性としてはあるということを先ほど言ったわけです。

佐藤… これは国の史跡に指定されている大事な遺跡ですから、上に礎石の建物があるときに、それを壊し

て下層を発掘するわけにいかないという条件があります。ただ最近ではレーザー探査など遺跡の調査技術はだいぶ進んできましたので、掘らないでも下層に何かあったかということを見つけることもできるので、いろいろな方法でこれからさらに詰めていただけたらいいと思います。

赤司さんのお話の中では、今の長倉なども、郡役所にある正倉院の場合と同じような倉庫であって、それを理由にして、対外機能よりも地域支配機能ではないかということをおっしゃったと思います。その点をもう少し説明していただけないでしょうか。

赤司

状況として、特に八世紀に入ってくると、大野城の城門が軍事的な意味合いよりは、どちらかという方向に立っている方向になり、規模も大きくなって、鬼瓦を屋根にのせるような荘厳化とか、威厳を保つ方向にいくと。そういう意味ではお役所的な方向に流れているのではないかとということがあります。先ほどから出ていた大宰府出土の木簡、S D 二三四〇とわれわれが呼んでいる天平年間の木簡と一緒に出ました。そこに「基肄城の稲穀を筑前・筑後、肥等の国に貸し与えよ」という、例の木簡の評価を、発掘調査でそれを掘った人間として、私もずっと考えていました。倉のあり方からしても、昔は備前基地というと怒られていたのですが、その方向というのも比重としては少し大きくなっていったのではないかと思います。

なぜそんな山の中に倉が置かれたか。大野城の場合は、確か記録に連名人の話が出てくると思えます。先ほど水害の話がありました。平地よりもリスクマネジメントとしては山のほうが、もしかすると有利だったのではないかと。大宰府の財源のようなことも少し考えたのですが、今のところ大宰府政庁という平地の政庁あるいは周辺の官衙には倉が一棟もないということから考えると、大野城、基肄城、鞠智城も含めて大宰府の財源のようなものだったのではないかと考えている次第です。

佐藤

次の加藤さんのお話に移っていきなさいと思います。平安時代の鞠智城ということです。本日のお話の中では「兵庫の鳴動と対外的な危機感」を結びつけられました、これもかつて鞠智城シンポジウムで濱田耕策さんが、九世紀の鞠智城は対外的な機能を持つのだとおっしゃったことがあります。兵庫の鳴動の際に、単に鼓が自動的に鳴ったとか、扉が振動したということではないと。本日の加藤さんの講演でも明らかになったと思います。九世紀の古代国家は、兵庫が鳴動したらどうするかという点を、もう一度説明していただけないでしょうか。

加藤

諸国でそういう事例があれば、国から中央に報告をするわけです。それを受けて中央では陰陽寮などで占わせたり、その結果、兵革、兵乱があるということが出れば、太政官符を逆にその地方に出して、警護をきちんとせよという形で命令を出すというルートになっていると思います。ですから

「鳴る」ということ自体を報告することは、対外的なことを意識しているところが重要なということがあります。

本日は全体として、先ほどの土器の消滅、そこから性格が変わるという、倉庫ということで最近是非常にそちらを強調されることが多いので、あえて挑戦的というか逆の意味での兵乱というか、対外的なところから見直してはどうかということでも報告をしたいという趣旨もありました。

佐藤.. 九世紀の『六国史』では、菊池城院には「つわものぐら」の、兵庫、武器庫があったということが文献的に確実なわけです。先ほどからの話の、稲穀すなわち稲や米穀をストックしておく倉庫以外に、兵庫が九世紀にはありました。加藤さん、鼓が鳴るといふときの、鼓は何に使ったか、武器としてどういう性格のものかをお願いします。

加藤.. 鼓自体は他のもの、例えば「ほら」「大角」「小角」と同じで、集団戦法をとるときの一つの指揮のためのもので、当時は軍団兵士という大量の兵士による集団戦法で戦闘しますから、それを指揮するための道具ということになると思います。それが鳴っているということは、兵庫に置かれているということなので、多分兵士は常駐はしていないと思うのですが、何かあったときにそのものを使って対応するということで、兵庫に置かれていることはあるかもしれないということです。

佐藤.. 鼓は軍事的な命令を伝える指令を出すための、ほら貝などもそうですが、武器なのです。これは民間で持っているにはいけない性格のものです。それが鳴るといふのは、やはり兵革、戦争が起こる予兆であると考えるのが普通で、その延長上で考える必要があると思います。その鼓は、戦場ではそれを鳴らして軍事的な指揮をするわけですが、鼓樓で毎日鳴らしたかどうかは考えなければいけないと思います。

「兵庫」と、赤司さんが言っていた三×五間、三×四間の倉庫との関係は構造的にどうでしょうか。「兵庫」の場合は側柱でもいいかどうかとか、そういうことを伺いたいです。

加藤.. 逆に、私はそれについて考古学の方に伺いたかったところなのです。つまり「倉」と「庫」というのは先ほど令の用語の説明をしましたが、今ある建物の中で、「倉」という米を取る施設の場合にはよく分かるわけです。例えば礎石高床の建物とか。これとは異なって「庫」という場合にどのように考えるか。今発掘で出ている七二の建物跡の中でどのように考えたいのかということですね。

赤司.. おっしゃるように、高床の四角い倉と、高床ではない平地の床が土間のようなものがあります。八角形のような構造の高床らしきものがあるということが分かっているわけです。礎石式の四角いも

のは、稲穀を入れる、もみの状態で、もみは種ですから長期間保存できるのです。白米ではありませんから、わざわざ脱穀して、通常は脱穀せずに穂苜をするだけでヒモで結んで貨幣の代わりにもなるわけです。それをわざわざ脱穀してもみ状態にして倉の中に納めていくということをやっているのです。それ以外の平地の倉の場合には八角形の少し高床があります。武器の中には漆を使っているものが多いし、鼓もそうかもしれませんし、湿気を嫌いますので、少し床を上げたほうがいいだろうと普通は思います。簡単にはいれないようにしたほうがいいというので高床です。鞠智城の場合、武器武具を取納する高床で考えられるのは、八角形しかない。それは今後の課題でしょうが、そういうことも九世紀に考えられるのではないかと思います。

佐藤…

八角形の建物が「兵庫」である可能性もあるということでしょうか。西住さん、いかがですか。

西住…

鞠智城を発掘している者としては非常に厳しいですが、建物が火災に遭っている倉庫の場合に限って申しますと、Ⅳ期、Ⅴ期で来ている総柱の建物からは、火災に遭った跡から炭化したお米が出ていますので、それは確かにお米を入れていたということがはっきりいえると思います。ただ火災に遭っていない総柱の建物に何が入っていたかという点、考古学的なものからアプローチするということは非常に厳しい状況です。プラント・オパールという植物遺体を分析する方法もあるのでし

うが、なかなかそこまではいけないということです。

それからもう一つ、本日のお話で、律令の中に倉庫には水を回すのだという話が出ていたと思います。発掘する面がきちんと残っている、残っていないというのものもあるかもしれませんが、礎石の整地面で溝が確認できる礎石の建物とそうでない建物があります。それは中身が違う可能性があるのではないかと思います。

佐藤…

炭化米が出ないところに「兵庫」がある可能性があります。先ほど言った武器は、おそらく魔絶の段階では貴重なものだから外に運ぶと思うのです。そのまま残って腐っていくことはないと思いますので、なかなか難しいです。軍団は全国に置かれましたので、そこにはそれなりの武器庫があるはずですが、今まで発掘で明らかになった場所は一つもありません。

加藤さんのお話の中では、有明海経由の新羅と日本の官人、あるいは民衆との間の交流が結構あって、その経済的な利益をめぐる争いからトラブルが起きることもあったということでした。一方で新羅の史料には海賊として出てくる場合もあったわけです。海賊と日常的交流が一体になっているというのが九世紀のあり方だということ、それを統一的に理解しなければいけないと思います。ただ単に対外的な緊張だけではなくて、一方で日常的な交流を非常に密接にやっているといるのが面白いと思います。それを証明するための考古学的な遺物が何かあるのでしょうか。鞠智城に限らない、

熊本県内のことでもいいのですが。

西住…

なかなかその辺は難しいです。遺物が出るころはあるのですが、それが確かにそれと絡み合うのかどうかというのは証明が難しい問題だと思います。

佐藤…

先ほど申し上げた国府に推定される熊本市の熊本駅西側の二本木遺跡群からは、九世紀代の中国製のかなりレベルの高い陶磁器などが出土していたと思うのですが、九世紀に鞠智城もあったわけですので、そういう交流が物で証明できればいいなと思います。一番有名なのは、七世紀代にさかのぼる百濟製ではないかといわれる、銅造菩薩立像です。あとは瓦が朝鮮半島系だといわれていると思います。だいふん時間が迫ってきました。時間がなくて四名の方の話をあまり深めることができなかったのですが、本日話をそれぞれ聞かれて、今後の鞠智城研究の方向性とか課題とか、このようなことも問題になるのではないかとということ、手短にお一人ずつお話しただけとありがたいですが。

西住さんのほうから順番にお願いします。

西住…

今後、鞠智城の価値をさらに高めるためにお仕事を頑張っていこうと思いますので、本日、先生方

からいただいた貴重なご意見を基に、さらに今後未解明の部分でできるように頑張っていきたいと思います。若い研究者が控えていますので、それを彼らに引き継ぐことも大事だと思っております。

赤司…

実は今年が水城、大野城、基肄城の築城一、三五〇年の記念の年ということ。その一環としてこれを位置づけていただいているわけです。研究という話がありましたが、一、三五〇年記念事業というのは、一、三五〇年を記念することではなくて、一、四〇〇年に向けた取り組みの始まりであるという位置づけをしています。そういう意味では、十数年前にはあまり関心がなく、古代山城について皆さんはおいいでなりませんでしたが、これほど大盛況になったのはいろいろな方々のお力だと思えます。ぜひ一、四〇〇年に向けて、また新たに関心を持っていただけたらと思います。ありがとうございます。

加藤…

本日は考古学の最新の成果をいろいろ伺って、文献のほうも考古学との連携というか、私たちがそちらの情報を取り入れなければいけないのではないかと、このことを痛感した次第です。例えば先ほどの大野城の柱が、年輪年代学の成果によって六五〇年ということになると、『日本書記』で書かれている、ある意味では『日本書記』の編者が描いた歴史像ということですが、それとは異なってく

る可能性があるということになる、それをどのようにもう一回文献のほうで受け止めて考え直すかということが必要になってくるだろうと思います。文献史学と考古学の連携を、今後ますます深めていく必要があるのではないかと、ということです。

佐藤

大野城の太宰府口城門の東北のコーナーのコウヤマキの柱根のことで、創建したときの掘立柱の城門の柱根が残っています。それを年輪年代学をかけて調査しています。法隆寺などでは文献から知られる建築年代よりかなり古く伐採されたという判定が出ています。一〇〇年ぐらい前の伐採というズれる場合もあるし、びつたりの場合も他の遺跡ではあるということです。いずれにしても今後検討しなければいけないと思います。

最後に、岡田さんお願いします。

岡田

本日 シンポジウムでは、創建の問題だけが議論されましたが、先ほども取り上げられていたことが、実は八世紀の半ばごろに全く土器の出ない時期が約五〇年あります。これが何かということ、先ほどお話をしたわけです。これは藤原広嗣の乱に関連しているだろうと。同時に広嗣の乱によって倉の中ががらんとしたというだけではなくて、そのときに鞠智城が本来持っていた、南を向いた本拠地だという性格が失われたのだと考えているのです。その辺をもう少し強調したほうがよかったです。

などという気がします。

それから以降、次に文献史料に出てくるのは菊池城であって、難しい字の鞠智城ではなくなるわけです。その段階にどうして文字が変わったのかという問題です。これは私の考古学がやることではなくて、文献史料のほうで分析していただきたいです。私の個人的な考えとしては、その段階で八世紀の末ごろに、鞠智城は肥後国の所属に変わったのではないかと思っています。それまでは大宰府の直轄でした。大宰府の直轄のときは難しい字を使い、肥後国の管轄になった段階で菊池郡の菊池に変わったのではないかと密かに考えています。

また、延暦一〇年、七九一年に太政官符が出ています。太政官符では倉というのは火が出ると類焼すると。だから今後新しく建てる倉については、一〇丈、三〇メートル離せというものがあります。ただしそれまでできてくるものについては、改築するときに広げよという太政官の命令が出ています。鞠智城の倉についても類焼しているのは、明らかに太政官符の出ました延暦一〇年の後です。それまではまだ倉の中に、不動倉で穀物が入っていたから、そのままの状態で類焼したとすると、第V期の倉はいずれも三〇メートル以上離れていなければおかしいのです。その辺で長者山の上にある倉については、本当にこれがいのかと若干疑問があります。

同時にもう一つは、現在の米原の集落の中に大きな礎石がありますが、発掘できないわけです。ただし米原の集落の中に、礎石に伴って焼け米が出たという話を聞かないので、これはV期の倉ではな

いかと。つまりV期になると三〇メートルずつ離していけば当然全面に倉を展開させなければ済まないはず。その一部が米原の集落の下にある礎石になるのではないかと、そういうことを密かに考えています。これはいずれ鞠智城の調査をされる方々で実証していただければありがたいと思います。

佐藤..

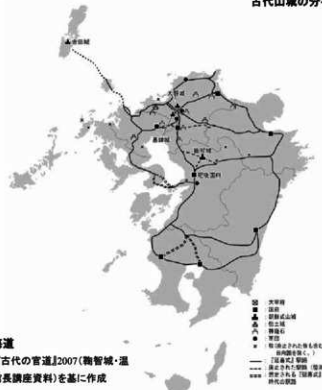
ありがとうございます。鞠智城が、難しい「鞠智」から今の菊池市の「菊池」にどのように変わったかということも含めて、まだ検討すべき課題があると思いました。

これまでのお話で、本日のパネルディスカッションを終えたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

＜参考資料＞



古代山城の分布



古代の西海道

※日野尚志『古代の官道』2007(鞠智城・瀬
故創生館 館長講座資料)を基に作成

鞠智城関連年表

西暦(年号)	内容
645(大化元年)	大化の改新。
646(大化2年)	改新の詔の発布。
660(斉明6年)	唐・新羅により百濟滅亡。
661(斉明7年)	朝倉橋広庭宮に遷宮
663(天智2年)	白村江の戦い ※大和朝廷軍が唐の水軍に敗れる。
664(天智3年)	対馬・老岐、筑紫等に防人と烽を置く。筑紫に水城を築く。
665(天智4年)	筑紫に大野城、基肄城を築き、長門国に城を築く。
667(天智6年)	近江大津宮に遷宮
	大和に高安城、讃岐に屋嶋城、対馬に金田城を築く。
669(天智7年)	高安城を修理。
670(天智9年)	高安城を修理
672(天武元年)	壬申の乱
676(天武5年)	新羅が朝鮮半島を統一。
678(天武7年)	筑紫国大地廣
696(持統10年)	※「肥後国」の文献上の初見。
698(文武2年)	大宰府をして、大野、基肄、鞠智の三城を統治する。 高安城を修理。
699(文武3年)	高安城を修理。 大宰府をして、稲積、三野の二城を修理する。
701(大宝元年)	大宝律令制定。
710(和銅3年)	平城京に遷都
719(養老3年)	備後国安那郡の茨城、葦田郡の常城を停める。
756(天平勝宝8年)	怡土城を築城。
794(延暦13年)	平安京に遷都
799(延暦18年)	大宰府管内を除いて、烽を廃止。
858(天安2年)	(閏2月) 菊池城院の兵庫の鼓が自ら鳴る。 (5月) 肥後国菊池城院の兵庫の鼓が自ら鳴る。 (5月) 菊池城の不動倉11棟が火災に遭う。
875(貞観17年)	カラスの群れが菊池郡倉倉の葦草を噛み抜く。
879(元慶3年)	肥後国菊池城院の兵庫の戸が自ら鳴る。

略年表 新羅と関連する日本国内の対応

- 弘仁 2年 (811) ・新羅海賊船3艘、対馬西海に現われ、そのうちの1艘が下県郡佐須浦に到る。さらに20余艘。海賊を殺害あるいは捕らえる。
- 弘仁 3年 (812) ・対馬周辺に出没した新羅海賊は大事に至る恐れなく、出雲・石見・長門等の国の警護を解かせる。
・新羅人を放逐。
- 弘仁 4年 (813) ・小近島の島民が5艘の船で到来した新羅人110人と戦い、9人を殺害、101人を捕らえる。
- 弘仁 5年 (814) ・新羅人31人、長門国豊浦郡に漂着。新羅人26人が筑前博多津に漂着。
- 弘仁 11年 (820) ・遠江・駿河両国の新羅700人が反乱、人民を殺害し屋舎を焼く。
- 承和元年 (834) ・大宰府管内に漂着した新羅人を射傷させた者は罪科に処し、被害者は治療を施し、食料を支給して放逐する。
- 承和 2年 (835) ・新羅人の往来が絶えず、老岐島の防衛が不十分なため、島民330人を要害の地に配置することを要請する大宰府の申請を認める。
- 承和 5年 (838) ・新羅人の往来が絶えず、警護につとめるため、生員1員を減じて弩師を置くことを要請する老岐島の申請を認める。
- 承和 8年 (841) ・「人臣に境外の交わりなし」として、新羅人張宝高の朝貢を認めず、献上品は返却し、積載貨物は民間の交易に任せる。
- 承和 10年 (843) ・大宰府が、対馬島上県郡竹敷埼の防人が新羅の方角より鼓が聞こえたことを伝えてきたことを報ずる。
・文室宮田麻呂を謀反の嫌疑で逮捕。伊豆国に配流。
- 貞観 5年 (863) ・大宰府が、新羅僧3人が博多津に到着したことを報ずる。
- 貞観 6年 (864) ・石見国に詔して、昨年美乃郡に漂着した新羅人を、食料を支給して放逐させる。
- 貞観 8年 (866) ・京都に怪異があり、陰陽寮の言上により、大宰府に下知して警戒させる。
・肥前国基肄郡擬大領山奉永・藤津郡領英津貞津・高来郡擬大領大刀主らが、新羅人攻責長らとともに新羅に渡り「造兵等器械之術」を学んで対馬島を「撃取」しようとした事件が起こる。
- 貞観 9年 (867) ・新羅と境を接する伯耆・出雲・石見・隠岐・長門の諸国に四天王像各一鋪を頒ち、高所の見晴らしのよいところに安置して、国分寺僧に最勝王経を転読させる。
- 貞観 11年 (869) ・新羅海賊船2艘が博多津に來り、豊前国の年貢絹織を掠奪して逃亡。

貞観 12年 (870)

- ・去る貞観8年に越智貞厚に新羅人と共謀して反逆の企てありとして密告した安藝福雄を誣告の罪で遠流に処す。
・諸国に散在する夷俘を要所に配置して危急に備えさせる。
・新羅海賊來襲の事により、伊勢大神宮に奉幣して平安祈禱を行なう。
- 貞観 12年 (870) ・鶴島を捕らえるため新羅国境に赴き、新羅に囚えられた対馬島下県郡のト部乙屎麻呂が逃げ帰り、新羅が大船を建造し兵士を訓練して対馬島奪取を企てている様子を目撃したことを語ったことを、大宰府が報ずる。これをうけて、沿海諸郡に警護を命じ、因幡・伯耆・出雲・石見・隠岐等の諸国に下知して「守禦の具」の修繕を命じる。
- 貞観 15年 (873) ・これより先に、大宰府が肥前国杵築郡の兵庫の震動を報告したことにより、筑前国・肥前国・老岐島・対馬島に警戒を命ずる。
・筑後権史生佐伯信真繼が新羅国境を進め、大宰少式藤原朝臣元利万侶が新羅国王と共謀して国家を害せんとする由を告げる。
- 貞観 15年 (873) ・武蔵国が、貞観12年に大宰府より移された新羅人が逃亡したことを報告する。
- 元慶 2年 (878) ・大宰少武島田忠臣が新羅の虜船が我が国に向かっているとの香椎宮の託宣を伝えたことにより、伊勢神宮に冥助を祈願し、大宰府に使者を派遣して「戎事」を警戒するよう命じ、香椎宮に奉幣する。
- 寛平 5年 (893) ・長門国に漂着した新羅僧に食料を支給して帰国させる。
・新羅海賊、肥前国松浦郡に來襲。肥後国飽田郡を襲い、人家を焼き、肥前国松浦郡方面に逃走したことを、大宰府飛脚使が報告する。
- 寛平 6年 (894) ・対馬守文室善友、郡司を率いて新羅の賊と戦い、300余人を射殺する。
- 寛平 7年 (895) ・博多警固所に夷俘50人を増置して新羅の賊に備えさせる。

おわりに

◆9世紀末にピークに達する対外関係にかかわる中央政府によって醸成された「危機」感
(寛平5年(893)・6年(894)の新羅海賊来襲事件)

寛平5年(893)5月11日

・「新羅賊」が来襲して肥前国松浦郡に来襲、大宰府から飛駅で奏上

寛平5年(893)5月22日

・11日目のこの日、帥・大次に賊追討を命じる勅符

寛平5年(893)閏5月3日

・「新羅賊」が肥後国飽田郡を襲い、人家を焼いたのち、肥前国松浦郡方面に逃亡したことを飛駅で奏上、ただちに追討を命じる勅符

寛平6年(894)2月22日

・「新羅賊」来襲の第一報を大宰府から飛駅で言上

・同日、追討を命じる勅符

・その後、3/13、4/14、4/16、5/7、5/9、9/30、10/6にも大宰府から飛駅言上

・これに対し、3/13、4/14、4/16・4/17・4/18、5/8、9/19、9/30、10/6には中央政府から対応

⇒中央政府による情報収集の細密化とすばやい対応

貞観11年の新羅海賊事件との対比

※寛平5年の事件は、肥前・肥後が舞台となっていること

◆10世紀以降の東アジア諸国の動向と環境の変化

875年(貞観17) 唐で黄巢の乱勃発	900年(昌泰3) 後百济建国
907年(延喜7) 唐滅亡	918年(延喜18) 高麗建国
五代十国の亂乱期	935年(承平5) 新羅滅亡
960年(天徳4) 宋建国	936年(承平6) 高麗朝鮮半島統一
979年(天元2) 宋中国を統一	

⇒積極的孤立主義外交政策【石上英一1982】

そのなかでの鞠智城の防衛拠点としての役割の漸減

【参考文献】

五十嵐高壽 2015『西海道の記事態度からみた鞠智城の機能』『鞠智城と古代社会』(平成26年度鞠智城跡「特別研究」論文集3) 熊本県教育委員会

石井 正敏 2011『東アジアの交動と日本外交』荒野壽典・石井正敏・村井章介編『日本の対外関係 2 律令国家と東アジア』吉川弘文館

石井 正敏 2013『東アジア史からみた鞠智城』『ここまでわかった鞠智城』(鞠智城シンポジウム 2012 成果報告書) 熊本県教育委員会

石上 英一 1982『日本古代—〇世紀の外史』『東アジア世界における日本古代史論集 1』学生社

木本 徳康 2011『大野城・基肆城と奉路について』鈴木増良・荒井秀典編『古代東アジアの道路と交通』巻誠出版

清川 良季 2015『八・九世紀における古代山城の展開と官衙・寺院』『鞠智城と古代社会』(平成26年度鞠智城跡「特別研究」論文集3) 熊本県教育委員会

小西龍三郎 2014『鞠智城の建物について』『鞠智城跡Ⅱ—論考編2—』熊本県教育委員会

近藤 浩一 2014『東アジア海路と倭寇：9世紀末の新羅海賊との比較史的考察を通して』『京都産業大学論集』(人文科学系別) 47

坂上 康徳 2006『古代史の舞台 西海道』『列島の古代史 ひと・もの・こと 1』岩波書店

佐藤 信 2014『鞠智城の歴史的位置』『鞠智城跡Ⅰ—論考編1—』熊本県教育委員会

田中 俊明 2011『日本・朝鮮の軍事連絡』荒野壽典・石井正敏・村井章介編『日本の対外関係 2 律令国家と東アジア』吉川弘文館

横島 謙 2004『律令制下の通信スピードとその変遷』『ヒストリア』190

崎崎 俊彦 2011『古代官道奉路と鞠智城』鈴木増良・荒井秀典編『古代東アジアの道路と交通』巻誠出版

戸田 芳実 1991『平安初期の五島列島と東アジア』『初期中世社会史の研究』東京大学出版会

横田 静彦 2010『朝鮮古代史からみた鞠智城—白村江の戦役から軍人・海島と新羅海賊の対策へ—』熊本県教育委員会編『古代山城鞠智城を考える—2009年東京シンポジウムの記録—』山川出版社

村井 章介 1995『王土王民思想と九世紀の転機』『思想』847

村上 史郎 1999『九世紀における日本律令国家の対外意識と対外交通』『史学』69

矢野 裕介 2015『鞠智城の調査と成果—鞠智城「跡地」について—』『律令国家の成立と鞠智城—698年「跡地」の実像を探る—』(鞠智城東京シンポジウム 2014 成果報告書) 熊本県教育委員会

山崎 雅彦 2001『貞観十一年新羅海賊来襲事件の真相』『國學院大学大学院紀要—文学研究科—』32

山内 晋次 2003『九世紀東アジアにおける民衆の異動と交流—道城・反乱をおもな素材として—』『奈良平安期の日本とアジア』吉川弘文館

【史料 23】『日本三代実録』貞観 12 年 (870) 11 月 17 日条

「大宰府に動して、少貳藤原朝臣元利万侶、前主工上家人、浪人清原宗繼、中臣年輩、興世有年等五人を追捕し、従五位下行大内記安倍朝臣興行を以て、遣大宰府推問密告使と為す。判官一人、主典一人。」

・共謀者として上家人・清原宗繼・中臣年輩・興世有年らの身柄を拘束、大宰府に推問密告使を派遣

・その後の処分については史料みえないので、詳細は不明

※密告者は筑後国の官人であり、11 頁の【史料 20】の琢磨長と同様に有明海ルートを利用して通交していた者同様のトラブルの可能性

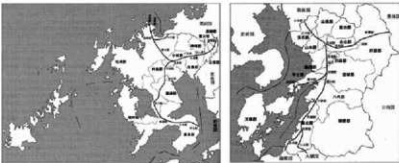
⇒「国境」と超えた「反乱」の芽と中央政府は認識

②発生場所としての肥前・肥後

[1] 新羅との内通事件

⇒五島列島を媒介とした有明海および外洋の天草灘・五島灘を利用した新羅本土との貿易船のルートも考慮

【図 3】肥前国・肥後国全体図『日本古代道路事典』2004 による



[2] 海遣唐使船の漂着事件 [石井正敏 2013]

(漂着事件の経過)

貞観 15 年 (873) 3 月 11 日

- ・船 2 艘、60 人を載せ、薩摩国飯嶋郡に漂着
- ・海人かと偽った新羅人ではないかと疑う
- ・2 艘を傾倒して、府に向う間、1 艘は風を得て逃れたと大宰府より馳駈言上

貞観 15 年 (873) 5 月 27 日

一勅による命令

- ・府・国官司をして、審らかに推勘を加へるように
- ・海人ならば、慰勞を加へ糧を宥て樂らばすように

・もし新羅の囚党ならば、その身を禁じて言上し、兼ねて管内諸国をして、重ねて警守を嚴重にするように

この間、大宰府より報告

- ・逃れ去った 1 艘が肥後国天草郡に漂着
- ・調査したところ海人と判明

貞観 15 年 (873) 7 月 8 日

一勅による命令

- ・所在のところで衣糧を支給するように
- ・船 2 艘がもし破損しているならば、繕修を加へるように
- ・1 艘が逃じたことについて、謹責する

◆海遣唐使の天草漂着は、有明海防衛の拠点としての鞠智城の存在意義をあらためて認識させる重要な意味をもつ [石井正敏 2013, 141 頁]

◆五島列島における郡の新置

【史料 24】『日本三代実録』貞観 18 年 (876) 3 月 9 日条

「參議大宰権帥從三位在原朝臣行平起請二事。(中略)其二事、肥前国松浦郡庇羅、飯高郡を合せて更に二郡を建て、上近・下近と号け、飯高島を置かむことを請ひて曰く、(中略)今件の二郡は、地勢曠遠にして、戸口殷阜なり。又土產として出ず所、物に奇異多し。而るに後に郡司に委ね、恣に聚斂せしむ。(中略)加之、地は海中に居りて境は異俗に隣り、大唐新羅の人來る者、本朝入唐使等、此の島を經歷せざるなし。府頭の人民申して云く、去る貞観十一年、新羅の人、買船の組船等を掠奪せし日、其の賊囚じく件の島を経て來る。此を以て観るに、此の地は是当国郡轄の地なり。宜しく令長を択びて、以て防禦を慎しむべし。(中略)望み請ふらくは、件の二郡を合せ、更に二郡を建て、上近・下近と号けて、便ち飯高島と為し、新たに島司郡置を置きて、土口貢に任せむ。但し其の俸料は正稅公廩の間を準定し、肥前国の權官を兼任せしめむ。(下略)」

- ・五島列島の行政的地位を格上げするよう中央政府に上申
- ・肥前国松浦郡所屬の庇羅・飯高二郡であった五島を肥前国から分離して大宰府管内の九国二島とならぶ行政区画(老成・対馬なみの「飯高島」)とすることを提議
- ・大陸に最も近い島々であるから唐人・新羅人がこの島を経ないことはない
- ・貞観 11 年 (869) に博多津で豊前国官物組船の貢納船を襲った新羅船 2 艘もこの島を経由してきたといわれているとする

⇒新羅船の襲来を警戒する大宰府としては、五島列島における防衛態勢を強化する必要に迫られているとの認識

※緊要関係の発生場所の「移動」

⇒IV期以降の鞠智城の性格変化の検討

- ・防衛ラインの「重心の移動」の認識の発生を考慮すべき

面とが常に表裏一体となって存在しているものであり、後者の民衆間の対立的側面も見落としてはならない。〔山内晋次 2003、123 頁〕

③中央政府の意識

◆「過敏な反応」〔村井章介 1995〕の背景

(天長 3 年 (826) からの軍備の再編)

・天長 3 年 (826) 11 月 3 日太政官符 『類聚三代格』

大宰府管内諸国の兵士を廢し、選士を置く／大宰府に統領 8 人、選士 400 人、4 番編成、各番は統領 2 人、選士 100 人／ 九国二島には選士 1320 人。

・貞観 11 年 (869) 12 月 28 日太政官符 『類聚三代格』

大宰府の統領 2 人、戦士 100 人を増員／大宰府の統領 1 人、選士 100 人を鴻臚館に遷し置く

・貞観 12 年 (870) 正月 15 日太政官符 『類聚三代格』

甲冑・手纏・足纏おのおの 110 具を鴻臚館に遷し置く

⇒大宰府防備への傾斜 ただし、海賊のルートを補足し得ていない。

7 頁の【史料 15】『日本三代実録』貞観 11 年 (869) 7 月 2 日条

・単なる官物の亡失ではなく、国威の損辱であり、往古に前例のない将来に残すべき面目がないとの意識

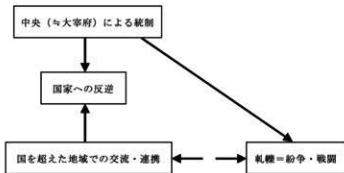
・「大宰府官人の怠り」を明確にしている

・事件の際に海賊と応戦した海浜の百姓の功を大宰府が上申していなかったことの譴責

★新羅人の処遇に関して持法をとどめて放却することから、「中央の支配層が事件に危機感をいだいているような様子はない」〔山崎雅稔 2001、383 頁〕とすることは疑問

◆2つのベクトルの存在があることに留意

⇒中央政府と大宰府・地方官司との間での対外的「危機」に対する認識の乖離〔村上史郎 1998、43 頁〕



(2) 中央政府の「危機」意識と対外政策

①引き金となった事件

◆海賊への警戒が高まるなかで、起こった三件の新羅人と地方官人との私的な交渉

【史料 20】『日本三代実録』貞観 8 年 (866) 7 月 15 日条

「大宰府馳駈して奏言す。肥前国基津(基津)郡の川辺豊徳告さく、同郡の擬大領山奉水、豊徳に語りて云く、新羅の人賈實長と共に新羅国に渡り入り、兵弩器械を造る術を教ひ、還り来りて符に対馬島を撃ち取らん。藤津郡の領葛津貞津、高来郡の擬大領大刀主、彼件郡の人永岡藤津等、是同じく謀る者なり。仍りて射手四十五人の名簿を副へて進る。」

・肥前国基津郡の川辺豊徳が、擬大領山奉水が新羅人賈實長とともに新羅に渡り「造兵弩器械之術」をならべて対馬島の「撃奪」を計画していることを告発
・藤津郡領葛津貞津・高来郡擬大領大刀主・彼件郡人永岡藤津ら共謀者の名を挙げ、証拠として射手 45 人の名簿を添えて言上。

※五島列島から有明海をめぐる新羅の貿易船のルートがあったことを示す。

・基津郡・藤津郡・高来郡・彼件郡のうち藤津・高来・彼件の三郡は、有明海および外洋の天草灘・五島灘に面した諸郡であり、五島列島を媒介とした新羅本土との交流ルートも考慮しなければならない〔山内晋次 2003〕

【史料 21】『日本三代実録』貞観 11 年 (869) 10 月 26 日条

「太政官論奏して曰く、刑部省斯那文に云く、貞観八年、隨岐国浪人安曇福雄密に告げらく、前守正六位上越智宿祢貞厚、新羅人と共に反逆を謀ると。使を遣りて推へしに、福雄告げし事は誣なり。是に至りて法官覆奏す。福雄反りて坐して斬すべし。但し貞厚は部内に人を殺せる者有るを知りて舉訊せず。仍りて官当すべし、てへり。詔して、新羅に宜しく一等を減じて遣流に処すべし。自余は論ずること法の如くせよ。」

・隨岐国の浪人安曇福雄により、前守越智貞厚が新羅人とともに反逆をはかっていると密告

・貞厚は遣唐使史生として渡唐した経歴

・円珍入唐に際しての大宰府公職に「大典越貞厚」と加署

※貞厚は帰国後も大宰府官人として新羅人と交易に関与していた可能性が高い。隨岐国での交易にも関与していたか。

→福雄との交易をめぐるトラブルの可能性の指摘〔山崎雅稔 2001〕

【史料 22】『日本三代実録』貞観 12 年 (870) 11 月 13 日条

「筑後権史生正七位上佐伯宿祢真繼、新羅国謀を奉進む。即ち大宰少貳從五位下藤原朝臣元利万侶、新羅の国王と謀を通し、国家を害はむとすと告ぐ。真繼の身を禁じて、横井遣使に付す。」

・筑後権史生佐伯宿祢真繼が新羅国謀を証拠として進め、大宰少貳藤原朝臣元利万侶が新羅国王と通謀していることを告発

暇ひ、二人を射て傷けき。事若し実有らば、寧ぞ忠敬にあらざらむ。而るに府司申さず。何ぞ近く善を掩へる。又禁ぜらる人、嫌疑有りりと雖ども、是に縁りて異邦最も仁恕を思はむ。宜しく拷法を停め、深く廉問を加へて早く放却に従ふべし。」

→5月22日の事件発生から22日間もかかって報告したことに着目する指摘（村上市史1999）

・飛駁を用いて急ぎ奏上した形跡なし

→本案の手続き

【史料16】公式令50 国有瑞条

「凡そ国に大端及び軍機、災異、疫疾、境の外の消息有らば、各使を遣りて、馳駁して申上せよ。」

【表2】情報のスピード（西海道事例 大宰府→中央）〔綱島謙 2004 による〕

年	内容	日数	出典
720	華人反乱大隅国守護	4日	『続日本紀』養老4年2月29日条/3月4日条
740	藤原広嗣の乱	4日	『同』天平12年8月29日条/9月3日条
778	遣唐使判官帰着	3日	『同』宝龜9年10月28日条
812	新羅船対馬来着	6日	『日本後紀』弘仁3年正月5日条
836	遣唐使船漂着	6日	『続日本後紀』承和3年7月16日条/17日条
836	遣唐使船漂着	11日	『同』承和3年8月1日条/2日条
839	遣唐使帰着	5日	『同』承和6年8月24日条/25日条
840	遣唐使船漂着	6~7日	『同』承和7年4月8日条/15日条
893	新羅賊	11日	『日本紀略』寛平6年5月22日条
997	南蛮賊	14日	『日本紀略』『小右記』『権記』長徳3年10月1日条 （『小右記』に「大勝憲」とされる）
1019	刀伊の入寇	9・10日	『日本紀略』寛仁3年4月17日条/18日条 『小右記』4月17日条/18日条/20日条

→しかも第一報から17日たってから、朝廷は大宰府司を譴責

・船団を組んで輸送すべきところ、豊前国の船を先発させたこと
・事件そのものの規模とは別に、単なる官物の亡失ではなく、国威の損辱であり、往古に前例のない将来に残すべき面目がないとの中央の認識

→大宰府側が賊の追跡に失敗しながらも、飛駁を報告するほどには重要視していないこと
中央政府はこの事件から非常に大きな衝撃を受けたことを示す

※（村井章介1995）も「過敏な反応」とする

②「在地」（現地）の民衆の意識

【史料17】『日本三代実録』貞観12年（870）2月12日条

「是より先、大宰府言す。対馬島下郡の人ト部乙原麻呂、鶴島を捕へむとして、新羅の境に向ふ。乙原麻呂、新羅国の執ふる所とあり、縛しめられ土獄に囚禁せらる。乙原麻呂、彼国を見るに、材木を挽き運びて、大船を構作り、鼓を撃ち角を吹き、士を簡ひて兵を習はしむ。乙原麻呂、竊かに防護の人に問ふ。答へて曰く、対馬島を伐ち取らむ為なり。乙原麻呂、禁を脱れて獄を出で、纒に逃れ移るを得たり。是の日、勅して、（中略）如聞、新羅の商船、時々彼に到り、縦に事を買置に託し、来りて侵襲を為す。若し其の備なくば、恐らくは機羅に同じからむ。況むや新羅の凶賊、心に腹を憤きて悪尾を取めず。將に毒蟹を行はむとするをや。須らく練海の諸郡をして、特に警固を慎ましめよ。又因幡、伯耆、出雲、石見、隠岐等の国に下知して、守禦之具を修めしめよ。」

・新羅で囚われの身となったト部乙原麻呂が現地で対馬島奪取の準備が進行している様子を目撃したことを大宰府から報告

・沿海諸郡を警備させるとともに、因幡・伯耆・出雲・石見・隠岐等の諸国に「守禦の具」の修繕を命ずる勅

→中央政府の「危機」意識とは異なる日常的な往来や双方の意思の疎通

・ト部乙原麻呂のような対馬島の鶴の捕獲人は、日常的に新羅の海岸あるいは海岸近くの海島に出かけ、そこに上陸していたものと推測される。新羅の領域深くにまで入り込んでいたからこそ、乙原麻呂は新羅に捕らえられたのであろう」との指摘（山内晋次2003）

※新羅人と日常的なコミュニケーションが成立していること＝「防護の人」との会話

・住民と新羅人の中で、場合によっては海賊行為への関与までも含めた比較的頻繁な交流が行なわれていたこと背景（戸田芳美1991）

★もちろん現実には「軋轢」「紛争・戦闘」も発生

【史料18】『日本紀略』弘仁4年（813）三月辛未条

「大宰府言す。肥前国司今月四日の解に備く、基肆（基肆）田枝討負弓等去二月九日の解に備く、新羅人一百十人五艘の船に廻り、小近島に著し、土民と相戦う。即ち九人を打ち殺し、一百一人を捕獲す、てへり。」

・小近島の島民が5艘の船で到来した新羅人110人と戦い、9人を殺害、101人を捕らえる。

【史料19】『続日本後紀』承和元年（834）2月癸未条

「新羅人等遠く滄波を渉り、大宰海程に泊り着く。而るに百姓之を惡み、弓を巧き射て傷つく。是に由りて、太政官、府司を譴責し、其の射て傷つく者は、罪に隨ひて罪を科せ、傷病を被る者は、医を遣して療治し、糧を給ひて放遣せよ。」

・「大宰海程」とあることから、西海の島嶼地域

・そこに来着した新羅人との間で紛争が発生

→交易などの平和的な側面と、外賊の侵襲などの国際的なトラブルにさらされるという側

・『貞観交符式』延暦5年(786)8月7日太政官符「応早作土屋及被使領官福垣納事」では、「又、屋上の墾造は、雨に遭はば即ち割がる。依りて権りに塗上げ、草を蓋ひ、以て風雨をふせいできた」が、今後は屋上の墾造・草蓋をやめ、板葺とすることを命ずる

・『同』新案所引延暦9年(790)7月23日太政官符ではこれを撤回

・この結果として倉を互倉とすることが行なわれ、それにかかわる国府の造瓦の活動のなかで作成された木簡と想定
→【史料9】の菊池郡内の倉庫は依然として草葺。それに対して鞠智城の倉庫は大きく様相が異なる。

鞠智城の倉庫もつ意味の重要性

(3) 「鳴動」記事の特質

◆鞠智城での兵庫鳴動記事の評価

★「天安年間では鞠智城の鳴動記事の他に兵庫の鳴動などといった記事は全国的に確認できず、鞠智城において直接的に新羅海賊を警戒したことと表れととらえることには慎重にならなければならないであろう」[清田英幸 2015、28頁] と評価

→この指摘には疑問が残る。→鳴動記事一覧参照

【表1】庫・倉などの鳴動記事一覧

No.	出典	年月日	倉	西暦	所在	鳴動した建物・鳴動した物
1	續日本紀	養老5年2月壬辰(15日)	721		宍保兵庫	
2	續日本紀	宝龜10年10月癸巳(3日)	790		宍保兵庫	
3	續日本紀	天安元年3月乙酉(28日)	781		【養老實言】7月18日、雲間兵庫	
4	續日本紀	天安元年3月乙酉(28日)	781		【伊弉實言】7月18日、新羅國中城門大庫	
5	續日本紀	天安元年4月乙未(1日)	781		宍保兵庫	
6	日本書紀	天安元年12月庚戌(24日)	781		兵庫鞠智倉庫	
7	日本書紀	大同元年3月丙戌(22日)	808		兵庫	
8	日本書紀	大同3年8月丙子(27日)	808		宍保兵庫	
9	日本書紀	承和4年3月癸未(20日)	837		【養老實言】7月25日、兵庫	
10	續日本紀	承和4年3月癸未(20日)	837		【養老實言】7月19日、兵庫	
11	日本書紀	承和7年7月丁未(1日)	840		【伊弉實言】天安元年(781)兵部兵庫	
12	日本書紀	天安2年2月癸未(13日)	855		【養老實言】養老元年(781)兵部兵庫	
13	日本書紀	天安2年8月丙戌(10日)	855		兵庫中倉	
14	日本書紀	天安2年閏2月丙辰(24日)	856		【養老實言】養老元年(781)兵部兵庫	
15	日本書紀	天安2年閏2月丁巳(25日)	856		養老城兵庫	
16	日本書紀	天安2年4月己酉(20日)	856		【大宰府實言】肥後國海城兵庫、 【理不物十一字】	
17	日本書紀	天安2年8月壬辰(4日)	856		【養老實言】兵庫	
18	日本書紀	貞觀元年正月22日	859		【大宰府實言】肥前國志摩兵庫	
19	日本書紀	貞觀8年4月18日	866		【養老實言】肥前國志摩兵庫、京	
20	日本書紀	貞觀8年9月7日	866		【養老實言】兵庫	
21	日本書紀	貞觀8年10月19日	867		【石見實言】肥前國志摩兵庫	
22	日本書紀	貞觀17年12月1日	870		【大宰府實言】肥前國志摩兵庫、肥後國、肥前、京	
23	日本書紀	貞觀17年正月15日	871		【大宰府實言】肥前國志摩兵庫	
24	日本書紀	貞觀17年7月17日	872		清江宮	
25	日本書紀	元慶3年2月16日	879		肥後國海城兵庫	
26	日本書紀	元慶4年2月28日	880		【肥後實言】兵庫、肥前、肥後、肥前、京	
27	日本書紀	元慶4年4月23日	880		石見國志摩兵庫	
28	日本書紀	元慶8年9月14日	881		9月28日、兵庫、京	

備考：【】内は報告した官司

→このうち地方からの報告を受けて中央政府が対処したNo.19・No.22・No.26の事例(※)に注目。

→No.19

【史料11】『日本三代実録』貞観8年(866)4月18日条

「若狭国言す。印と公文を納むる庫并兵庫、鳴る。国司に下知して曰く、今月十六日、彼国に宣告して、兵戎を戒慎せしむ。今言す。兵庫、自ら鳴る。陸奥宣旨す。遠国の国、当に來り致すこと有るべし。兵乱と天行と災を成して相ひ仍る。宜しく益警衛し兼て災疫を防ぐべし。」

→No.22

【史料12】『日本三代実録』貞観12年(870)6月13日条

「是より先、大宰府言す。肥前国梓嶋郡の兵庫震動す。驚鳴ること二声なり。蒼龜に決せしに、隣兵を警むべし。是の日、勅して、筑前、肥前、老岐、対馬等の国島をして、不慮を戒慎せしむ。」

→No.26

【史料13】『日本三代実録』元慶4年(880)2月28日条

「是より先、肥前国言す。兵庫震動し、三日を経て、庫中の賊、自ら鳴る。陸奥宣旨曰く曰く、遠方の兵賊、北方より起る。是の日、太政官符を因幡・伯耆・出雲・尾佐等國に下して、慎みて非常を嚴警防護せしむ。」

→鳴動と対外関係への「危機」意識が密接に連関

・菊池院の兵庫に現われた怪異は大宰府の西南に出没する新羅海賊の跳梁に連なる予兆として理解された(濱田耕策 2010)

3 平安期の対外意識と鞠智城

(1) 対外意識の3つのレベル

①大宰府・地方官司の意識

◆貞観11年新羅海賊事件

【史料14】『日本三代実録』貞観11年(869)6月15日条

「大宰府言す。去月廿二日夜、新羅の海賊、艦一艘に乗りて博多津に來り、豊前国の年貢の船船を掠奪し、即時逃竄す。兵を發して追ふに遂に賊を獲ず。」

【史料15】『日本三代実録』貞観11年(869)7月2日条

「是の日、勅して大宰府司を謹實して曰く、諸國の貢調使吏の領得は、一時に共に聚ち、先後零強して其の事類を離るべからず、直るに豊前國一國をして、繰り先に進強せしむ。亦羽野の人、柵を穴口に乘す。遂に新羅の寇盜をして、隙に乗じて侵掠を放さしむ。唯官物を亡失するのみにあらず、兼て亦國威を損辱す。之を往古に求むるに、未だ前聞有らず。後來に始すに、當に面目無かるべし。使人買むべしと云ふと雖ども、抑亦府官怠有る。又成人言く、寇賊逃れ去りし日、海辺の百姓五六人、死を冒して追ひ



第25図 建物遺構の位置（基壇部）

- ・礎石総柱建物 66号建物
- ・礎石総柱建物 45～48号建物

→武器庫としてとらえることへの「消極性」〔五十嵐基壽 2015〕

- ・兵庫が鳴動していることから、城内に兵庫が置かれていたことと関係する
- ・倉庫施設となっていた鞠智城に大量の武器が置かれていたとは考えにくい
- ・この項には鞠智城は大宰府の管轄下ではなく、武器も収蔵されていなかったことが想定される（16頁）

☆ただし、元慶の乱における不動倉からの稲穀支給事例への着目は注目すべき指摘
→兵庫鳴動と対外的な危機の喚起との連関から、軍事的要素を全く取り除くことはできないのではないかと。

→稲穀の蓄積への注目〔佐藤信 2014〕

【史料6】大宰府跡出土木簡（不丁官衙地区）『木簡研究』9 1987年）

「為班給筑前筑後肥等國遣基肆城稲穀陸大監正六上田中朝×」 264×34×6 011

- 「筑前・筑後・肥などの国に班給するため基肆城の稲穀を（遣わし）、大監正六（位）上田中朝（臣某）に随わしむ」と読み下しうると考えている。班給の目的、基肆城の稲穀の性格と班給との関係、田中朝臣の人物比定、大監としての彼の任務など、釈読が容易な反面、多くの問題点を含んでいる。『木簡研究』9）

・基肆城の倉庫群に納められていた大量の稲穀は、筑前国・肥前国ではなく大宰府の直

接管理下にあったこと、飢饉・不作の際や保存期限到来の際などの必要に応じて、そこに蓄積された大量の稲穀が西海道諸国に班給されることがあったこと

- ・古代朝鮮式山城が大宰府の管理下で西海道全体のための機能を果たす施設であるということを示す
- ・基肆城の稲穀がこの時筑前・筑後・肥前・肥後等の諸国に支給された経緯は未詳だが、おそらく鞠智城にも存在した多くの倉庫群に蓄積された稲穀も、同様に扱われることがあり得たはずである〔佐藤信 2014、12頁〕

→佐藤説の前提

- ・「大宰府は単に外交と防衛とを担当させられたのではない。現実的にはむしろ大宰府が西海道を一運ぶの閉鎖状態におき（これは兵站基地という側面もある。西海道から馬や米をよそに運ぶことへの強い規制があった……）」との指摘〔坂上康俊 2006〕

→西海道全体のための機能と考えられるのか

◆もちろん備蓄機能を無視するものではない

【史料7】『日本三代実録』貞観11年（869）7月14日条

「是の日、肥後国大風雨。瓦を飛ばし榭を抜き、官舎民居の顛倒する者多し。人畜の压死するもの勝て計ふべからず。潮水漲溢して六郡を漂没す。水退きし後、官物を捜査せしに、十に五六を失ふ。海より山に至る其の間田園數百里、陥ちて海と為る。」

【史料8】『日本三代実録』貞観11年（869）10月23日条

「是の日、勅して曰く、（中略）如聞、肥後国迅雷暴を成し、坎墮災を為して、田園以に淹傷し、里落其れに由り漂没す。（中略）宜しく施すに徳政を以てし、彼の凋残を救ふべし。大宰府をして、其の災害を被ることも甚しき者に、遼年稲穀四千斛を以て周く給ひ、勉めて存恤を加へ、職を失はしむることなからしめよ。又墳塚毀壞の下の有ゆる残屍乱骸は、早く収埋を加へて、曝露せしめず。」

→暴風に よる肥後国の被害

「遼年稲穀（不動穀）4000斛による賑恤

◆鞠智城の備蓄機能

・IV期以降の礎石総柱建物に注目

【史料9】『日本三代実録』貞観17年（875）6月20日条

「大宰府言す。大鳥二、肥後国玉名郡の倉上へ集ひ、西を向きて鳴く。群鳥數百、菊池郡の倉舎を葺く草を囓み抜く。」

- ・倉舎を葺く草

→他国の事例（下野国府の事例）

【史料10】下野国跡出土2165号木簡（『下野国府跡Ⅱ』栃木県教育委員会 1987）

「・造瓦倉所

・ $\left[\begin{array}{c} \text{口} \\ \text{口} \\ \text{口} \end{array} \right]$

・延暦10年頃と推定される土壘SK-011から出土

70×28×（2） 081

一方で、礎石建物の大型化＝(食料などの備蓄機能が主体となると想定)

V期：9世紀第4四半期から10世紀第3四半期(鞠智城の終末期)

建物の棟数減少 建物規模の大きな礎石建物の出現

＝(食料の備蓄施設としての機能は存続) *10世紀中ごろに廃城

【図1】鞠智城出土土器数量比較『鞠智城』(熊本県教育委員会パンフレット)による)

→出土土器からの鞠智城の性格変化の
想定



⇒IV期以降の鞠智城の性格に変化があらわれることの指摘

◆IV期以降の鞠智城をとりまく環境の変化とそれともなう鞠智城の性格を検証する課題

2 平安時代の史料からみた鞠智城

(1) 4つの史料

【史料1】『日本徳天皇帝実録』天安2年(858)閏2月丙辰(24日)条

「肥後国言す。菊池城院の兵庫の旗、自ら鳴る。」

【史料2】『日本徳天皇帝実録』天安2年(858)閏2月丁巳(25日)条

「又鳴る。」

【史料3】『日本徳天皇帝実録』天安2(858)6月己酉(20日)条

「大宰府言す。(中路)又肥後国菊池城院の兵庫の旗、自ら鳴る。同城の不動倉十一宇、大く。」

【史料4】『日本三代実録』元慶3年(879)3月16日丙午条

「又肥後国菊池城院の兵庫の戸、自ら鳴る。」

→字句へのこだわり

- ・兵庫
- ・菊池城院・菊池郡城院

(2) 倉と庫

【史料5】倉庫令逸文(倉於高燥処置条(日本思想大系『律令』による))

「凡そ倉は、皆高く燥ける処に置け。側に池園圍け。倉を去ること五十丈の内に、船倉置くことを得ず。」

◇「クラを表わす文字は、令では倉・蔵・庫などが用いられており、大蔵・内蔵など、調度物や諸国貢納物を納めるクラには蔵、正税その他の米穀類を収めるクラには倉あるいは倉庫、兵器および書を取めるクラには庫の字を用いるのが普通であって、これらを互いに混用することはあまりない。宮衛令で庫蔵といい、倉庫令で倉蔵という場合にも、それぞれ右の用法による庫と蔵、倉と蔵を意味している。ただし二種以上のクラを総称する場合には、倉・倉庫などの語が用いられることが多く、倉庫令という場合の倉庫の語も、各種のクラの総称である。」(前掲『律令』補注)

◆発掘成果と倉庫群

【図2】遺構の変遷(熊本県文化財整備報告第4集『鞠智城跡』2012による)



図2 遺構の変遷(家原・野田)

- ・大型礎石をともなう20・21・36・59・64・72号建物
- ・礎石・掘立柱併用建物となる11・12・29号建物
- ・掘立柱建物13号建物
- ・第I期に出現した礎石総柱建物50号建物の存続
- ・掘立柱建物60・61号建物も推定

成したと思われる。そこには、大宝初年より拡充された倉庫制度が国司を通じて国家管理を進めようとした姿が重なる。大野城・基肆城そして鞠智城の大型で礎石化した倉庫群が、8世紀前半に整備された意図が見えてくる。つまり、古代山城に膨大に蓄積された稲穀は、非常事態への備えであるだけでなく、地域支配に不可欠な不動穀としての性格を備えていたということになる。

おわりに

古代山城のような人里離れた山中にこれほどの棟数の倉庫群を造営した理由は何か。それは稲穀等を長年にわたって保存管理するうえで平地より選んでいたということである。争乱や盗難・破損などの人的要因、地震や台風、水害・火災などの災害要因、温度や紫外線などによる劣化要因、虫やカビなどによる生物要因など、さまざまな影響要因について考慮した結果だと考えられる。最も恐れるのが略奪や盗難である。ひとたび乱が起ると、場合によっては灰塵に帰することも想定される。古代山城は軍事施設であり、要害堅固である。しかも、昼夜を問わず警備がなされていたことが明らかである。つまり人的な要因による略奪や放火から取納物を防ぐにはこれ以上の場所はないであろう。この強固な警備が倉庫を造営した最も大きな要因といえるかもしれない。

【引用・参考文献（発掘調査報告書を除く）】

- 赤司清彦 2014 「古代山城の倉庫群の形成について—大野城を中心に—」『東アジア考古学論叢』中国書店
- 植木久 2010 「景園」関西道徳構造と内裏正殿の関係に関する一考察」『科学研究費成果報告書（研究代表者植木久） 東アジアにおける難攻堅宮と古代都城の国際的性格に関する総合研究』（伊）大阪市文化財協会
- 野野聡 2014 「鞠智城の遺構の特徴と特殊性—建物の基礎構造と貯木庫を中心に—」『鞠智城跡Ⅱ 論考編Ⅰ』熊本県教育委員会
- 熊山猛 1964 「熊野式山城の倉庫群について」『九州大学文学部創立四十四周年記念論文集』
- 狩野久 2010 「瀬戸内山城の時代—築城から廃止まで—」『古代山城 日本シンポジウム』高松市教育委員会
- 亀田修一 2014 「古代山城は完成していたのか」『鞠智城跡Ⅱ 論考編Ⅰ』熊本県教育委員会
- 小原龍三郎 2012 「築城からみた鞠智城」『鞠智城Ⅱ』熊本県教育委員会
- 佐藤信 2014 「鞠智城の歴史的位置」『鞠智城跡Ⅱ 論考編Ⅰ』熊本県教育委員会
- 松村恵司 1983 「古代稲倉を語る問題」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所
- 大橋幸夫 2015 「考古学からみた鎌倉の一考察」『社会文化論叢』11 鳥栖大学法文学部
- 武井紀子 2111 「鎌倉の成立とその意義」『歴史学』206 国史学会
- 平野勇男 1983 「クラ（倉・庫・廩）の研究—大宰府、郡家の発掘調査に上せて—」『大宰府古文化論叢』吉川弘文館
- 内井一雄 2014 「鞠智城の遺構」『鞠智城跡Ⅱ 論考編Ⅱ』熊本県教育委員会
- 山中敏史 1994 「古代地方官衙建築の研究」瑞岩閣
- 横田義幸 1983 「大野城の建物」『大宰府古文化論叢』下巻吉川弘文館
- 渡辺寛宏 1989 「平安時代の不動穀」『史学雑誌』98—12

【講演②】

平安期における鞠智城

—9世紀～10世紀の対外関係と「菊池城院」「菊池郡城院」—

加藤 友康（明治大学文学部研究科特任教授）

はじめに

鞠智城は、文献史料上では、文武2年（698）5月に大野城・基肆城とともに大宰府によって總治されたことが『続日本紀』に記述されたのち、160年の空白期間を経て、『日本書紀』天智天皇実録「天安2年（858）閏2月丙辰（24日）条に「菊池城院兵庫」として再び記述があらわれる。しかしその記述は、「兵庫」「不動倉」など限定されたものであり、また『日本三代実録』元慶3年（879）3月16日条の「菊池郡城院兵庫」の記述をもって文献史料上の舞台からは姿を消してしまう。

2014年7月27日に開催された「鞠智城シンポジウム 律令国家の確立と鞠智城～899年「總治」の実像を探る～」では、律令国家成立期の鞠智城に焦点をあてて検討が加えられたが、今回はその成果をもとに、平安期の鞠智城をめぐる情勢—とくに対外関係を中心に—について、考察を進めたい。

1 鞠智城発掘調査の到達点の確認（矢野裕介 2015）

◆1967年第1次調査～2010年第32次調査

- ・城域南縁の環道・堀切・池ノ尾の三か所の城門跡
- ・西側土塁線・南側土塁線から版築工法の土塁跡
- ・城中心部の長者原・上原地区から72棟の建物跡
- ・長者原地区東側で八角形の建物跡
- ・長者原地区北側から上原地区の北側にかけてコの字型配置の建物群
- ・長者原北側谷部から貯水池跡；銅造菩薩立像・木簡出土

◆7世紀後半から10世紀の中頃にかけて5期に区分

I期：7世紀の第3四半期から第4四半期の間

II期：7世紀末から8世紀第1四半期前半

コの字配置の建物群、八角形建物、総柱の倉庫群

*城の施設がもっとも充実した段階

III期：8世紀の第1四半期後半から第3四半期

礎石建物の出現

*土器の空白期間＝（城の維持管理において必要最小限の人員の配置と想定）

IV期：8世紀第4四半期から9世紀第3四半期

管理棟的建物群の消失 貯水池中央部の埋没

V期と位置づけられている。長者山頂部は地下げがなされているので不明だが、本来は東西1町、南北半町のブロックが想定される。

以上、鞠智城の建物遺構の時期的な変遷は、大野城の建物群の動向と一致して考えることが可能である。

3 鞠智城の倉庫群の形成

鞠智城の倉庫は、『日本書紀天皇実録』天安2（858）年6月の「大宰府言・肥後国菊池城院兵庫殿自鳴、同院不動倉11宇火」とあることから、大量の稲穀を蓄えた不動倉があったことが知られている。各地の正倉には各国の財源となる正税が蓄えられるが、通常の出納に用いる動倉と和暦年間より飢饉など非常時に出納が許可される不動倉がある。その蓄積の状況は分割して収納されるのではなく、動倉に蓄積された稲穀が満倉になり、ある一定の時期を経て封印されて不動倉となるのである。しかも、正倉院の同一ブロックで連続して貯蓄されていくのではなく、1つの倉が満倉になると別のブロックで貯蓄が開始され、新たに倉庫が造営されるという（渡辺 1989）。

鞠智城も9世紀には「菊池城院」と呼称されていることから、郡衙の正倉院のように一院を構成していたと考えられる。ただし、園地施設は確認されていないが、長者原地区東側の倉庫群が整然と配置されている様子は、さらに東側を含めて方形区画のエリアが想定されるかもしれない。整然と配置させて建物に番号を付し方位+番号によって管理されていたとみられる。

このように倉庫の配置や規模からみると、永年蓄積を目的に郡衙正倉と同じ管理方式に則って倉庫が形成されていることが理解できる。また、郡衙正倉には法倉と呼ばれる超大型と同規模でも高質の倉庫が設置されている。よくみられるのは桁の長い長倉で、五斗斛以上を蓄積する規格である。大野城には3×8間以上の礎石総柱建物、基礎城では通称大礎石群といわれる3×10間の礎石総柱建物が最も高い場所に独立して造営されている。鞠智城にも3×9間の宮府礎石と呼ぶ礎石総柱建物が存在している。この長倉が置かれた8世紀前後から長年かけて稲穀が逐次貯積されるに従い、鞠智城では郡衙正倉の蓄積と同じやり方で、倉庫が徐々に増築されたのではないとみられる。

古代山城の倉庫群が律令制の財政基盤となる正倉のあり方を本質的にそのまま適用していることが指摘できる。

4 倉庫形成の目的

大野城・基礎城・鞠智城といった古代山城に米倉が多数形成された理由は何か。天智8（669）年に、築城した大和の高山城へ畿内の田税を収め、翌年には塩と穀（糯米）を蓄積した記録がある。天智朝期の一連の古代山城築城の開始期に、山城は税物を収納する場所に利用されていたことになる。さらに、天武元（672）年の壬申の乱に際して高山城に駐屯していた近江朝臣は、倉を焼いて逃亡したとされる。史料は「秋税倉」と記され、その

収納物は租糧であり、後の正税というべき稲穀が蓄えられていたことが知られる。

これらの史料から7世紀後半の対外的な緊張関係の中で、有事に備えて食糧を備蓄する目的で、その収納に税糧が用いられたことが読みとれる。奈良時代の文字資料では大宰府政庁前面の溝から出土した天平期の木簡「為班給取前筑後肥前國造基礎城稲穀陸大監正六上田中朝・」は、少なくとも基礎城の倉庫を不動倉として位置付けているとみてまちがない。このように、大野城・基礎城・鞠智城の倉庫の多くは不動倉として貯積されていたとみられる。不動倉の設置は大宰律令の成立を契機に一般財源とは別に、「遠年之備、非常之備」とされるように非常事態に備えたためであると理解されている（武井 2011）。

では、なぜ平地に位置する郡衙正倉の不動倉からの出納ではなく、山中に蓄積しておく必要があったのか。その理由としては、まずは唐・新羅の侵攻に備えた兵糧の蓄積も当然あったことと思われる。

ところが大野城・基礎城・鞠智城から武器・武具類は出土していない。これまでのところ山城を構えて敵を迎え撃つような武装化の痕跡が乏しいのである。もちろん天武元（672）年の筑紫大宰栗隈王の「筑紫国者、元成辺城之難也、其峻城深障」とあるように、常に城を手入して防御を怠らなかつたのはまちがないが、8世紀前半になると大宰府口門城の工期のように防御施設というよりは、城門の建築は荘園化や威嚇を保つ方向に転換されているようである。

このように大野城・基礎城の倉庫は、対外戦争に対する備えという性格があるにしても、天変地異による災害や疫病などの非常事態に対応するための財源を安定的に確保することを目的としたと考えられないだろうか。つまり内政目的の比重が高かったのではないかとと思われる。

とくに天武朝後半以降には、東アジア情勢も落ち着きを見せたことから、日本は統一国家形成に本格的に乗り出し、律令制による地方支配の強化に比重が置かれるようになったと考えられる。西海道には律令制下で新たに大宰府が成立し、8世紀前半までには西海道を総監するにふさわしい陣容を備えるようになる。大宰府には中央直轄ともいべき軍勢力を集中させ、その兵力は8世紀初頭になると、南九州の単人鎮圧への動員など西海道の地域支配へと振り向けられていった。海の外の地域ではなく、支配領域の拡大という西海道の異民族を服属させることが重視されたのではないだろうか。

古代山城のこれまでの調査で、8世紀前半に存続が確実なのは大野城・基礎城・鞠智城に限られる。そこには天武朝期以降、列島の領域拡大が進み、大宰律令には単人を「化外人」と規定している。また軍団制がその頃整備され、その軍勢力によって南九州へ進出を進めてもいる。こうした内政要因の動向も、3つの山城を、8世紀以降も存続させた背景にあったと考えられる。

ところで、西海道は、他地域と異なり中央にとって歴史的に警戒すべき地域でもあった。地域の豪族層によって成立している郡衙正倉に頼ることなく、大宰府の管轄下で独自の財源を確保しておくために大野城・基礎城・鞠智城の内部に不動倉でもいべき稲穀を形

また、倉庫群の中には超大型の総柱高床倉庫が1棟、景観の中心となるような場所に建てられる。これは法倉と呼ばれる倉で、飢饉などの大災害や天変地異が起こった際に、民衆を救済するため賑給用の糧穀を納めた特別な倉（大橋 2015）があり、大野城と基肆城でも1棟の礎石式の長大な倉が認められる。礎石建物では最も早く造営されている。

こうした特徴を踏まえながら鞠智城の建物群の様相をみると、大きく4つの方位によるブロックの設定が可能である。発掘調査報告書に示された地区の名称と時代区分にしたいが方位と略称を以下に示す。

I期（7世紀第3四半期～7世紀第4四半期）長者原地区中央高台

棟方位が北に対して40°～50°前後西偏する建物群。長者原地区の中央高台に位置し、略南北の縦長に配置される。北側の貯水池が設けられた谷筋を指向した主軸線が意識されて、地形に合わせた結果と思われる。すべて堀立柱側柱建物のみで構成される。16号の堀方より7世紀初頭の須恵器が出土。このうち、16～18号は正面を南に向ける規模の大きな東西棟であることから、中心的な建物としてみられ、建替が同じ場所でもなれ長期間存続していたと思われる。この建物以外は、比較的小規模ながら2棟が並列あるいはL字形に配置されるなど、官衙特有の配置をなす。なお、規模の小さな建物は、造営のための作業小屋かもしれない。

II期（7世紀末～8世紀第1四半期）長者山東側側部

棟方位は北に対して20°～30°前後西偏する建物群である。長者山東側側部の平場が造地され、その地形に合わせたためにこの方位となったのかもしれない。方形近いエリアに整然と建物が配置される。I期の建物群の西側へと拡大され、初めて堀立柱高床倉庫が建てられるようになる。さらには基礎を有した長大な礎石高床倉庫が造営されたと考えられる。側柱建物は礎石建物と規則的に配置されていることから、土間構造の倉庫である「屋」の可能性が高い。6号と7号の柱腿方及び59号礎石掘り込みより7世紀後半～須恵器が出土しており、これを上限とする。この時点ではI期の建物は存続していた可能性が高い。仮にI期の建物部分が廃絶され広場になっていたとしたら、城司が勤める管理棟的な中核建物は別の場所に移転したことになる。礎石式の長倉の造営は、大野城・基肆城と連動し、敵兵を迎え撃つ際の役割から、正倉のような非常時に備えた性格への転換となる。まさしく3城が統治されたことになる。こうした長倉は、礎石化がいち早くなされる傾向にあり、建物景観を象徴する建物として、視覚効果ももたらされていたと考えられる。

III期（8世紀第1四半期～8世紀第2四半期）長者山頂部・北側側部・長者原地区東側

棟方位は、ほぼ真北方位である。一般的に奈良時代以降に真北を主軸に官衙は配置されることが多い。最も高所にある長者山頂部とその北側側部に堀立柱倉庫が造営される。さらには谷状の低地を挟んで長者原地区東側の最も北側に大型の側柱建物が2棟並列して配置される。II期の建物群の外側へと拡大しているとみられる。礎石高床建物3×4間のうち、礎石堀立柱併用建物（11・12・29）や周溝を巡らしたもの（59・37）など、格の高い礎石式倉庫が先に造営される。III期は、さらに正倉としての整備が進み、長者山頂部とい

うまさしく高台に倉が立ち並ぶようになる。堀立柱・礎石併用建物の出現の意義は不明である。ところで、大野城・基肆城で8世紀前半に配置された3×5間の強い規格性のあった倉庫は造営されていない。この時期鞠智城は空白期と考えられており、II・III期の倉が演替となって、新たな造営がなされなかったのかもしれない。なお、長者原地区東側の北にある2棟の堀立柱式の側柱建物は、周辺に倉庫がないことからこの時期あらたに造営された格の高い中核建物とすれば、さらに東側からの建物景観が意識されていることになる。

IV期（8世紀末～9世紀後半）長者山頂部・長者原地区東側・上原地区

棟方位は、北に対して10°前後西偏する建物群。長者山頂部に礎石高床倉庫が造営され、長者原地区東側と上原地区にかけて堀立柱式の側柱建物・総柱高床建物・八角形建物、そして礎石総柱倉庫が並ぶ。高床倉庫は南北に直列して配置される。63号の側柱建物は、その並びからみて「屋」の可能性が高い。なお、礎石総柱倉庫は同位置で重複関係にあり、建替れていることから小間が想定される。礎石総柱の倉庫は3×4間が中心で、柱間寸法は46・72号のように大野城で9世紀以降主流となる3×4間と同じである。

ほぼ南北方向に直列して倉庫群が立ち並ぶ姿は都府正倉に近く一郭を構成していると考えられる。そのため62・63・19号の側柱建物群については、コ字形をなす政庁のような中心施設とみられているが、正倉域に近接し過ぎているのでこれには異論がある。同様に八角形建物も何か特別なものを収蔵する倉と考えた方がよいのではないだろうか。この一郭は場合によっては上原地区のさらに東側を取り込んだ方2町の規模だったのかもしれない。これを菊池城院と呼ばれたのかもしれない。上原地区の東側へと広がる方2町の範囲の可能性も考えたい。

V期（9世紀後半～10世紀第3四半期）長者山北側側部・長者原地区東側

IV期の建て替と、67・68号のように台地上だけではなく、下方の空地にまで新たに造営される。36・56・72号は9世紀後半代より存続していたとみられることから、これを

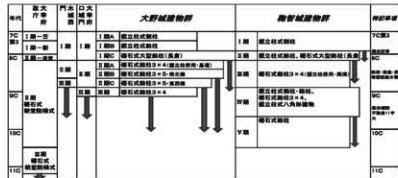


図5 鞠智城建物群の時期区分と大野城及び大宰府政庁等との比較

出土遺物から平安時代まで存続していた可能性が高い。

Ⅰ期(9世紀前半～10世紀代) Ⅰ期は新しく3×4間の倉庫が随所に造営されている。基肆城にはこれまでのところ、この規格の倉庫は造営されていない。主城原地区の1棟は3×5間からの建て替えであるが、それ以外では新たな場所を探して拡張されている。主城原地区では平安時代に入る格子印きの平瓦が多い。存続時期は9世紀が主流だが、8世紀にさかのぼる造営も考えておきたい。

2 鞠智城の建物の動向

鞠智城ではこれまでに72棟が確認されている。掘立柱建物は平面規模と構造から側柱建物は26棟、総柱建物は13棟を検出している。側柱建物は1×3間の小規模の建物から3×11間まで平面規模は9種類とバラエティに富んでいる。また、なかにはL字型配置を採るような官衙的な様相を帯びた建物配置もある。

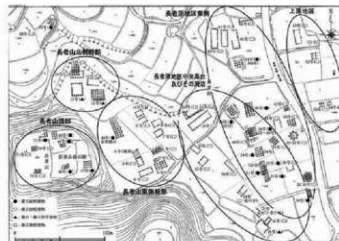
総柱建物は平面プランが確実なもので、3×3間・3×4間・3×5間がある。3×5間は床面積が80㎡と広く、一般的な郡衙正倉では大型に属する。なかには未確定ながら40号建物は、135㎡の超大型の規模が想定される。このほかに、日本の古代山城では初めて検出された八角形建物がある。

鞠智城の建物時代区分 鞠智城で確認された建物群については、発掘調査報告書では5期(Ⅰ～Ⅴ期)に時期区分がなされている。建物の規模構造の分類、そして遺構の重複による先後関係の把握、これに基づく編年、さらには建物方位による計画性の把握、そして出土土器からの年代把握など詳細な分析がなされている。基本的にはその時期変遷の流れと変わらないが、土地の利用形態を明確にするために、建物の棟方位を中心に再度説明したい。

古代の官衙では、建物のブロックごとに棟方位がそれぞれ統一されていることが一般的である。棟方位を合わせるの、設計施工の基準となる主軸線があるからである。これは時代によって異なっていることが知られている。そのため同時併存の検討には、この建物の棟方位(あるいは主軸線)を参考にすることが重要である。大野城や基肆城で判明している建物群の時期変遷の特徴に合わせて時期的な土地利用のあり方を考えたい。

大野城の主な特徴を列記すると、掘立柱の側柱建物が築城当初に造営され、その後掘立柱建物の総柱建物が出現し、その後礎石総柱建物へと移行する。この礎石総柱の高床倉庫は8世紀前半に規格性の高い3×5間が建てられ、9世紀前後に3×4間へと替わるが規格はややゆるむ。

この礎石建物の中で掘立柱併用倉庫は、同規模の倉の中では高品位に位置づけられ、大野城と高安城そして鞠智城のみ同じ構造の例がある。8世紀前半に出現するとみられる。7世紀代の金田城でも2棟確認されているが、倉庫とは認定されていない。これらの総柱の高床倉庫は正倉のように、稲穀が満倉になると不動倉となると考えられる。



鞠智城建物地図



Ⅰ期 (N-45° -W前後)

Ⅱ期 (N-25° -W前後)



Ⅲ期 (N-0° 前後)

Ⅳ・Ⅴ期 (N-10° -W前後)

図4 鞠智城建物時期区分図

これに対して3×5間は柱間寸法が全て7尺(2.1m)である。しかも平面規模も同一である。統一的な設計と規格に基づき、施工も厳密な監視の下でなされたこととみることができる。その配置は尾花地区でみられるように、柱筋をきちんと合わせて直列に並ぶことを基本としている。また、その建物間の間隔も9m前後とほぼ等間隔を保っている。

このように平面規模や柱間寸法に強い規格性がみられるのが特徴である。とりわけ柱間寸法の規格化は、輪部材・垂木・屋根葺材・柱間装置に至る材料や細部の施工技術までを規格化したことと理解できる。さらに建物方向や柱筋を合わせていることは、高い測量精度を必要としたマスタープランに基づく建物配置がなされたことを意味する。

大野城の建物群はそれぞれの地区によって土地利用のあり方が異なっている。兵倉や倉庫などの目的が利用するが、長期間にわたって利用された拠点的地域。次に3×5間と3×4間の倉庫が混在し、長期間にわたって倉庫の用途に利用された地域。最後に、倉庫の用途のみだが、平面規模と柱間寸法が同規格の礎石式倉庫から構成される地域で、この地域は存続期間が最も短い。

基肄城の建物 ここで大野城と同時期に築城された基肄城の建物についても確認しておきたい。ただし建物の発掘調査が実施されていないため、掘立柱建物は検出されていない。

これまでに40棟の礎石建物跡が発見されている。平面規模が判明しているのは28棟である。このうち実に23棟が3×5間の倉庫である。規模は大野城の3×5間と同じ規格に則っていることから、成立の時期や目的は大野城と共通していると考えられる。ただし大野城にみられる3×4間の建物が造営されていない。そのため、平面規模が確定していない礎石建物が仮に3×5間であると仮定すると、3×5間の礎石倉庫は35棟を数えることとなる。つまり同量の船殻が貯蔵されていたのである。仮定すれば船殻の蓄積量が事前に定められていて、計画的な倉庫の造営と管理・運営がなされていたことになる。

大野城・基肄城の時期区分 大野城では大宰府口城門を3期に分けた編年が提示されている。I期は掘立柱式、II期は礎石式、III期はほぼ同じプランでの建替である。このうちI期とII期については大宰府政庁跡と水城西门の時期変遷とも合致している。大宰府のマスタープランに基づく大きな動きであることから、建物群の変遷もその時期区分に合わせて以下のようになる。



図2 大野城主城原地区の建物群

I期(664年～8世紀初) 大野城が築城された当初の時期である。建物は主城原地区で掘立柱式の建物がまずは造営されている。重複が明らかな主城原地区を例に説明したい。図の上の掘立柱式側建物065と掘立柱式総柱建物068は同一場所に同じ棟方向で重複することから、I-AとI-Bの2時期が確実に認められる。また、主城原地区では掘立柱式から礎石式に変更されて建物が造営される。これをI-C期とする。掘立柱から礎石への変更は建築構造上大きな変化である。I期掘立柱建物の長倉というべき大型倉庫065が北側に建造されたが、すぐ南でこれを踏襲するように礎石化した長倉SB60へと建て替えが行われている。

さて年代は、664年の築城記事を指標として、その存続期間は7世紀後半に位置づけられる。I-C期の礎石建物の屋根には百済系の単弁瓦が葺かれたと考えたい。史料記録では文武二年(698)の大野城・基肄城・駒智城の修繕記事が、この礎石式への転換に該当するとみられる。単弁丸瓦の年代的な位置づけによって、年代観は今後変わるかもしれないが、7世紀の範囲での制作と考えておくことに異論はないと思われる。

II期(8世紀前半～9世紀前半) 3×5間の礎石倉庫が建てられる時期である。規格性の強い3×5間を城内の随所に造営することは大野城にとって大きな画期である。基壇を有する建物や周囲に掘立柱を巡らせた優位性の高い建物で、建物の方向を南北に建てた時期がある。これをII-A期とする。基壇や周囲に掘立柱を備えない南北棟で構成される時期をII-B期とする。次に順次地区が拡張され、南北棟の用地確保が難しくなったためか、東西棟が造営された時期がある。これをII-C期とする。すべての倉庫の屋根が瓦葺きかどうかは不明だが、大量の屋根瓦の需要を満たした筒瓦版式は8世紀第1四半期と考えられていることから、その開始は大宰府政庁第II期と同じ時期に、規格性を重視した律的な倉庫群の造営が大規模に実施されたとみられる。礎石倉庫3×5間は、雨落ち溝などの

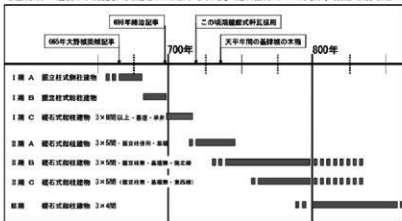


図3 大野城建物時期区分

所に強固な石塁・土塁がある。学史的にも石塁遺構の存在によって古代山城跡と認識された。一方、南方に孤立する鞠智城跡は平坦な丘陵地にあり、炭化米を伴う礎石群の存在によって認識された。外郭線は部分的には石塁・土塁もあるが多くは丘陵斜面を削出したままで、古代山城特有な構造を示していない。何よりも鞠智城は9・10世紀まで存続した大野城と並ぶ重要な古代城にも関わらず、『日本書紀』等の史料上に築造が記載されていない。

結論として、私は鞠智城が白村江敗戦以降に築造されたのではなく、それ以前に南九州地方一熊襲・卑人の居住地域一を経営する城郭として大化改新後に造営された「西海道最古の古代城」とであろうと考えている。勿論、これを裏付ける史料は皆無なので、傍証として古代日本の城郭建設の動きを比較したい。東北日本では大化改新直後の7世紀中葉に越国(新潟県)でその北側に居住する蝦夷に備えるため柵の建設が行なわれ、8世紀初頭に出羽郡設置とともに北方に出羽柵が造られ、733年に出羽柵は更に北方の秋田村に移されて秋田城となり順次北進した。これに対して西南日本では、7世紀中葉での南九州地方への対応は記録されず、約半世紀遅れて8世紀初頭に初見する。鞠智城創建は白村江敗戦後の防衛対策等のために史書の記載から漏れた故と考えたい。東北日本の越国の城郭建設とほぼ同時に南九州への備えとして建設に着手された鞠智城は、白村江以降の山城築造の中に組込まれて建設が行なわれたため、多くの山城と異なる立地・形態を取るとともに、創建年代が史書に記されなかったのであろう。『続日本紀』文武天皇2(698)年の「鞠智城繕治」の記事は再度南九州経営の拠点の整備を示したものであり、既に多くの研究者が指摘するように鞠智城跡第Ⅱ期の開始を示している。以後720(養老4)年まで対卑人への政策が実施され、鞠智城は大宰府南方の拠点として第Ⅲ期まで順次強化整備されていった(第1表・第2表)。

・藤原広嗣の反乱と乱鎮後の鞠智城

鞠智城跡の発掘調査で8世紀第2・3・4半期の土器が全く出土しないと報告されているが、これは740(天平12)年の大宰少貳藤原広嗣の反乱と戦後処理の結果を物語っている。すなわち、藤原広嗣は同年9月玄昶・吉備真備の排斥を求めて大宰府で反乱を起こした。中央政府は陸奥按察使・鎮守将軍大野東人を大宰府に任命、兵1万7千人で征討させ、広嗣は大隅・薩摩の卑人を含む1万人余を率いて筑前国遠賀郡に布陣したが、卑人等に戦意なく、敗れた広嗣等は逮捕され処刑された。大宰府は742(天平14)年に廃止、府庫の官物は筑前国の所管とされ、大隅・薩摩・多磨等の官人の禄は旧府庫の物を支給させた。大宰府の原鞠智城の兵器・糧米は反乱軍に使用されたと推定され、戦後には在庫の物資が大宰府庫に運じて官人等の禄として給されたのであろう。745(天平17)年大宰府が復活されたが、南九州経営拠点としての鞠智城の機能が復活することは無かった。やがて肥後国に移管されたが、肥後国でも積極的な管理は行なわれず、不動倉・兵庫などの倉庫群の老朽化に対応して大形倉庫への改修がなされた。第Ⅳ・Ⅴ期の建物遺構の変遷や出土土器の状況は、まさにこのことを物語っている。

【講演①】

古代山城の建物—鞠智城と大野城・基肆城—

赤司 善彦 (福岡県教育庁総務部文化財保護課長)

はじめに

古代九州に築城された古代山城は、これまでに14城確認されている。この中で『日本書紀』等にその名称が記されているのは、大野城・基肆城・金田城そして鞠智城である。史料では、大宝元(701)年の高安城・和嗣2(712)年の高安の峰、養老3(719)年の茨城・常城の停止というように、8世紀前半になると対外関係の好転や、701年の大伴旅命施行による軍制改革などを背景に、古代山城は廃止されている。

山城名	時期			
	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀
大野城	■	■	■	■
基肆城	■	■	■	■
金田城	■	■	■	■
鞠智城	■	■	■	■
高安城	■	■	■	■

図1 古代山城の出土土器による消長

ところが大野城と基肆城、鞠智城の3城は、左図のように発掘調査の結果、8世紀以降も存続していることが判明している。これらには多数の倉庫が造営されていることも共通し、鞠智城30棟、大野城と基肆城計100棟弱の数が明らかである。

古代山城の倉庫は武器・武具、

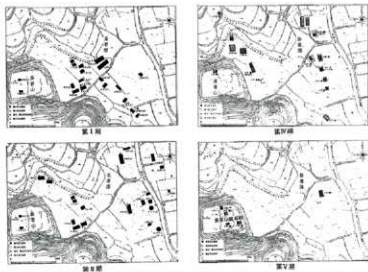
兵糧などを保管しておく必要不可欠な収納施設であるが、有事に際しての蓄えにしては多すぎるのではないかと考えられる。また、築城された段階ではなく、8世紀以降になって活発に造営されていることもみのがせない。

この3つの山城は大宰府によって同時に繕治されたように、8世紀以降も緊密な関係にあったのはまちがいない。ここでは、大野城・基肆城の建物遺構の動向と比較して、鞠智城の建物遺構の様相を検討したい。

1 大野城・基肆城の建物の動向

大野城の建物 城内からは掘立柱建物和礎石建物が確認されている。掘立柱建物は側柱建物(床が土間状の構造)が3棟で、総柱建物が2棟、総柱建物は3×3間と3×9間がある。

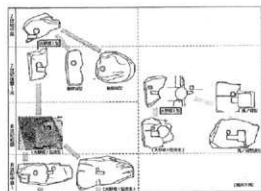
礎石建物は全て総柱構造の建物である。礎石の大きさは側柱も東柱も同じ規模と形状であり、側柱ではなく総東柱構造の高床倉庫であろう。倉の構造には壁体の材料によって呼び方が異なる。高床の場合には、丸木倉・甲倉(投倉)・板倉がある。桁行が30尺を超えるような長い倉は板倉の可能性が高いとされる(松村1983)。大野城の場合にも板倉が主流と考えられる。平面規模では3×4間が12棟、3×5間が32棟、3×8間が1棟確認されている。このうち3×4間は、柱間寸法は統一されていないが、近似した柱間寸法に集中する傾向があり、ある程度の規格も定められていたと考えられている。



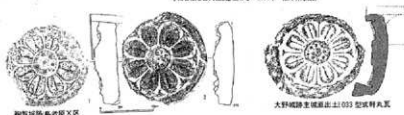
第2図 建物遺構の変遷(第1~第V期)
(熊本県教育『鞠智城跡①』熊本県文化財調査報告第276巻 2012年6出版)

年代	鞠智城跡の位置	築造範囲
TC	1	第一期(1000-1040) 築造範囲 1000 第二期(1040-1080) 築造範囲 1000 第三期(1080-1120) 築造範囲 1000 第四期(1120-1160) 築造範囲 1000
	2	第一期(1000-1040) 築造範囲 1000 第二期(1040-1080) 築造範囲 1000 第三期(1080-1120) 築造範囲 1000 第四期(1120-1160) 築造範囲 1000
	3	第一期(1000-1040) 築造範囲 1000 第二期(1040-1080) 築造範囲 1000 第三期(1080-1120) 築造範囲 1000 第四期(1120-1160) 築造範囲 1000
	4	第一期(1000-1040) 築造範囲 1000 第二期(1040-1080) 築造範囲 1000 第三期(1080-1120) 築造範囲 1000 第四期(1120-1160) 築造範囲 1000
SC	1	第一期(1000-1040) 築造範囲 1000 第二期(1040-1080) 築造範囲 1000 第三期(1080-1120) 築造範囲 1000 第四期(1120-1160) 築造範囲 1000
	2	第一期(1000-1040) 築造範囲 1000 第二期(1040-1080) 築造範囲 1000 第三期(1080-1120) 築造範囲 1000 第四期(1120-1160) 築造範囲 1000
	3	第一期(1000-1040) 築造範囲 1000 第二期(1040-1080) 築造範囲 1000 第三期(1080-1120) 築造範囲 1000 第四期(1120-1160) 築造範囲 1000
	4	第一期(1000-1040) 築造範囲 1000 第二期(1040-1080) 築造範囲 1000 第三期(1080-1120) 築造範囲 1000 第四期(1120-1160) 築造範囲 1000

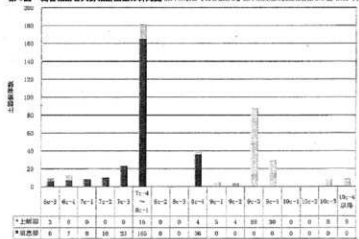
第2表 鞠智城跡史遷表(熊本県教育『鞠智城跡①』熊本県文化財調査報告第276巻 2012年)



第3図 石垣遺構の分類と編年(小畑信忠『古代山城出土遺物を中心に見た鞠智城跡の位置-547』『鞠智城と古代社会』第2号 2014年 熊本県教育)



第4図 鞠智城跡と大野城跡出土の軒丸瓦(熊本県教育『鞠智城跡①』熊本県文化財調査報告第276巻 2012年)



第5図 鞠智城跡出土土器の時期別数量比較図(熊本県教育『鞠智城跡①』熊本県文化財調査報告第276巻 2012年)

る谷があり、北方の丘陵上には同じく延喜式内社の日高神社が鎮座する。政庁跡は城内の中央東寄りにあり、南北 72m、東西 66mの長方形の瓦葺き築地塀内に正殿・後殿・左右脇廊が建ち、正殿には 2 回の建替えがある。政庁は 774(宝龜 6)年 7 月の蝦夷の攻撃と推定される大災で焼失、再建されなかった。横生城跡の外郭は、南北約 650m、東西約 800m で、築地塀・土塁・丸太材塀によって区画され、掘立柱構を伴う。城内から掘立柱建物跡や竪穴建物が見えられているが、比較的に短命な城郭と見られる。

767(神皇正統記)年 10 月に『三句に満たずして作』と『続日本紀』に記された伊佐城の遺跡は、宮城県東原市の北上川の支流二迫川の河岸段丘上、海拔 23m、周辺低地との比高約 7m の低い台地にある。城跡内の南寄りに南北 60m、東西 45m の築地で区画された政庁跡があり、正殿・後殿・前殿・脇廊等が配置され、大きく見て 3 回の変遷があり、2 回目に建物群には大災痕跡があり、780(宝龜 11)年の乱との関連が推定される。政庁の周囲には南北 240m、東西 180m の長方形に築地塀で区画した内郭があり、「コ」字形に建物群が配置された曹司の遺構がある。土塁と大溝で区画された外郭は、不明確ながら南北約 900m、東西約 700m と推定され、竪穴建物群が存在した。外郭東辺の竪穴建物跡から葺の青銅製機が出土している。

・ 胆沢城跡・志波城跡（9 世紀初頭～）

8 世紀末に北上川中流域の胆沢・江刺の蝦夷を制圧した律令政府は、802(延暦 21)年征夷大将軍坂上田村麻呂を胆沢城使に任命し、下向した田村麻呂が蝦夷の族長阿弭流為(あゐりなが)を降伏させると、翌 803 年にはさらに造志波城使に任命した。胆沢城の遺跡は、岩手県奥州市水沢区の北上川中流西岸、支流胆沢川との合流点の低位段丘にあり、海拔 47～50m、低地との比高約 5m の平坦な地形にある。ほぼ真南北を軸とした 1 辺 668m の正方形に築地で区画した外郭の中央南寄りに政庁がある。南北約 88m、東西約 86m の掘立柱構で区画された政庁跡の中央には正殿跡があり、掘立柱建物から礎石建物へと 3 期の重複があり、各期とも改修の痕があり、6 回の変遷が見られる。築地の内外に溝を設けた外郭には南北の門跡の他、掘立柱構跡が見えられている。城内には東方官衙地区・北方官衙地区と呼ばれる掘立柱建物群の曹司跡があり、3 期の変遷が知られ、出土した漆織文書や施釉陶器・土器等から I 期＝9 世紀初～前半、II 期＝9 世紀後半～10 世紀初、III 期＝10 世紀前半以降と推定されている。なお、胆沢城跡内では竪穴建物は発見されていない。

胆沢城造営の翌年に造営された志波城の遺跡は、岩手県盛岡市内、北上川の支流甲石川の南岸の海拔 130m、低地との比高 5m の低平な河岸段丘にあり、北辺が甲石川の氾濫で流失しているが、真南北を軸とした約 840m 四方の築地と外側の大溝によって区画される。中央南寄りの政庁は、一辺 150m 四方の正方形で、内外に溝を持った築地塀で囲まれ、前後 2 時期の正殿を始め東西脇廊。その他の掘立柱建物や四方の門が建つが、瓦は使用されていない。城内の外側から内側約 100m の範囲には竪穴建物群があり、胆沢城と異なる。志波城は 811(弘仁 2)年 12 月に遷立が決し、814(弘仁 6)年までに徳丹城となった。

岩手県紫波郡矢野町に遺跡がある徳丹城跡も北上川西岸の低位段丘に有り、一辺約 350

m の方形の城壁で、掘立柱門で区画された政庁を中心に掘立柱構のある築地塀・栗丸大材塀で圍繞された城内には掘立柱建物群や竪穴建物の工房等が見えられ、井戸跡から木製瓦が見えられている。

出羽国北部(秋田県)では、胆沢城造営とほぼ同時に弘里(ひろり)遺跡が造営され、810 年(弘仁年間)頃に第 2 次雄略跡となったが、正方形の規格性を持たない。出羽国南部(山形県)の庄内平野の山形県西田市の城輪(しろの)遺跡は、9 世紀の出羽国府跡と推定され、平地に構を伴う約 720m 四方の外郭内中央に方形の政庁がある。各時期を通じて、東北日本の古代城壁は、低い台地や段丘などに平面方形を規範とし造営され、政庁を中央にして曹司・倉庫・兵士の住居等が設置されていた官衙であった。

4 発掘調査成果による鞠智城跡の変遷と西海道の開拓

・ 鞠智城跡の遺構期と唐居敷・瓦瓦・土師の製作時期

海拔 145m 前後、比高約 100m の米原台地にある鞠智城跡の変遷について『鞠智城跡 II』は建物群・貯水池・城門・土塁に分けて 7 世紀第 3 四半期から 10 世紀第 3 四半期までの過程(第 2 表)と城内米原地区の建物遺構の時期別変遷を明らかにしている(第 2 図)。そのように、鞠智城は大野城等の朝鮮式山城と共に 7 世紀第 3 四半期に築造され(I 期)、7 世紀末の豊徳充実(II 期)を経て、8 世紀第 2 四半期に掘立柱建物群が礎石建物に変り(III 期)、8 世紀第 4 四半期に礎石建物が大型化し(IV 期)、858 年の不動倉大災を経て礎石建物が再建(V 期)されたとされる。また、3ヶ所の城門跡は構造・変遷が不明確ながら原位置を離れて遺存する唐居敷は、掘立柱門に取付る円形輪窓穴で方穴穴を欠く基肆城東北門跡と同型式で、小俣住室は大野城 1 型の唐居敷の省略型と見て大野城創建よりやや新しく位置付けている(第 3 図)。出土した瓦瓦で最も古い丸瓦・平瓦は行基葺き丸瓦と粘土板種巻き作り平瓦の組合せで、丸瓦に伴う瓦当は大野城跡主城原出土の 033 型式軒丸瓦に類似し、7 世紀第 3 四半期に位置付けられる(第 4 図)。さらに、鞠智城跡出土土器の時期別数量を比較すると、鞠智城築城以前の集落に伴う 6 世紀～7 世紀前半段階もあるが、7 世紀第 3 四半期から須恵器が増加し、7 世紀第 4 四半期～8 世紀第 1 四半期に圧倒的に数量が増加、土師器は畿内系など地元以外の製品が多くなる。8 世紀第 2・3 四半期は一転して土器の出土は皆無となる。8 世紀第 4 四半期に再び増加するが、地元の製品が多くなり、以降土師器のみが出土する(第 5 図)。

・ 鞠智城の創建

『鞠智城跡 II』は、鞠智城跡の創建を大野城・基肆城とほぼ同時期の 665(天智天皇 4)年乃至その直後とし、多くの研究者も認めている。この年代は発掘調査成果と矛盾が少なく、城内の貯水池跡で出土した百濟系青銅立像も、百濟亡命官人の築造への関与を推測させる。しかし鞠智城跡には、大野城(西海)等の朝鮮式山城跡や神籠石山城跡と大きく異なる点も指摘できる。すなわち、九州地方(西海道)の古代山城跡はいずれも有明海北岸以北にあって、2・3 の例外的に低い神籠石山城跡を除くと標高 200～400m の高い山上にあり、周

に北上川中流域(岩手県)を制した律令政府は、この地に胆沢(いさ)城・志波(しは)城・磐丹(いたん)城を順次造営し、やがて鎮守府を多賀城から胆沢城に移した。出羽国では9世紀前半にも不安定で、878(元慶2)年に実存の反乱で秋田城が炎上した。このように、東北日本の城柵は蝦夷への対応であった。

3 東北日本の城柵

・ 仙台郡山遺跡 (7世紀後半～8世紀初頭)

7世紀中葉に越国に建設された柵は、設置された地域は推定されながら具体的な遺跡は未発見である。しかし幸いに、ほぼ同時期に陸奥国内に建設されていた遺跡が確認されている。それが宮城県仙台市太白区にある郡山遺跡である。仙台郡山遺跡は、仙台市街地の南端、名取川支流の広瀬川南岸の海拔8～12mの自然堤防上に有り、I期官衙跡とII期官衙跡とが重複する。

上層のII期官衙は、真南北線を基準とした方4町(428m)を太い丸太材の材木柵で区画し、外側に大溝、更に外側に外溝が通り、南面中央に独立柱門、四隅等に独立柱の櫓があり、南方に寺院と大型の独立柱建物等の南方官衙や官舎・倉が並ぶ。郭内の中央や南寄りに正殿や石敷、方形の石組池がある。寺院には多賀城I期瓦葺きの軒丸瓦が使用されている。II期官衙は出土遺物の年代等から694(持統天皇8)年遷都の藤原宮を範として多賀城造営まで機能した陸奥国府と推定される。

I期官衙は、II期官衙跡の下層にあってN60°Wを軸線とした南北約600m、東西約300mの長方形で外郭は材木柵で区画されたと推定されるがII期官衙建設時に抜き取られている。郭内は細い丸太材の櫓・板櫓・独立柱柵等により細かく仕切られ、中央に独立柱建物と並ぶ中庭区、その南北に独立柱倉庫群や榭舎や堅穴の鍛冶工房が並ぶ。瓦を伴う建物は皆無で、土器は現地産が主体であるが、関東地方系土師器や畿内産土師器も出土する。I期官衙の中庭部の建物配置は郡家府政に類似すが、規模が4倍ほど大きく、外郭を丸太材柵で囲繞されるから、城柵施設と見られる。

・ 多賀城跡・秋田城跡 (8世紀中葉～10世紀)

多賀城の遺跡は、宮城県多賀城市北部の松島丘陵西端にある。8世紀以降10世紀まで陸奥国府であった多賀城の創建は史書に記されていないが720(養老4)年に按察使を殺害した蝦夷反乱鎮定後に建設と考えられ、多賀城跡に立つ『神亀元年(724)置く所也』と記す。約900m四方の不整形をした多賀城跡は、海拔50mの丘陵上から3mの平地までひろがっているが、平均高度は約30mで、中央南寄りの台地上に政府跡がある。真南北線を基準とした政府跡は南北約120m、東西約105mで、正殿を中心に左右対称に建物が配置され、発掘調査の結果4期の変遷が明らかになっている。第1期は平面長方形に築地で囲まれた中に正殿・左右脇殿が並び、正面に南門、門の左右と前殿と、すべて竪立瓦葺き建物で構成される。第II期は政府を質量共に最も充実した時期で、正殿・東西脇殿は瓦葺き礎石建物となり、後殿・東西横の礎石建物や石敷広場が付加され、築地は瓦

葺き寄礎石となり、南門裏郭、東西の築地には東殿・西殿、北辺築地にも北殿が新設される。第II期政府は天平宝字年間(729)に放生城・雄勝城の造営を指揮した藤原原美朝風による整備と推定され、『多賀城碑』は「天平宝字六年(729)朝風修造也」を記している。第II期政府は780(宝亀11)年の伊治郡領の反乱で炎上焼失した。第III期は焼失後の復興期で、小規模な竪立建物跡による応急的整備を行なった後に、礎石建物が再建された。第III期は869(貞観11)年の陸奥国大地震で大被害を受けた。第IV期は震災復興期で、主要建物群の復興が行なわれた。各建物の基礎は変り無いが、この時期の瓦が大量に出土しており、上部構造や屋根の被害が大きかったことを窺わせる。第IV期政府は10世紀中葉まで使われたと推定される。

多賀城の外郭施設も築地を基本として、政府と同じく4期の変遷があるが、規模は時期により異なり、第I期前半の外郭施設は小規模(約600m四方)で、その後半に約900m四方に拡張され、第II期に継承されるが、第III期に東辺北半が縮小される。各時期とも外郭の南・東・西辺に門が造られており、南門は政府中軸線の延長上にあつて、城内道路が一直線に通じる。第III期以降築地に東辺北部の東門と西辺南部の西門を城内道路がS字状に通じていた。第III期以降築地上に櫓が建設され、低地を通じる外郭は栗丸太材で構築されている。城内は、政府の他、行政事務官庁の曹司が建つが、第II期まで是小範囲に止まり、第III期以降に城内全域に広がる。第III期以降に東門内に兵士が生活する堅穴住居も設けられる。城外の東南方の台地に大宰府観音寺と類似した伽藍配置の寺院(観音寺?)、第III期以降に多賀城南・西方の低地に国司館等が並ぶ都市的景観が形成された。なお、多賀城の創建に前後して宮城県北部の大崎平野周辺の台地に新田遺跡(宮城県大崎市)・城生遺跡(宮城県加美郡加美町)・東山遺跡(同町)などが建設されている。

多賀城と並ぶ出羽国の中心的城柵の秋田城の遺跡は、秋田市街地の西西北方の旧雄物川河口東岸の海拔30～50mの砂丘砂で厚く被覆された高清水丘陵上にあり、秋田城は砂丘砂上に建設されている。城の中央にある政府は南北約77m、東西約94mの横長方形の築地櫓(後に竪立建物)で囲まれた中に正殿以下の櫓舎が左右対称に配され、正殿は同位置で6回の建替えがあり、5期までは竪立建物だが6期には礎石建物となっている。4期目の正殿跡に火災痕跡があり、白土で化粧した壁土片が発見されている。この火災は878(元慶2)年の蝦夷反乱によるものである。南・東・西に門が圍く外郭はほぼ方形ながら地形の制約から西北部が大きく内側に曲り込む。2期の瓦葺築地場から3期の丸太材柵に変わり、竪立柱櫓が付加される。城内には竪立建物や堅穴建物が建ち、城外東方には井戸や水洗便所を伴う榭舎建物や寺院施設がある。

・ 横生城跡・伊治城跡 (8世紀後半)

762(天平宝字6)年正月に横生城・雄勝城を造営した藤原原美朝風らを買した称徳天皇の命で「大河を跨え、峻嶺を渡ぎ」と表現された横生城の遺跡は、現北上川下流によって北上山から分断された宮城県石巻市北部の海拔65～80mの横生丘陵西南端にある。南方と西方は北上川の旧流路の古川を挟んで広い沖積平野に面し、東方は延喜式内社飯野神社のあ

第1表 古代日本東西の城・櫓 年表

西暦	西暦年	東日本 記事(出典)	西日本 記事(出典)
563	雄略天皇12		高麗大軍北國端の平、百濟降卒日爾羅が叛亂に召れ、國內東宮に暴亂を興く(雄略天皇紀)
647	文化 元	[治月文化発願(書紀)]	
647	文化 3	高麗諸國に淳安縣を遣り、郡戶を築く(書紀)	
648	文化 4	高麗諸國に淳安縣を遣り、郡戶を築く(書紀)	
650	齊明天皇4	[4月阿倍臣大野連・淳安の蝦夷を討討(書紀)]、高麗諸國に淳安縣を遣り、郡戶を築く(書紀)	高麗諸國に淳安縣を遣り、郡戶を築く(書紀)
650	齊明天皇5	[3月阿倍臣大野連、蝦夷を討討(書紀)]	高麗諸國に淳安縣を遣り、郡戶を築く(書紀)
663	天智天皇2		[3月庚辰、百濟白江以て唐軍新羅軍に敗戦(書紀)]
664	天智天皇3		高麗河海、魯城等にして人、海を築き、筑前にも城を築く(書紀)
665	天智天皇4		8月百濟軍を大津、E45門關と筑紫國の大野、諸城を築き(書紀)
667	天智天皇5		11月百濟軍を大津、筑紫國福島、筑紫國筑紫城を築く(書紀)
670	天智天皇6		高麗大津を築く(書紀)
670	天智天皇6		[3月丙午一戰、筑紫に二城を築く(書紀)]
672	天武天皇元		[6月壬申の亂(書紀)]、7月天武軍が三尾城(筑紫)を築く(書紀)
673	天武天皇2		11月唐軍に羅城を築く(書紀)
689	持統天皇3		8月大野郡に大野、羅城、鴨宮の三城を築造させ(書紀)
689	天武天皇2		[2月庚申、筑紫國福島、筑紫國筑紫城を築く(書紀)]
699	文武天皇3		[3月天武天皇に二城、羅城の二城を築造させ(書紀)]
700	文武天皇4		[2月雄略、筑紫國福島、筑紫國筑紫城を築く(書紀)]
701	大和 元		[6月高麗の多賀を討討、蝦夷(羅城)に羅城、城を築く(書紀)]
702	大和 2		
706	加藤 元		[3月熊鷹郡に山形郡を建て(書紀)]
707	加藤 2		[7月出羽郡(書紀)]
712	加藤 5		[9月出羽郡(書紀)]
713	加藤 6		
720	養老 4		[3月熊鷹郡(書紀)]
720	養老 4		[3月熊鷹郡(書紀)]
724	神龜 元		高麗加藤守守守大野軍人多賀城を多賀城(書紀)
733	天智 5		[12月出羽郡(書紀)]
737	天智 9		[4月熊鷹郡(書紀)]
740	天智 12		[3月大野少次郎熊鷹郡(書紀)]
742	天智 14		[1月大野少次郎熊鷹郡(書紀)]
743	天智 15		[12月大野少次郎熊鷹郡(書紀)]
745	天智 17		[3月大野少次郎熊鷹郡(書紀)]
749	天智 21		[7月熊鷹郡(書紀)]
758	天智天皇2		[12月熊鷹郡(書紀)]
768	天智天皇10		[12月熊鷹郡(書紀)]
772	持統天皇5		[10月熊鷹郡(書紀)]
780	宝龜 5		[7月熊鷹郡(書紀)]
780	宝龜 11		[3月熊鷹郡(書紀)]
802	延暦 21		[2月熊鷹郡(書紀)]
803	延暦 22		[3月熊鷹郡(書紀)]
804	延暦 23		[4月熊鷹郡(書紀)]
811	弘仁 2		[12月熊鷹郡(書紀)]
813	弘仁 4		[11月熊鷹郡(書紀)]
869	貞観 11		[8月熊鷹郡(書紀)]
870	貞観 12		[9月熊鷹郡(書紀)]
876	貞観 18		[3月熊鷹郡(書紀)]
878	貞観 20		[3月熊鷹郡(書紀)]
879	貞観 21		[3月熊鷹郡(書紀)]
885	貞観 27		[3月熊鷹郡(書紀)]
887	貞観 29		[3月熊鷹郡(書紀)]

も記載されているが、日本国内での恒久的な城・櫓の史料は7世紀中葉に始まり、系統的ながら9世紀末まで見られる。しかし、城・櫓の所在地は九州地方(西海道)を中心とした西南日本と、東北地方(東山道東辺)を中心とした東北日本に限られる(第1表)。

・西南日本の山城―新羅に対する備え

西南日本では、663(天智天皇2年)の白村江での惨敗を契機として、日本列島の唐・新羅の侵攻を恐れた倭(日本)政府は西海道(九州地方)を中心に畿内(近畿地方)まで各所に山城を築造したが、侵攻の恐れが弱まるとともに各地の山城を順次廃止した。しかし、新羅やその海賊への警戒は9世紀末まで続き、756(天平勝宝8年)への柏土城築城等も行われた。西南日本の山城は、基本的に新羅に対する対応であった。

・東北日本の城櫓―蝦夷(えみし)に対する備え

東北日本では、大化改新後に日本海岸の越国(後の越後国=新潟県)に淳足(あつし)・磐舟櫓を造り、櫓戸を置いて蝦夷に備えたことが見え、8世紀初頭の出羽郡、出羽国建禮と前後して出羽櫓が初見する。庄内地方(山形県)に造営と推定される出羽櫓が、733(天平5年)に秋田村高清水丘に移されて、後の秋田城となった。陸奥国(福島・宮城県)では、720(養老4年)の蝦夷反乱を契機として陸奥郡所が造られ、737(天平9年)に陸奥国北部に造営された多賀櫓、玉造櫓ら五櫓が初見する。749(天平21年)陸奥国小田郡での黄金産出が知られると、律令政府は陸奥国北辺への国域拡大を開始、相生(もろの)城・伊治(いぢ)城等を造営したが、蝦夷社会との緊張が激化し774(宝龜5年)相生城が攻撃され、780(宝龜11年)伊治城での伊治郡郡民の反乱から多賀城が炎上して、対蝦夷38年戦争に突入した。9世紀初頭



第1図 史料に見える古代日本の城・櫓 (熊鷹郡(書紀)『古代山城初現を考へる』2010年10月出版)

その内容は、東アジアの国々と日本との関係について考えるものになっている。7世紀の中ごろの朝鮮半島の情勢の中で、日本と友好関係にあった百済が滅ぶと、その再興を援助するために、日本は軍を送ったが、白村江の戦いで中国(唐)と新羅の連合軍に敗れた。その後の7世紀後半に、大和朝廷は国の守りを固めるために、山城を築造した。その山城の一つが鞠智城で、復元した八角形建物の写真が掲載されている。

【引用・参考文献】

- 熊本県文化財調査報告第276集『鞠智城跡Ⅱ—鞠智城跡第8—32次調査報告—』熊本県教育委員会 2012
熊本県文化財調査報告第4集『鞠智城跡—平成5—23年度鞠智城跡整備事業の報告—』熊本県教育委員会 2012

【基調講演】

鞠智城と古代日本東西の城・櫓

岡田 茂弘(国立歴史民俗博物館名誉教授)

1 はじめに

- ・ 鞠智城跡の調査整備と私—これが古代山城跡か?—

鞠智城跡の発掘調査は、1967(昭和32)年に始まり、断続的ながら現在まで50年近く継続されて、現在では城内地区の環境整備工事が行なわれている。

私は城内の米原台地構造改善事業(圃田)に伴う熊本県教委の緊急発掘調査中の1968(昭和43)年夏に現場を見学したが、「これは本当に古代山城跡か?」という第1印象を持った。その理由は大野城・基肄城跡等の朝鮮式山城や神籠石山城と地形・立地が余りにも違うことだった。だが現地で門の唐居敷(何れも動いていた)を見学し、半ばは山城跡と納得した。その後、1982(昭和57)年に宮野礎石群(SB49礎石建物跡)を見学、1986(昭和61)年から熊本県教委が本格的に継続した発掘調査に1988年から毎年アドバイスを行なうようになり、1990(平成2)年に熊本市で開催された第28回埋蔵文化財研究会『初期山城の再照明』で「城跡から見た古代山城」を発表して古代地方官説を主張した。鞠智城跡を保存整備するため1994(平成6)年に熊本県教委が保存整備基本計画検討委員会(委員長堀内清治熊本工業大学教授)を設置すると委員に就任、翌年からの保存整備事業に伴う鞠智城跡保存整備検討委員会でも委員として発掘調査と保存整備に助言を行ない、2011年(平成23年)から今年の3月まで同委員会の委員長を務めた。

- ・ 史料に乏しいが存続期間が長い鞠智城跡

鞠智城跡は2004(平成26)年に国史跡に指定されたが、663(天智天皇2)年に百済教授軍の白村江惨敗後大野城・基肄城等とともに築城されたと推定されながら、史書には創建の記載が無い。初見は698(文武天皇2)年5月の「大宰府をして大野・基肄・鞠智の三城を繕治せしむ」である。その後8世紀の史料には記載が無く、9世紀後半の『日本文徳天皇実録』868(天安2)年閏2月の条に「肥後国言う、菊池城院の兵庫の鼓自鳴。又鳴る」、同年6月の条にも「大宰府言う(中略)、又肥後国菊池城院兵庫の鼓自鳴。同城不動倉十一宇火けり」の記載があり、『日本三代実録』879(元慶3)年3月の条「肥後国菊池郡城院の兵庫の戸が自鳴す」をもって、史料から姿を消す。7世紀後半に相次いで築造された西海道(九州)の城で9世紀後半までの存続が史料上で知られるのは、鞠智(菊池)城と大宰府の北辺にある大野城しかなく、大宰府から南に離れた鞠智(菊池)城は際立って長く存続している。

- ・ 史料では追えない鞠智城を発掘調査成果と古代日本の城・櫓変遷から考える

2 史料による古代の城・櫓の変遷

『日本書紀』等の六国史には神話伝説上の城や臨時の要害施設あるいは朝鮮半島の山城

号は鞠智城のあらし。第2号は建物遺構、第3号は貯水池跡について。第4号は城門跡、土塁跡。第5号は出土遺物について。第6号は鞠智城の変遷[写真11・12]。



写真11 一般向けの紹介本



写真12 子ども向けの紹介本

(4)『歴史読本』の特別副読

蒲島郁夫(熊本県知事)・五百旗頭真(熊本県立大学理事長)・佐藤信(東京大学大学院教授)の三氏による「古代日本の防衛最前線—鞠智城」の特別副読を鞠智城跡で行い、『歴史読本』2015年3月号に掲載した。その一部を抜粋すると、蒲島知事は鞠智城の戦略的な位置づけを考えるうえで、熊本県として研究を深めていく必要があるとの話。五百旗頭理事長は白村江の戦いのあとの時期につくられた鞠智城は非常にロマンを感じさせる史跡であるとの内容。佐藤教授は白村江の戦いを契機に、中央集権的な律令国家が必要になり、そのことが日本の国づくりを加速させたとの話であった[写真13][本日の配布資料]。



写真13 温故創生館内での副読

(5)平成27年度までの主な取組み(7月までの主なもの)

①山鹿市立城北小学校での家庭教育学級での講演会

5月に鞠智城跡の北側にある城北小学校で、保護者と5・6年生を対象とした家庭教育学級での講演会が実施され、講師としての役割を果たした。講演内容は、城北の宝である鞠智城の概要説明と今後宝物として大切にしていきたいとの願いを伝えた。子ども達からは鞠智城に関わる色々な質問がたくさん出て、活気ある講演会で、城の大切さや良さが伝わったと確信した[写真14]。



写真14 講演会の様子

②志波城のイメージキャラクターとの交流

6月に、岩手県盛岡市の志波城跡の「しわまろくん」と鞠智城跡の「ころう君」とが交流を深めました。志波城跡の南門前の広場で、地元の幼稚園・保育園児と楽しい時間

を過ごすことができました。大変有意義な交流会でした。



写真15 志波城跡南門で園児たちと記念撮影

③山鹿市立六郷小学校での道徳の授業

熊本県教育委員会では、道徳が教科になる以前の平成24年に、「熊本の心」という道徳教育部資料を作成した。その取組みは全国から注目をされている。その中の小学校5・6年資料の冒頭に「鞠智城のなぞ」という教材が掲載されている[写真16]。



写真16 道徳教育用郷土資料『熊本の心』平成24年(熊本県教育委員会)

この教材を利用した授業が6月に、地元の小学校の5年生クラスで実施された。この授業の「おらい」は、鞠智城という郷土の文化財を大切に、地域の一員として、それを愛する心を持ち、郷土の発展に尽くそうとする態度を養うことである。この授業で、温故創生館職員は、鞠智城跡の発掘調査の苦労やその成果などの児童の質問に答え、その大切さを伝えるゲストティーチャーとしての役割を担った。児童達はグループで話し合い、ごみ拾いをするなどの自分達でできることを授業の最後に発表した。ゲストティーチャーとしての授業のまとめと感想は、子どもたちが自分の



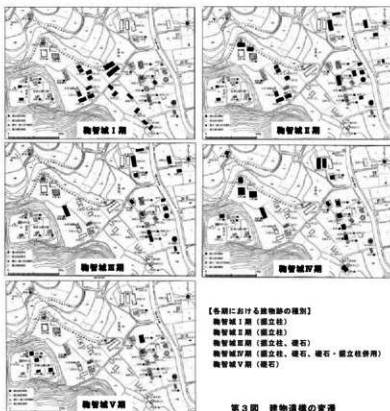
写真17 道徳授業の様子

課題として、文化財の大切さを実感できおり、郷土を大切にすることが育成されていることがすばらしいと感じた。

最後に、「鞠智城の保存と活用をバトンを君たち(児童)に渡すので、きちんと次の走者にバトンをつないでほしい」との願いと伝えた。きっと、子どもたちは私の願いを叶えてくれると信じている[写真17]。

④小学校教科書への掲載

平成27年度版の教育出版の教科書『小学社会6上』に、鞠智城のことが教材として採用されている。『②大陰に傘だ国づくり』の単元の末尾にある「もっと知りたい」という発展的な学習内容として取り上げてある。



第3図 遺物遺構の変遷

これらの総括報告書の成果を基礎に発展的な研究を掲載したものが『鞠智城跡Ⅱ』論考編1、論考編2である。これらの論考には、古代山城に関わる諸分野の専門家と鞠智城跡の担当者が携わった。また、研究者と担当者による出土土器・瓦の生産地推定の基礎的研究も行っている[写真8]。



写真8 研究成果報告書



5 調査成果を活かした取組み

(1) 鞠智城シンポジウム

平成21年7月から、実施年ごとにテーマを設定して、ほぼ継続的にシンポジウムを開催してきた。平成22年以降のシンポジウム成果報告書は鞠智城ホームページで公開している。開催年ごとのテーマと会場は以下の通りである。

- ・平成21年7月「古代山城・鞠智城を考える」東京都・砂防会館
- ・平成22年8月「東アジアの中の古代鞠智城」東京都・砂防会館
- ・平成24年8月「ここまでわかった鞠智城 鞠智城解明の最前線」熊本テルサ
- ・平成24年9月「ここまでわかった鞠智城 古代山城の歴史を語る」九州国立博物館
- ・平成25年7月「古代山城の成立と鞠智城—律令国家への道と東アジア—」東京国立博物館
- ・平成25年9月「古代山城の成立と鞠智城—築造技術の源流—」大阪府・ドーンセンター
- ・平成26年7月「律令国家の確立と鞠智城—698年「鎮治」の実像を探る—」明治大学アカデミーコモン・アカデミーホール
- ・平成27年9月「律令国家と西の護り」古代山城の中での鞠智城の役割・機能を考えるとともに、東北の古代城跡と比較する。明治大学アカデミーコモン・アカデミーホール

(2) 「特別研究」(若手研究者育成事業)

平成24年度から、鞠智城跡をテーマにした「特別研究」事業を始めた。この事業は若手研究者(45才以下)の育成を目的にしたもので、応募者の中から5名を選定し、年度内に研究論文を提出するものである。その研究は『鞠智城と古代社会』の論文集[写真9]に掲載し、3月にはその研究成果の発表会[写真10]を行っている。選定された考古学・文献史学の研究者には研究費として30万円を助成している(平成27年度は50万円)。



写真9 『鞠智城と古代社会』の論文集



写真10 バレアホール(熊本市)での発表会

(3) 調査成果概要の紹介本

平成24年度～26年度で、調査成果をわかり易く解説した冊子を6部構成で作成した。この冊子には一般向けと子ども向けの二種類がある。各号の内容は次の通りである。第1



銅造菩薩立像



「善人忍口五斗」銘木鐸



銅器群



土師器



草井八雲遺筆文軒丸瓦



木製品(平鍬・横槌)

写真2 鞠智城跡の出土遺物

【鞠智城Ⅰ期（7世紀第3四半期～第4四半期）】

I期は鞠智城の創建期である。創建年代は、『続日本紀』文武2（698）年に「繕治」した大野、基跡の2城の創建（665）とほぼ同時期に推定している。外郭線上に3箇所、城門、土厚跡、城内に雁立柱建物、貯水池などを緊急的に整備し、城としての最低限の機能を備えた段階と考えられる【写真3・第3図】。



堀切門・門跡と遺跡跡 池ノ堀門・石垣跡 西側土厚跡・土師器 貯水池・貯木場跡

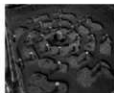
写真3 鞠智城Ⅰ期の遺構

【鞠智城Ⅱ期（7世紀末～8世紀第1四半期前半）】

Ⅱ期は鞠智城の隆盛期である。「L」字形に雁立柱建物を配置した管理棟の建物群とそれを取り囲む区画溝が出現する。建物群を取り込んだ区画溝はこの箇所だけのものである【第2図】。この遺構群の南側に八角形建物【写真4】や総柱建物を配置するなど【第3図】、城内施設の充実が図られる。土器の出土量はこの時期が最も多く、城の管理・運営に多くの人員が配置されものと考えられる。



第2図 管理棟的建物群



南側八角形建物跡

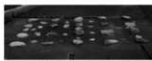


北側八角形建物跡

写真4 鞠智城Ⅱ期の遺構

【鞠智城Ⅲ期（8世紀第1四半期後半～第3四半期）】

Ⅲ期は鞠智城の転換期である。城内の建物配置はⅡ期を踏襲しながらも、総柱建物が小型礎石を使用した礎石建物【写真5】に建て替えられる【第3図】。出土土器の空白期に当たることから、城の存続に必要な最小限度の維持・管理がなされていたと考えられる。



65号建物跡（次の鞠智城Ⅳ期の礎石建物跡と重複しており、小型の礎石のぼうが65号建物跡）

写真5 鞠智城Ⅲ期の遺構

【鞠智城Ⅳ期（8世紀第4四半期～9世紀第3四半期）】

Ⅳ期は鞠智城の変革期である。管理棟的建物群の消失や貯水池中央部の機能低下がある一方、Ⅲ期の礎石建物が大型礎石を使用した礎石建物【写真6】に建て替えられ【第3図】、食糧等の備蓄機能が主体となる。これら建物群は、当該期末に焼失しており、『文徳実録』天安2（858）年の不動倉火災との関連が想定される。



20号建物跡

写真6 鞠智城Ⅳ期の遺構

【鞠智城Ⅴ期（9世紀第4四半期～10世紀第3四半期）】

V期は鞠智城の終末期である。城内の建物数は減少し、城の機能は低下するものの、大型の礎石建物を建て直すなど、食糧等の備蓄機能は存続する【第3図】。

4 総括報告書を基にした研究の深化

鞠智城跡については、平成23年度に発掘調査の総括報告書、平成24年度に整備事業の総括報告書を刊行した【写真7】。『鞠智城Ⅱ』は、第8次（昭和61年度～第32次（平成22年度）の発掘調査成果を総括したものである。平成5年度～平成23年度の整備事業をまとめたのが『鞠智城跡』の文化財整備報告書である。



写真7 総括報告書

(1) 時期区分と変遷の概要

鞠智城跡は、7世紀後半から10世紀中頃まで存続した。城としての役割・機能変化の検討を加え、鞠智城Ⅰ～Ⅴ期の5期に及ぶ変遷を明らかにしている。



第1図 鞠智城跡

六国史にみる鞠智城 國史大系 吉川弘文館

甲申、令^レ大宰府一掃^レ治大野。基肆、鞠智三城。
 「(巻下)七」
 「(中)大宰府をして大野、基肆、鞠智の三城を併い治めしむ」
 『日本書紀 文皇實錄二(609)年五月二十五日集』
 「(巻下)七」
 「丙辰、肥後回貢。菊池城院兵庫鼓自鳴。丁巳、又鳴。
 「(巻下)七」
 「丁巳、又鳴る」
 『日本書紀 皇極實錄 天武二(693)年二月二十四日二十五日集』
 「(巻下)七」
 「肥後國菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」
 「(巻下)七」
 「丙辰、肥後國菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」
 『日本書紀 皇極實錄 天武二(693)年六月二十日集』
 「(巻下)七」
 「(中)鞠智城跡」
 『日本書紀 皇極實錄 天武二(693)年三月十六日集』

資料1



写真1 鞠智城跡・長者原地区の建物跡(南東上空)(平成9年度撮影)

鞠智城東京シンポジウム
律令国家と西の護り、鞠智城

～古代山城の中での鞠智城の役割・機能を考えてともに、東北の古代城跡と比較する～

日時：平成27年9月6日（日） 13:00～17:40
 場所：明治大学アカデミーコモン・アカデミーホール（東京都千代田区神田駿河台1-1）
 主催：熊本県、熊本県教育委員会、明治大学日本古代学研究所
 後援：水城・大野城・基肆城1350年事業実行委員会、明治大学博物館
 明治大学社会連携機構、福岡県教育委員会、熊本県文化財保護協会

日程

- 11:30 開場
 13:00 開会
 あいさつ 熊本県副知事 小野 泰輔
 明治大学日本古代学研究所長 吉村 武彦
 実況紹介
 13:20 報告 13:20～13:40
 「鞠智城跡の調査成果概要と取組み」
 西住 欣一郎（熊本県教育委員会）
 13:40 基調講演 13:40～14:40
 「鞠智城と古代日本東西の城・堀」
 岡田 茂弘（国立歴史民俗博物館名誉教授）
 14:40 休憩
 14:55 講演① 14:55～15:35
 「古代山城の建物—鞠智城と大野城・基肆城—」
 赤司 善彦（福岡県教育庁総務部文化財保護課長）
 15:35 講演② 15:35～16:15
 「平安期における鞠智城—9世紀～10世紀の内外関係と「菊池城跡」—」
 加藤 友康（明治大学大学院文学研究科特任教授）
 16:15 休憩
 16:30 パネルディスカッション 16:30～17:40
 コーディネーター 佐藤 信（東京大学大学院人文社会系研究科教授）
 パネラー 岡田 茂弘（国立歴史民俗博物館名誉教授）
 赤司 善彦（福岡県教育庁総務部文化財保護課長）
 加藤 友康（明治大学大学院文学研究科特任教授）
 西住 欣一郎（熊本県教育委員会）
 17:40 閉会

※8/25～9/6 「鞠智城展」を開催（アカデミーコモン1F 展示スペース）

【報告】

鞠智城跡の調査成果概要と取組み

西住 欣一郎（熊本県教育委員会）

1 鞠智城跡の位置と環境

鞠智城は、東アジア情勢が緊迫する7世紀後半、朝鮮半島における白村江の敗戦（663）を契機に、北部九州の防衛拠点として構築された古代山城である。

その城跡は、熊本県の北部、阿蘇北外輪山から有明海へと西流する一級河川菊池川（総延長72km）の中流域、山鹿市、菊池市の市境に位置する。鞠智城跡は菊池川河口から直線距離で約27km遡った箇所が存在する。県境の筑肥山地の主峰、八ヶ岳（標高1,052m）南西麓に形成された丘陵地帯の南端近く、標高約145mの台地状の丘陵上（通称：米原台地）に、鞠智城は立地している。その南には、菊池川沿いに発達した肥沃な菊池盆地が広がる。この地は、古代律令制下、肥後国菊池郡に属し、城跡周辺に残る「木野」地名から、『和名類聚抄』にみる「城野郷」に比定されている。

鞠智城跡の城域については、古くから広域説、狭域説が論じられてきたが、現在では、狭域説のうち、土塁跡と土溝で囲繞する周長約3.6km、面積約55ha、標高約90～171mの範囲を城域（第1図）とする。その範囲を包括する約64.8haが平成16年に国史跡として指定されている。

2 文献にみる鞠智城跡

大野城跡や基肆城跡などは『日本書紀』に創建の記載（665）があるが、鞠智城跡には創建の記録はない。鞠智城跡が文献上に登場するのは、『続日本紀』文武天皇2（698）年5月条の修復記事である。それは「大宰府をして、大野、基肆、鞠智の三城を繕治せしむ」との記録である。その後、『日本書紀』天武天皇2（686）年2月・6月条、『日本書紀』天武3（679）年3月条に鞠智城跡の記載がある[資料1]。

3 調査成果の概要

鞠智城跡の発掘調査は、昭和42（1967）年度に第1次調査を行い、平成22（2010）年度までに第32次の調査を実施した。その調査成果は『鞠智城跡Ⅱ』（2012）に総括されている。主な成果は次の通りである。古代山城では唯一の八角形建物跡をはじめとする72棟の建物跡（写真1）や約5,300㎡の規模を誇る貯水池跡、外郭線上に城門の門礎石、版築工法による土塁跡などの遺構が検出されている。遺物としては、須恵器、土師器などの土器や卑土系葦原系瓦葺瓦をはじめとする瓦類、建築用材、木製品に加え、『瀬人忍口五斗』銘の付札木簡や百済系の銅造菩薩立像など（写真2）が出土している。

総括報告書の『鞠智城跡Ⅱ』では、72棟の建物跡については、その切り合い関係や主軸方向等を検討して、時期区分と変遷を考察している。それらの概要は以下の通りである。

資料編

鞠智城東京シンポジウム2015
成果報告書

鞠智城東京シンポジウム二〇一五 成果報告書

律令国家と西の護り、鞠智城

～古代山城の中での鞠智城の役割・機能を

考えるとともに、東北の古代城柵と比較する～

発行年月日 平成二八(二〇一六)年三月三二日

編集・発行 熊本県教育委員会

〒八六一一八六〇九

熊本市中央区水前寺六丁目一八番二号

電話 〇九六一三八三二二二(代表)

サンコー・コミュニケーションズ株式会社

印刷



発 行 者：熊本県教育委員会
所 属：装飾古墳館
発行年度：平成27年度

この電子書籍は、律令国家と西の護り、鞠智城 鞠智城シンポジウム成果報告 2015 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、古代山城がある市町村教育委員会、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：律令国家と西の護り、鞠智城

鞠智城シンポジウム成果報告 2015

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦 2022 年 7 月 21 日